

---

# ゼロ戦才人 第4部 未来への分岐点

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロ戦才人 第4部 未来への分岐点

### 【Nコード】

N1917F

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

地球からの技術移入によって発展するトリステイン。しかしながら大国ガリアとゲルマニアとの関係は日増しに悪化していた。そんな中で、才人の曾祖父率いる「東方義勇軍」は、ハルケギニアのため動く。

## 未知との遭遇 上

アルビオン解放戦争が終わってから半年、ロマリア教皇のヴィックトリオがトリステインを訪問してから2ヵ月後のその日、トリステイン王国科学研究所所属の蒸気探検船「オストラント」号がトリステインの北東500kmの海上を東に向けて航行中であつた。

同船がこの海域に進出していたのは、もちろんこれまでに発見されていらない島の発見や、ほとんど未知と言ってよい大陸東側の調査であつた。

ゲルマニアの東に国があることは、ハルケギニアでも噂話程度には知られていた。しかしながらその国と積極的に関与している国はない。なぜならゲルマニアの東側の国境から30kmも入れば、そこには多数の幻獣が生息する、通称「魔の森」が広がっているからである。

この森のおかげで、人はそれ以上の陸からの東進を妨げられていた。また海路は開発が不十分であつた。さらに空路は飛行船の航続力の関係で行くことが出来なかつた。

しかしながら、地球からの技術移入で造られた「オストラント」号なら理論上可能であつた。この船は石炭を満載すれば、巡航速度15ノットで2000海里（約3700km）の航続力を誇つたからだ。

その「オストラント」号が石炭と真水などの補給のためにハシラ島の泊地を出たのは前日の早朝のことだった。幸いにも天候は晴天続きで、波も穏やかだった。だが油断は出来ない、未知の海である

から当然海図も地図もない。だからどこに岩礁や不規則な潮の流れがあるかもわからない。そのため船の両舷、船首船尾、マストの上に設けられた監視塔には四六時中双眼鏡や望遠鏡を持った乗員がづめて見張っていた。

その内の一人が伝声管に向かって叫んだのは、正午を回った頃であつた。

「前方30度に艦影と煤煙を確認!!」

この報告は、聞いていた全ての人間を震撼させた。彼らが知る範囲では蒸気船を実用化しているのはトリステインとアルビオンの2カ国だけである。しかしこの海域に両国の艦船が現れるのは考えられない。つまり、噂に聞く東の国の船である可能性が高い。その正体を確認するのも「オストラント」号の任務の一環であつた。

船長はただちに命令を下した。

「未確認の船舶に接近する!! 面舵30度。機関速力2分の1。」

「オストラント」号は発見した艦影の方角に舳先を向けた。

すると、艦橋へある人物が駆け込んできた。

「船長、未確認の船を確認したというのは本当ですか?」

興奮して船長に声を掛けてきたその男は、今回調査任務に同行した科学研究所所長のコルベールだった。

「ああ所長、ええ本当です。現在確認するために接近中です。とこ

るで、砲に乗員を配置しておきますか？」

「オストラント」号には自衛用の火気として127mm砲2門と75mm砲4門、対空砲2門、さらに機関銃2挺が搭載されていた。同型艦の「ビフレスト」級の半分の武装であるが、ハルケギニアで一般的な木造の帆船相手なら過剰すぎるほどの武装である。

船長は相手の船が万が一襲ってくる場合に備えて、戦闘配置を出そうか迷っていた。

「それは少し待ってください。相手を挑発するかもしれないので。ただし、いつでも配置できるようにはしておいてください。」

さすがに元軍人だけあって、コルベールは期待する一方で、最悪の事態も想定していた。

「わかりました。しかし水偵が使用できていれば、もっと早く相手を確認できたかもしれませんね。」

「ないものねだりを言っても仕方ありません。」

「オストラント」号には後部甲板に小型の水上偵察機が搭載されていた。これは異世界地球で購入、持ち込まれたもので速度は遅いが軽量で、しかも操縦性が良かった。ただし、飛ばすときには一々デリックで海上に降ろさなければいけないので面倒くさい。また海上での使用ということで整備を入念に行う必要があり、この日も午前中は整備に充てられ、飛行は午後からの予定だった。

ちなみにパイロットは『東方義勇軍』からの出向者が務める。

「とにかく、相手の正体を確かめないと。くれぐれも軽率妄動は慎んでください。」

「わかりました。」

船長は再び伝声管を使って乗員たちに命令を伝えた。

それから30分ほどして、双眼鏡を使えば相手の艦影がほぼ確認できるまでになった。

相手の船は「オストラント」号に反航する形で近づいてきた。「オストラント」号と同じく蒸気船のようで、艦中央部にある2本の煙突からは黒い煙が立ち上っていた。また前部と後部には明らかに大口径の大砲を乗せているのがわかる。どうやら相手は軍艦のようだ。

「船長、船長はあの船の旗を見たことはあるかね？」

「いいえ。初めてです。」

相手の船は船首と船尾に旗を掲げていた。船首の旗はオレンジを下敷きにして、中央に鳥の絵（後に双頭の鷲と判明）、船尾の旗は白地に青い変わった形の十字が描かれていた。（後に鉤十字と判明）

「ということは、あの船は噂に聞く東の国の軍艦かな？」

コルベールが呟いた直後、相手のブリッジの上部で、光が点滅するのが見えた。発光信号である

「信号員、相手の信号の内容がわかるか？」

船長がブリッジ横の発光信号機の側に立っていた兵士に聞いた。

「ええと、ちょっと待ってください……あ！読めます。わかります。『我ロマノフ公国海軍北洋艦隊巡洋艦「クロンシュタット」』なり、貴船の所属を問う。』以上です。それを繰り返しています。」

するとすぐにコルベールが言った。

「返信を。『我トリステイン王国探検船「オストラント」号なり、敵意なし。会談を行いたし。』今の内容を送ってください。」

「わかりました。」

信号兵は言われた通りの内容を直ぐに打ち始めた。その間にコルベールは船長に命令した。

「船を止めてください。」

「はあ？止めるんですか？しかし、相手は軍艦のようです。攻撃に備えるなら、止めないほうが良いのでは？」

船長が怪訝な顔をして言うが、コルベールは頑として自分の命令を通す。

「いいから、止めてください！！」

結局この意見に引きずられる形で、船長は停船命令を出した。

「わかりました。機関停止！！」

まもなく、「オストラント」号の機関は停止し、船は惰性で動くのみとなった。

すると、それまで反航する形で走っていた相手の船は、急転舵して「オストラント」号と並走する形をとり、そのまま同じように機関を停止した。そして『これより使者を送る』という信号が来た。

コルベールはブリッジから出て、数百mまで近づいた相手の船を見る。

前部と後部の甲板上に設置された大口径砲も目立つが、甲板上に多数置かれた中小口径の砲もその存在感を見せ付けていた。もつとも、それらの周りにはこちらを観察しようとする兵士たちが鈴なりとなって集まっていたが。

そして20分ほどして、その甲板からボートが降ろされるのが見えた。着水したボートは数人の人間を乗せて、こちらに向かってきた。

コルベールは船長に、タラップを降ろすよう命令した。



## 未知との遭遇 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 未知との遭遇 下

「クロンシュタット」と名乗った巡洋艦からやってきたボートは、「オストラント」号のタラップの下に着いた。そしてすぐに乗っていた人間が何人かタラップを駆け上がってきた。

タラップを上がってきた人間は併せて4人。その内先頭を切つてやって来た50代と思しい男は、服装からして高級士官であるようにコルベールには見えた。また付き従う3人も、少なくとも士官であるようだった。

彼らが全員甲板へ上がったところで、まずコルベールが前に出た。

「ようこそ、トリステイン王国所属、探検船「オストラント」号へ。私は当船の最高責任者であり、調査団団長を勤めているジャン・コルベールです。」

コルベールの挨拶に答える形で、最先任と思われる男が敬礼して言った。

「ロマノフ公国海軍北洋艦隊巡洋艦「クロンシュタット」艦長のイワノフ大佐です。」

この光景を地球出身者が見ていたら、大きな違和感を持つことだろう。何せ数百キロも離れた国の人間が同じ言語で喋っているのだから。

だがコルベールにとってはそんなことは頭になく、彼らの正体をしっかりと把握することだけを考えていた。

「それでは早速会談を行いたいのですが、艦内の会議室へと入って  
もらって宜しいでしょうか？」

するとイワノフは隣にいた士官と、コルベールたちにはわからないように小声で話し合って相談した。

「良いでしょう。ただし我々に対して武器の携帯を許可していただきたい。」

彼は腰に提げた拳銃用のホルスターを叩きながら言った。もっとも、相手が全く正体のわからない人間たちであるなら、警戒して当然である。コルベールもかつては軍人であったので、彼らの心境はよくわかる。

「わかりました、許可しましょう。さあ、こちらへどうぞ。」

コルベールはイワノフらを船内へと案内した。

「オストラント」号は、現在トリステイン海軍に所属している「ビフレスト」級巡洋艦と同型艦である。しかしながら、探検船であるため武装は半減されており、その分乗り組む乗員の数もカットされている。代わりに調査団の人間や、観測用機材を搭載できるスペースが確保されている。

今コルベールがイワノフたちを案内した会議室も、本来は調査時に収集した物を保管、または研究するためのスペースを兼ねているため、「ビフレスト」級より広めにとられていた。逆に軍艦ではないので、装飾などは一切施されておらず、会談に使うには殺風景とも言えたが。

とにかくその会議室の長机を挟む形で両者は座った。トリステイン側にはコルベールと船長、そして今回調査団アドバイザー役として義勇軍から同行していた亀山教授が参加した。

亀山教授は才人の祖父である才蔵の友人である物理学者だ。現在は大学教授を辞して、このハルケギニアで主に次元に関する研究を行っている。

さて、その彼らと向かい合う形で座ったイワノフが、まず口火を切った。

「それでは、まず聞かせていただくが、あなた方が先ほど信号で伝えてきたトリステイン王国とはいかなる国かな？ 私はそのような名の国、見たことも聞いたこともないのだが。」

これはコルベールも予想していた質問であっただけに、すぐに返答することが出来た。

「それについては、後で地図を使うなどして説明させて頂く。こちらからも質問させて頂きたいのだが、ロマノフ公国という国を我々は全く知りません。つきましては、是非ともそちらの国について教えていただきたいのですが。」

すると、イワノフたちは顔を見合わせた。

「我が国のことを知らない？ もしやあなた方は西の地よりやってきたのですかな？ だが、西の地に蒸気機関を開発できるほどの文明国があったとは・・・まあ、詳しいことは後ほど聞きましょうか。我が国のことを知らないなら地図をお見せしましょう。おい。」

彼は部下の一人に命じて地図を出させた。

広げられたその地図を、コルベールも船長も亀山も覗き込んだ。

「こ、これは――！」

コルベールはそれを見るなり絶句した。船長も驚きに目が点になっていた。またハルケギニア人ではない亀山も驚きを隠せなかった。

「ハルケギニアの地図には絶対に描かれていないゲルマニアの東側が描きこまれている。その代わりそれより西、さらに南の部分が欠けている。」

亀山も、この世界が地球にかなり似通っている世界であることは承知していた。そうになると、地球で言うところのアフリカ、アメリカの両大陸や、ハルケギニアから地続きの形で中東、アジアに類する土地があるはずだ。

しかし見せられた地図に描かれているのは、地球で言うところのロシアに関する部分のみだ。その周りにはあるはずの中近東や東アジアに関しては何も記されていない。

「このような地図は初めて見ました。」

コルベールが唸りながら答えた。一方亀山は質問をした。

「この地図の東側、ならびに南側についてはどうなっているのかわかりますか？」

「一応私の知っている範囲ですと、東の地には秋津州と名乗る島国と、中華帝国という大帝國が存在することは聞いたことがあります。またこの地図からみて南西の地には、我々とは根本から違う異民族の国があります。それらの国々は我が国と交易が始まったばかりや、国交がないので、地図には載っておりません。」

彼らにもそれ以上のことはわからないようだ。

「良かつたら、そちらの地図も見せて欲しいのですが？」

イワノフの求めに応じて、すぐにコルベールがハルケギニアの地図を用意させた。

先ほどのコルベールたちと同じように、今度はイワノフらがハルケギニアの地図を食い入る様に覗き込んだ。

「これは・・・」

「西の地はこのようになっていたのか!？」

やはり驚嘆の声が聞かれる。

「いやはや、西の地に国があることは噂に聞いていましたが、まさか本当にこれだけの国があり、あまつさえ蒸気機関を実用化できるだけの科学力があるとは。」

その言葉にコルベールは困った顔をした。確かにハルケギニア自身でも科学力向上に努めてきたが、実際のところかなりが地球から移入した技術である。つまりは模倣に近い。だから素直にハルケギニアに科学力があるとは言い難かった。

しかし、そのことは胸の奥にしまい込んで、コルベールは逆に質問をした。

「ところで、そちらの国にも蒸気機関がぁおりのようですが、なぜ西への進出を行わなかったのですか？」

するとイワノフが答えた。

「我が国の海は、冬になると半年ほど結氷して船は身動き出来なくなります。そのため砕氷能力のある船が出来るまで、長きに渡って遠洋航海を行うことが出来ませんでした。それに、西は未開の地であつたために、よつほどの物好きでない限り誰も行こうとは思えませんでした。政府が海軍力を整備したのも、ここ最近のことですし、目的も本来は東や南側の国々に対抗するためです。本艦は一応西側国境の警備任務に就きましたが、これだつて極最近始まつたばかりのことです。」

地球とは違う環境が、ここでも地域間の交流を大きく阻んでいるようだ。しかしながら、言語や文字が皆一緒というのは地球では考えられないことだつた。

「とにかく、我々があなた方と出会えたのも何かの縁でしょう。是非とも国の上部の方に我々のことを教えていただきたいのですが？」

「そうですか、ちょっとお待ちください。」

コルベールの提案に、イワノフは部下たちとしばらくの間議論していた。そして。

「わかりました。とりあえずこの船を、最寄の港まで誘導します。我が国における安全については私が保証しますので、とりあえずご安心下さい。ただし、一応そちらの船は武装しているようなので、こちらとしては警戒を解くわけにもいかないことを御了承いただきたい。」

「わかりました。誘導よろしくおねがいします。」

こうして、「オストラント」号は、巡洋艦「クロンシュタット」に誘導されて、一路一番最寄の港であったリバウに向かって航行を再開した。



## 未知との遭遇 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 驚愕の御前会議

ハシラ島を出発した「オストラント」号は、予定通り1ヶ月後に調査航海を終えてトリステインに帰ってきた。そして同船の持ち帰った情報は、トリステイン政府を驚愕させるに十分なものだった。

これまで未開の土地とされていた東の地における大国の発見というニュースに、多くの人間は最初半信半疑であった。そこでただちに調査団長のコルベール、さらに状況の一部を映像に納めていた亀山教授が、トリスタニアの王宮に召喚された。そして彼らが見せた映像や写真によってそれが事実であると確認された。

ただちに緊急の会議が開かれ、代王であるルイズや枢機卿のマザリーニをはじめとするトリステイン政府の重臣たちが参加した。また、先月から王室つき連絡士官に任命された平賀才人義勇軍中佐も、末席にはあるが参加していた。

ちなみに、最近になって各国との外交を専門にする外務省が立ち上げられ、そのトップである外務大臣はマザリーニが兼務することとなった。

会議はまず、今回コルベールたちが出会ったロマノフ公国がいかなる国であるか、彼らからの報告が行われた。なお、ロマノフ公国女王より親書が渡されていたが、それは事前にルイズの手元に渡っていた。

「我々が今回訪れたロマノフ公国は、人口約2億を誇り、面積もハルケギニア全てを併せても及ばないほどの巨大な国です。」

その一言で、会場内にいた人間は一斉にどよめいた。ハルケギニアの人口は各国併せても6000万人程度だ。その3倍もの人間を擁する国があるというのだから、驚いて当然だった。

さらに、彼が持ち帰った地図のコピー（もちろんこれは才吉らが持ち込んだ地球製のカラーコピー機でコピーした）が配られると、その驚きも2倍となった。みたこともない海や大陸が描きこまれており、さらにそのロマノフ公国の大きさも、縮尺がないから詳しくはわからないが、ハルケギニアの何倍もありそうなことはわかった。

「それで、コルベール先生・・・失礼。コルベール所長、そのロマノフ公国についてはどれほどのことがわかりましたか？」

「は、代王殿下。お手元の資料を御覧下さい。」

会議参加者には、先ほどの地図同様、数枚ほどにまとめられた報告集が配られていた。ルイズたちはそれを手元に持ち上げて見始めた。

「ロマノフ公国はなんでも、立憲君主制制度を採っているそうで、一応現在女王陛下がいらっしやるそうですが、政治は主に内閣が行っているそうです。」

「立憲君主制？それは確か今アルビオンで試験的に取り入れられているあの制度かね？」

新任の法務大臣であるウェルキンス伯爵がコルベールに尋ねた。

「はい。その制度をロマノフ公国では40年前から採用しているそうです。ただ聞いた限りでは、アルビオン王国で採っている制度よ

りも、だいたい王にたいする権利に制限を加えているそうです。」

その言葉に、再び場はどよめいた。

「なんと！」

「自分の国の王に足かせをするなんて！現在アルビオンで行われている物でさえ、始祖が与えられた王権に対する侮辱と非難されることがあるのに。」

アルビオンで行われている限定的な立憲君主制度の取り入れは、表向き順調であった。特に平民を含む国民に対して選挙権を付与したことから、平民層からの受けは良かった。ロマリアからも特に抗議らしい抗議もされていない。

しかしながら、やはり外国とはいえ守旧派の貴族層は王権への制限に内心拒否感を持っているようだ。

「なんでもロマノフ公国では、40年前に王制を転覆させようとした・・・なんでも社会主義革命とかいうものが起きたらしくて。幸い革命は封じ込められたらしいのですが、それ以後国民の意思を反映させた政治を行うために現体制に移行したそうです。」

その言葉を聞いて、才人は内心すごく驚いていた。

（おいおい。ロマノフ公国って名前だけでもロシア帝国そのままなのに、さらに社会主義革命だって！？話が上手すぎる！！けど、なんで社会主義革命なんか起きるんだ？そのロマノフ公国ではマルクス主義が誕生しているってことか！？）

才人の疑問は大きくなる一方だった。

「それからもう一つ。ロマノフ公国の女王陛下であるアナスタシア様は、メイジではないそうです。」

その衝撃発言に、会議室内は凍りついた。

ハルケギニアでは、王族イコールメイジの方程式は不動のものである。そして人々が持つ王室に対するイメージも同じであった。それを根本から覆したのだから、驚きは先ほどの比ではない。

「メイジではないとは、一体どういうことでしょうか？」

ルイズ自身がコルベールに尋ねた。

「それがロマノフ公国には、メイジがほとんどいないそうです。国民の1パーセントにも満たないそうです。それに呼び方もメイジではなく、魔導師と呼ぶそうです。」

つまりは、魔法使いが階層を構成するだけの数にもいかないということだ。前提条件がハルケギニアとは違いすぎている。

室内の驚きを他所に、コルベールの説明は続く。

「なお、科学技術についてはハルケギニアより進んでいます。蒸気機関は30年以上前に実用化されているそうですし、鉄道も既に総延長は2000kmを越えているそうです。さらに我々が試作中の各種電気を用いた物品も既によくが実用化されています。亀山教授、写真をお願いします。」

「はい。スライドを用いて説明いたします。」

それから部屋が暗くされ、亀山教授がデジタルカメラで撮ってきた写真が投影された。

その映像を、全員が食い入るように見つめた。主に写されているのは、「オストラント」号が寄港したりバウという軍港の街の様子であった。建物は地球で言うところのロシア風の建物が立ち並び、服装もロシアの衣装に近いように才人には感じられた。

街の中心部の建物の多くは4、5階建てで、さらに通りには路面電車も走っているのが見えた。街灯も整備されているようで、コルベールの言ったとおり、科学技術はハルケギニアより進んでいるようだ。

また、軍港を写した写真も何枚があったが、そこに写された軍艦も全て鉄製の蒸気軍艦だった。形からして日露戦争から第一次世界大戦時のものに近い。

その内の一枚の写真が映された時、才人は目を疑った。

「あれは!？」

彼がいきなり叫んだため、会議の参加者が一斉に彼の方に振り向いた。

「あ、すいません。何でもありません。」

全員怪訝な表情になったものの、会議はそのまま続行された。そしてスライドは間もなく終わった。

「以上で終わりです。」

スライドが終わってから数分の間、大臣たちはそれぞれ隣の人間と意見を交わしていた。それを5分ほどしてルイズは鎮めると、コルベールに問いかけた。

「コルベール所長。そのロマノフ公国からの親書も読みましたが、かの国はわが国と是非とも友好的な関係を持ちたいと言ってきております。それについてはどう思いますか？」

コルベールは強い口調で言い切った。

「友好条約を結ぶことに別段問題はないと私は判断します。かの国の人は非常に親切でしたし、何よりこれだけの大国を友人として損することはないでしょう。」

すると、大臣の中から反対意見が出された。

「しかし、魔法も使えない平民が王の国と関係を結んでも良いものか？それにハルケギニアへの野心をその国が抱いていないと言えるのかね？」

その意見に同調するように、数人が頷いた。やはり王宮内で守旧派と呼ばれている比較的老齢の大臣たちだった。最近改革が進んでいるとはいえ、こういう人間もまだ結構トリステインにはいる。

そんな彼らにコルベールが言う。

「少なくとも野心はないと思います。彼らは西の地を未開の地とし

て恐れ、長く近づかなかったそうですから。もし侵略する意図があるならとつくの昔にハルケギニアは侵略されています。」

だが反対派の大臣たちはあきらめきれないらしい。

「しかし、魔法が使えない王が納めている国と関係をもつなど・・・

」

だが結局その意見も、マザリーニ枢機卿の意見によって打ち砕かれた。

「皆さん、現実というものを見てみなさい。先ほどの写真でも見たとおり、ロマノフ公国は我々よりも進んだ技術を持っているようです。確かに魔法は始祖より賜った荣誉ある力です。しかしながら魔法ばかりに頼ってはいられないことは昨今の情勢からもお分かりでしょう？我々は先祖代々受け継いだこのトリステイン王国を、ひいてはハルケギニアを守る義務があります。そのためにも、新たな関係を作っていくことも重要ではありませんか？」

結局これが決め手となって、とりあえずロマノフ公国との友好条約締結が方針として決まった。

会議は一端そこで終わりとなったが、ルイズ、マザリーニ、コルベール、そして才人と亀山の5人はそのまま会議室に残った。



## 驚愕の御前会議（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 秘密会議

会議室に残った5人は、ルイズが使用人に命じて持ってこさせたお茶を飲みながら、秘密の会議をスタートさせた。

「それじゃあ才人、あんたの意見を聞きたいんだけど。」

先ほどまでの言葉遣いはどこへやら、以前のような口調で才人に尋ねるルイズ。

「いきなり俺にふるのかよ？」

尋ねられた才人も、ルイズのことを代王としてではなく、以前の使い魔と主人の時のような口調で言い返した。顔見知りばかりの前だから良いが、他の大臣たちが見ていたら目をひん剥く光景だろう。

しかしマザリーニが傍にいるのであるが、まったく気にしていない。だいたいマザリーニ自身がもうあきらめたような表情をしていた。

「だってあんた、会議中に声を上げたじゃない。何か言いたいことがあったんでしょ。表情だってずっと考え込むような感じだったじゃない。・・・それに自分の旦那のことなんだから気になるし。」

彼女の指には、現在3つの指輪が嵌められている。『虚無』の担い手ということでアンリエッタとウェールズからもらった『風のルビー』と『水のルビー』。そしてもう一つはシンプルなデザインの銀の指輪だった。その指輪と同じような銀の指輪が才人の手にも嵌められていた。

「はいはい、わかったよ。ただ俺が感じたことは、亀山さんも感じてると思うよ。」

そう言うと、彼は一瞬亀山のほうへ視線を向けた。だがすぐにルイズの方へ向き直ると、自分の感じていたことを話し始めた。ついでに、用意してきた地球の世界地図も机の上に広げた。

「まずこれが俺たちのいた世界の地図。ルイズには前にも話したところがあるんだけど、このハルケギニアは地形的にヨーロッパに似ている。で、そのヨーロッパの東にはロシアって言うバカデカイ国があるんだけど、それが今回見つかったロマノフ公国に似ているんだ。」

そこで一端話を区切る。その間に他のメンバーが地図を覗き込んだ。ルイズもマザリーニも地球の言葉はほとんど読めないが、亀山とコルベールから説明を受けて納得した様子だった。

「話を続けるよ。それとまだまだ似ている点が多いんだ。まずこのロシアって国は俺たちの世界だと90年くらい前に、王制が倒されたんだ。その王朝の名前はロマノフ王朝だ。それに王朝が倒された時に起きたのが社会主義革命だったし、その時殺された王族の中にアナスタシアという王女もいた。ここまで来ると、話が上手すぎる。」

そこまで才人が説明したところで、マザリーニが手を上げた。

「才人殿。その社会主義革命とはどのようなものですか？アルビオンで起きた革命とはまた違うものなのですか？」

現在ハルケギニアでは、大分資本主義が発達しつつある。しかし、発達しつつあるものの後の世で言うようなそれによる格差などはまだ表立って発生するほどではない。加えてまだまだ身分格差のほう大きい。だから、本来資本主義が発達した上で表れる社会主義という考えも、当然生まれてはいない。

「うーん・・・俺はそんな専門家じゃないからそこまで詳しくはわかりませんが。まあ簡単に言っちゃえば、貴族や王を排除して、労働者と市民による政府を作るっていう考えです。」

さすがにそれを聞いて、ルイズもマザリー二も眉を潜めた。ただでさえ王権の否定は、ハルケギニアにおいては始祖に対する反逆となるからだ。それに加えて貴族制度の否定などレコン・キスタ以上に過激と言える。

ちなみに、よく冷戦中の社会主義をソ連型社会主義と呼ばれることがあるが、これはレーニンが提唱した強い中央政府指導型の政府体制のことを指す。この形態だと、中央で決めたことを末端にまで徹底させられるというメリットがある反面、政府自体が独裁型になる危険性もあった。そして事実スターリンのようなことが起きた。また政府が硬直した思考しか出来ないものとなると、社会的、文化的な発展も阻害される。

そしてその結果ソ連は崩壊し、この形態の限界が露呈された。そのため、中国やベトナムなどの後発の社会主義国家は経済面で大々的に資本主義を導入し、政府による統制を緩和するなど、大幅な路線転換を余儀なくされた。

ともかく、その社会主義革命が失敗したとはいえこの世界でも起きているのだから、才人や亀山の驚きは当然大きい。

「実は私にも才人君同様大いに気になる点があるんです。」

亀山が手を上げた。

「気になる点とは何ですか？」

ルイズが尋ねる。

「はい代王殿下。実はこれは既にコルベール所長に言ったことなのですが、現地の人に簡単な国の歴史を聞いてきたんですが、どうもその社会主義革命は、自発的に起きたものではないようなのです。」

「それは一体どういう意味ですか？」

マザリーニが首を傾げる。

「まだ詳しく調べておりませんので何とも言えませんが、その革命はどうやら外部からなんらかの干渉を受けて起きたようです。・・・私としてはその点も是非調べたいところです。」

亀山は物理学者であるが、こちらの世界に来てからは地球との類似性や魔法についての研究を進めるなど、かなり研究対象を広げている。その対象がこれでもう一つ増えたようだ。

「それと俺から、もう一つ言いたいことがある。」

「何よ？」

才人の言葉にルイズが反応した。

「実はさ、スライドの中で軍港に停泊している軍艦を写している写真があったじゃん。その中に、地球の軍艦がいた。」

その言葉に、その場にいた全員が彼の方へ顔を向けた。

「それ本当？」

「ああ。間違いなくあれは地球の軍艦だった。写真で見たことあったから。俺が思うに、亀山先生の言う外部の干渉はもしかしたら・  
・地球からやってきた人間によるものかもしれない。」

その場を一瞬沈黙が支配した。

「・・・それで、あんたはどうしたいわけ？」

「そんなこと、言わなくてもわかるだろ？調べたいに決まっているじゃないか。」

才人が笑いながら言うと、ルイズも表情を崩した。

「そう言うと思ったわ。コルベール先生。」

それまでずっと話を聞く側に回っていたコルベールを、ルイズが呼んだ。

「はい。」

「恐らく明日の御前会議で決定することになるでしょうが、使節団派遣の際の全権大使として先生を任命することになると思いますの

で、よろしく願いします。」

「は、全身全霊を尽くしてやらせていただきます。」

コルベールがルイズに頭を下げた所で、マザリーニが横から口を挟む。

「それと、コルベール殿は爵位の授与をずっと固辞なされてきましたが、外交をする上で爵位なしは問題があると思いますので。是非とも今回爵位を受け取って頂きたい。」

「は？いえ、しかし。」

コルベールが俯いた。彼は科学技術研究所の所長に就任して以降の功績を認められ、伯爵に任命されることになったのであるが、ずっと固辞していた。やはり過去に犯した過ちを気にしているようだ。

「コルベール先生。あの事件は当時王宮で権威を振るっていたリツシュモン氏の行った陰謀でした。彼はすでに逆賊として裁かれています。あなたに罪はありません。」

ルイズが言う。

「ですが、私が、多くの罪のない人間を焼き殺した事実は消えますまい。」

コルベールは頑なだったが、マザリーニも食い下がった。

「コルベール殿！！これは国の未来を左右するかもしれないことなのです。それに爵位なしでは、あなたを使節団の団長として推薦で

きない可能性があります。私や代王殿下としては、是非ともあなたにこの任に就いていただきたい。」

そこで才人も彼の意見を援護した。

「そうですよ先生。先生は見識も広いし、他の貴族にはない公平に物を見る目があります。先生こそ適任ですよ。それに人のためにたくさんのことをしてきたじゃないですか。だから俺も先生が爵位を貰うのは賛成だし、当然だと思います。」

それからしばらくコルベールは考え込んでいたが。

「わかりました。爵位を謹んで頂戴いたします。ただし、それによる貴族年金や褒章は固辞させて頂きます。」

彼は強い口調でそう言い切った。それが彼の意志であつたのだ。

その後、2、3の打ち合わせをし後、秘密の会議も解散となった。



## 秘密会議（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 使節団出港 上

王宮での御前会議から数日後、才人の姿はトリスティンから数百キロ離れた外洋諸島のハシラ島にあった。

発見されてから4ヶ月近く経ったハシラ島の様子は大きく様変わりしていた。大型の艦船が停泊することも可能な棧橋、50機近い単発機を収容可能な設備を備えた飛行場、そして島から産出される金や銀を掘り出す労働者が住む街が出来上がり、島の人口は既に1000人を突破していた。

そして軍艦の泊地として適地である湾内には、2度目のロマノフ公国訪問を控えた探検船の「オストラント」号、トリスティン海軍所属の駆逐艦「シリウス」、「ベガ」など数隻の艦船が停泊していた。

その中でも存在感を放っているのが、『東方義勇軍』海上部隊所属の強襲揚陸艦の「にぎつ丸」、そして巡洋艦の「おおよど」である。実は今回の来訪では、この2隻も「オストラント」号についていくことになった。

何故この2隻がついていくことになったのかといえば、これはトリスティン王室からの正式の要請によるものだ。

その任務は護衛である。前回来訪時の「オストラント」号は、危険に遭遇することも覚悟しての調査航海であった。しかし今回は、代王殿下に親任された特使と親書を運ぶから絶対に任務を遂行し帰ってこなければならぬ類の航海である。

しかし、この世界はなんだか言ってファンタジーの世界である。いつ人魚やら、リヴァイアサンやら海坊主といった怪物が出てこないか、わかったものではない。地球では伝説の動物でも、こちらの世界ではそう言ったものも実在するらしい。実際、前回の航海の帰り道、「オストラント」号はシーサーペント（海竜）に遭遇している。この時は襲われはしたものの、幸い艦載砲と機銃によって追っ払っている。

今回はより徹底した護衛が行えるように、わざわざ「おおよど」と「にぎつ丸」が選ばれたのである。

もつとも、実際の理由はそれだけではない。実はトリステイン海軍は護衛艦を出したくても出せなかったのだ。

ハルケギニアにおいて蒸気機関が発明されたのは7ヶ月近く前であるが、それが本格的に艦船や蒸気機関車などに用いられたのはここ2〜3ヶ月の内である。そのため蒸気機関に慣れた人間はほとんどいなかった。

その後速成での要請が急がれ、鉄道の方の人間は地球から元機関士を連れてきて教官にするなどして、なんとか間に合っているが、艦船用蒸気機関の方はそうはいかなかった。なにせ数が違う。その後こちらの世界に飛ばされてきた海上自衛隊の艦の機関兵の中に、蒸気機関に触れた者が数人いたために、彼らを教官として養成を急いでいるが、とても間に合わなかった。

そんなわけで、現在トリステイン海軍が保有する巡洋艦「ビフレスト」級と、アルビオン海軍が保有する「インドミダブル」級も機関兵（実際はそれ以外の各種の兵士も）が養成途上であるために、とても正規の任務に使うことなど出来なかった。

もつとも、この努力も数カ月もしない内に大きな方針転換を迫られることとなる。

現在急速建造が進められている駆逐艦も似たような状況だった。だから、護衛艦については嫌でも『東方義勇軍』に頼らざるを得なかった。

『東方義勇軍』に編入された海上自衛隊の4隻は、こちらの世界に來た直後こそ、混乱した乗員の氾濫で死者が出る事態に陥ったが、現在はそんなこともなく全員生きるために働いていた。主な任務は外洋諸島の警備任務だが、乗員の一部は技術指導官として、トリステインやアルビオンの科学技術研究所に出向していた。

彼らの働きのおかげで、ようやく量産型の電信機が作られていた。ただし量産自体は始まったばかりなので、現在のところトリステインとアルビオン国内の各軍の基地へ優先配備され、艦船全てに搭載するまでに至っていないかった。そのため、地球製の物を取り寄せている。

また電話の方も電話機の開発を大いに促進させたが、電線などの生産が追いつかず、この時点で引かれているのはトリステインの場合だと王宮から銃士隊や義勇軍基地につながる線が開通しただけである。

こんな状況なので、『東方義勇軍』の幹部会議では、電信と電話網の整備に力を注ぐことを決定していた。

閑話休題。

そういうわけで、今回の歴史的訪問には『東方義勇軍』もついていけることになった。ただし相手に敵愾心を植え付ける可能性も大きかったが、これについてはとにかく誠意を持って話し合う以外に術なしであった。

ちなみにこの護衛艦は「オストラント」号がルイズ代王の見送りの下、ラ・ロシェールを出港した時はついておらず、このハシラ島で「オストラント」号が石炭や食料の積み込んだ後の航海からついていく。

その護衛艦の1隻である「おおよど」の艦上に、義勇軍中佐の制服を着込んだ才人の姿があった。先日の秘密会議で今回のロマノフ公国行きの同行を希望した才人は目出度く、その許可を貰えた。

王室つき連絡士官に任命されてから大して日も経っていないのに、その仕事から離れるのは大いに問題ある行為であるが、ルイズと才吉からちゃんと許可状を貰っているから誰も文句は言えない。

もつとも、王室つき連絡士官とは実際名ばかりの職業で、特別な会議や緊急の連絡事項がある時以外は夕方に王宮へ報告事項を持っていく以外に仕事はあまりない。まあ才人にとってはその後夜、ルイズと甘い時間を過ごせるから嬉しいと言えば嬉しいが。そんな感じなので、最近の才人は他にも色々仕事を掛け持ちしている。

そういう事情の下「おおよど」乗り込んだ才人は、艦長に頼んで艦内の見学をさせてもらっていた。案内は中井という名の若い中尉がしてくれた。

「こちらが本艦の主砲である15.2cm3連装砲です。ご覧の通り、前部に2基、後部に1基搭載されています。」

中井は早速才人を前甲板に連れ出して、主砲の説明を始めた。しかし、どうも年上から敬語を使つて話されることに、才人はこそばゆいものを感じていた。まあこれはいつものことであるが。

「あの中井中尉。そんな敬語を使わなくていいですよ。あなたのはうが年上でしょ？」

「いえ、上官に敬語を使うのは軍隊の基本ですから。気にしないでください。」

才人の頼みはあっさりとスルーされた。そして才人も、もう気にしないことにした。

「ハハハ・・・それじゃあ説明を続けてください。」

「わかりました。この砲はアメリカ製の砲で、毎分10発の発射が可能な優れたものです。改装前に搭載していた15.5cm砲よりも総合的な戦力では上です。」

才人はその性能について、ミリタリー関係の本や架空戦記を読んでいた。

「へえ、これがそうなんですか。本で読んだことはありませんが、やっぱり実物は迫力があります。それにしても、それだけの速射性能は多分この世界では最強ですね。」

「ええ。しかもこちらの世界に来てから固定化でしたっけ？確かその魔法を掛けてもらったおかげで砲身の劣化が防げるようになりました。これで砲身の交換が不必要、もしくはそこまで行かなくても

以前より減るので楽になります。」

大砲の砲身は撃ち続けると、衝撃や熱で徐々に劣化していく。そして最終的には砲弾がちゃんと飛ばなくなり、最悪の場合砲身自身が発火する危険性がある。そのため発射回数を数え、一定の回数が来たら砲身は交換される。これが砲身寿命数である。

それが魔法のおかげで気にせず良いのだから、夢のような話である。

「確かにそれはすごいですね。」

「それだけではありません。砲弾も強力な物を搭載しています。特に48式対空・対地焼夷弾は、いざ使う時になつたらその威力を発揮するでしょう。さ、次は中央部の両用砲の所に行きましょう。」

そんな感じで、才人の「おおよど」見学は進んでいった。

## 使節団出港 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

連休中の更新についてですが、明日は日比谷で行われる鉄道フェスティバルへ行きますので、また月曜日は図書館が閉館となるため更新がないことをあらかじめ御了承ください。



## 使節団出港 下

才人は中井中尉の案内によって、その他の場所も色々と見せて貰えた。10cm高角砲に代わって搭載された5インチ連装砲や25mm機銃に代わり搭載された40mm連装機銃、もしくは20mm単装機銃、引き上げ後の改装で艦内に設置されたCICなどである。

その中で特に才人が興味を引かれたのは、水上機格納庫だった。

「おおよど」の前身である巡洋艦「大淀」は元々潜水艦隊旗艦用に建造され、そのために偵察能力が重視されていた。だから艦体後部に搭載された格納庫に5機の水上偵察機を積めるように設計されていた。

もともと、太平洋戦争の厳しい戦況の中ではそのような運用が出来るはずがなく、その格納庫はその後改装を受けて、連合艦隊司令部用の通信室などに流用された。

そして中井の話によれば、戦後海上自衛隊に復帰する際の改装工事で再び水上機格納庫を設置したという。ただし搭載している機数は2機と減っているが。

格納庫に着くと、中井が機体を才人に見せてくれた。

「これが本艦の艦載機である「瑞雲改」です。」

格納庫に置かれていたのは、才人も太平洋戦争時の飛行機について書かれた本で読んだことがある機体だった。

水上偵察機「瑞雲」。最高速力は480km。胴体の下に250kgの爆弾を積んで急降下爆撃も可能な優秀な水上機で、主翼には20mm機関砲を計2基を $\times$ 搭載していた。ただし登場時期があまりにも遅く、たいした活躍は出来なかった。

「改つてことは、何らかの改良が加えられているってことですか？」

才人が至極当然の質問をした。

「ええ。まずエンジンはアメリカ製のP&Wに換装されています。また主翼の機銃も20mmから12.7mmに代わっています。何より大きいのは、使えるアメリカ製の機上レーダーを搭載したということでしょうか。かつてはレーダーに泣かされましたから。」

中井が笑顔で言った。また才人にもその気持ちがよくわかった。なにせ史実における日本軍の機上レーダーは重いうえに品質にバラつきが多く、中には肉眼で相手が見えても反応しないと言うようなとんでもない代物さえあったといわれている。

こんな武器で戦わされた兵士たちの苦勞は、冗談抜きで筆舌に尽くしがたいものがあっただろう。才人は心の中で同情してしまう。

「それから胴体下に搭載できる武装もエンジン強化で増えました。これまでのような中小型爆弾のみならず、2000ポンド(1t)爆弾や、対潜用の追自動尾式魚雷も搭載可能となっています。」

「へえ、すごいじゃないですか。」

予想以上に武装と爆装が強化されていたので、才人は感嘆の声をあげた。

「ええ。けどこの世界には潜水艦はいないでしょうし、爆撃任務に使うとしても、たった2機だけではあまり役にはたたないでしょうね。」

中井が苦笑いしながら言う。

「そうでもない俺は思いますよ。この世界じゃ飛行機1機で竜一匹以上の戦力になりますから。」

これはこれまでに戦闘経験がある才人ならではの感想だった。

「そうですか。まあ、戦わないに越したことはないですけどね。それでは次の場所に案内します。」

こんな感じで、才人は数時間掛けて「おおよど」の艦内を案内してもらったのであるが、まさかその戦闘がすぐに起こるとは彼自身考えていなかった。

それから約半日後、全ての補給・準備を終えた派遣艦隊はハシラ島を出港し、一路ロマノフ公国へ向けての航海を始めた。

前回「オストラント」号は調査航海であつたために海流などの調査もしていた。そのためかなり遠回りの航路を走り、ロマノフ公国に着いた。そこで今回は最短距離の直線コースで艦隊は進むこととした。

ただし、これには反発もなかった。このコースで進むと、

かなり沿岸部に近づくこととなる。つまりそれはゲルマニアの東側に広がる『魔の森』に近づくことを意味する。

『魔の森』は現在に至るも詳しい調査が行われていない未知の地域である。これまでに数回ゲルマニアやガリアの調査団が入ったようだが、いずれも生還したという記録がない。

どうやら『魔の森』にはメイジ中心に編成された部隊さえ適わない程強力な幻獣が住んでいるか、それとも森自体になんらかの問題があるらしい。

とにかく、この『魔の森』はハルケギニア人にとって恐怖の的であった。そのため「オストラント」号のハルケギニア出身の乗員たちはこのコースで航行することに猛反対した。

しかしながら、実際危険であるかさえわからないのでは、話にならない。この航路を開拓できるかどうかで、今後の通商にも大きく響くのだ。

結局艦隊司令官となった小林中将の意見により、艦隊は直進コースを進むこととなった。そして事件が起きたのは、出港して2日目、ちょうど『魔の森』の沖合いを航行の中の時であった。

才人はその時、宛がわれた船室で同居人となった人物とお茶を飲みながら談笑していた。

その人物とは、今回視察名目で乗り込んでいたアルビオン海軍の中尉であるジョンソン・ボーウッドであった。実は彼、現在アルビオン王国本国艦隊司令長官を務めているボーウッド提督の息子である。

彼の父であるボーウッド提督は、アルビオン解放戦争時は巡洋艦座乗の戦隊司令官として、『レコン・キスタ』の残党や、アルビオン付近に出回る空賊の掃討任務を行った。その際の際立った能力が認められ、現在の地位についている。

一方のジョンソンはつい先日アルビオン空軍の士官学校を主席で卒業し、父親同様の明るい未来を約束されていたにも関わらず、新参の海軍へと転籍した変り種であった。

何かと父親の名前が出される空軍に居心地の悪さを感じ、さらに父親とは違う道を歩みたいという理由から、そのようにしたそうであるが、その性格は明るく、同年代と言うこともあり才人は会うなり彼に良い印象を抱いた。

そんな感じで、2人は雑談にふけていた。もっとも雑談といっても、才人は主にこれまでの自分の戦歴について話し、ジョンソンの方は主に士官学校で受けてきた勉強や生活の内容について話したからお互い貴重なことを知りあえた。

だがその楽しい時間も、唐突に総員戦闘配置を報せるベルが鳴り始めたことで途切れた。

「何でしょうね？」

「戦闘配置が掛かったみたいだけど、一体なんだろう？」

才人とジョンソンは脱いでいた帽子を被ると、急な階段を駆け上がり、狭い廊下を走り抜けて艦橋へと向かった。

2人が艦橋へと足を踏み入れると、中にいた艦長以下全ての乗員が東の空に双眼鏡を向けていた。才人は部外者であるから、あまり乗員の仕事を邪魔するようなことは出来ない。しかし状況は把握したい。

2人が乗員に話を聞いたのは、それから1分後のことであつた。副長の前橋中佐が指示を出すために艦内電話の傍にきて通話を行い、受話器を置いたときだつた。

「何が起きたんですか？」

「うん？ ああ、平賀中佐か。実は「にぎつ丸」の艦載機から、多数の翼竜が接近しているという報告が入ってね。」

「何ですって？」

翼竜は普通の竜よりもさらに凶暴で、大型である。メイジが大いに恐れる存在の1つだつた。それが艦隊に接近しているという。

— 大事であつた。

**使節団出港 下（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 対空戦闘！！ 上

「どうしますか、司令官？」

艦隊参謀長が小林中将に語りかけた。ちなみに、彼らはこちらの世界に来て2ヶ月あまりしか経っていないが、こちらの情勢や風習に大分慣れて来ている。王軍の竜騎士隊との訓練なども行っているから、翼竜ワイバーンが出たくらいでは驚きはしない。

ところで、この艦隊の指揮権についてだが、航行中と戦闘中の指揮は小林が執ることとなっている。しかしながらロマノフ公国到着後は、使節団全権のkolbeが執るといふ、かなりややこしい体制を採っていた。もっとも、そうでなければ上手いからだ。

「どうするも何も、攻撃してくるのならこちらだって反撃せざるを得ない。だが、相手が竜ではな・・・」

小林は判断に迷ってしまった。これがハルケギニア人なら問答無用で撃退するところだ。この辺りがハルケギニアにいる年月の違いで現れる。現に、ハルケギニアに10年以上いる「にぎつ丸」艦長の安田大佐は、すぐに戦闘機の発艦用意を命令している。

一応義勇軍の規則では、相手が国に属する軍隊であるなら敵からの攻撃を受けたとき、または自らが命の危機に瀕した時のみ反撃を許可される。

しかし相手が幻獣では話が違ふ。例えば規定では人間に害を与えず話し合いが出来る翼人であるなら、まず話し合いをしなければいけない。ところが、これが吸血鬼だと問答無用で駆逐することを許



可されている。

現代地球の動物保護団体だったら目くじらを立てることだろうが、地球よりも人間に生命を脅かす生物が多い以上これは仕方がない。

だがハルケギニア人ではない小林はすぐに判断が出来なかった。こちらに慣れてきたとは言え、慣れたと慣れて来ているではやはり大きな差があった。

弾薬を消費するとすぐに補充が利かないということも、彼の迷いを増大させていた。現在ハルケギニアでも銃弾や砲弾の製造を開始しているが、「おおよど」が使っている弾薬で生産ラインに乗っているものはまだない。だから無闇に使えないというジレンマに、小林はかかっていた。

そこで、たまりかねて才人が進言した。

「小林司令、意見具申してよろしいでしょうか？」

「うん？君は連絡士官として乗っていた平賀中佐だったね。確か君はこの世界に来て1年近く経つんだよな・・・ようし、意見を言いたまえ。」

「はい。それではまず、翼竜は超大型の竜です。性格も獰猛と聞いています。それが群れをなしてやって来るということは大変危険です。もし相手が攻撃してこないにしても、万が一を考えて、早めに判断するべきです。だいたい通常の竜ですら、プレスを吐いて危険なんですから。」

中世同様の木製軍艦ではないから、竜のプレスや体当たりを受け

て一撃で轟沈ということはないだろうが、それでも上部構造物に被害はでる。特に蒸気船とはいえ、「オストラント」号は危険である。また「おおよど」にしろ「にぎつ丸」にしろ、装甲などないに等しい。

今回接近している翼竜はブレスを履かないはずだが性格は凶暴である。撃退するなら早いほうがいい。

「そうか・・・君が言うのならそうなんだろうな。よし、では攻撃しよう。参謀長、翼竜の位置は？」

相手が生き物ではレーダーが役に立たないから、偵察機からのデータに頼る以外ない。

「偵察機からの報告では、艦隊の南20km。速力200kmにて接近中とのことです。」

通信士が報告してきた。その報告に、小林は迷ったことを後悔した。この距離では「にぎつ丸」が用意した戦闘機はもう間に合わない。

「それではどっちみち戦闘機は間に合いそうにないな・・・主砲を使おう。主砲対空戦闘用意！！装填弾種、48式対空焼夷弾！！」

彼の言葉を、艦長が復唱する。

「主砲対空戦闘用意！！48式対空焼夷弾装填了解！！射程に入り次第、撃ち方はじめます。」

どうやら主砲での遠距離対空戦闘をするつもりらしい。

「偵察機に連絡、目標の高度、速度、位置のなるべく詳しいデータを送って欲しいと。それから後続の「にぎつ丸」と「オストラント」号にも発光信号。」

艦長が通信室への電話を取って言った。

「小林艦長、俺たちもここで見てて良いのでしょうか？」

きびきびと動き始めた乗員たちを見て、自分たちの所在に困った才人がおずおずと聞いた。

「ああ、構わんよ。ただし我々の邪魔にならんよう、窓際に寄ってくれ。」

そう言って彼は窓際の隅を指差した。才人とジョンソンはそちらに移動した。

「あの平賀中佐、対空戦闘って言っていたけど、一体どうするんです？」

ハルケギニア人の彼には、どうやって水上の船から竜を攻撃するのか想像できないらしい。一応乗り込んだときに、才人同様簡単な説明を受けているはずなのだが、人間中々根づいた常識を吹き飛ばすのは難しいらしい。

「見てればわかりますよ。」

才人はそう言うと、艦橋の前に見えている15cm主砲に視線を

向けた。

その砲塔内では砲術担当の兵士たちが忙しく動いていた。下層にある弾薬庫から揚弾機を使って砲弾と装薬を引き上げ、砲に装填する準備に入る。

ただし、装填する前に信管の調整をしなければいけない。これが一番難しいところである。

信管にも色々あるが、今回「おおよど」が使う信管は時限信管である。呼んで字のごとく、これはセットされた時間になると起動する信管である。この信管で対空戦闘をするのは非常に難しい。空中を高速で移動する敵のすぐ傍で爆発させるよう、緻密な計算が必要になるからだ。

敵の正確な方位、高度、速度、場合によっては風速や気温のデータも必要となる。こうしたデータを計算して敵の未来位置を予測し、そこで爆発するよう信管をセットした砲弾を撃ち込む。

もつとも、今回の場合は戦う相手が楽といえた。何せ翼竜の最高速度は300km程度。巡航速度は200kmいくかないからだ。対して大淀の射撃指揮装置は500〜600kmで飛ぶ航空機に対応できている。レーダーが使えないハンデはあるものの、偵察機から敵のデータをしっかり受け取れば捕捉出来るはずである。

「目標、右舷50度、対地速度200km、高度2000m、距離18000m。数約30。風速西の風秒速2m。」

上空の偵察機と、艦の気象班からもたらされたデータが、砲撃を統括する射撃指揮所に届く。CICがあるとは言っても、まだそこ

から砲撃を直接行えるほどではない。

砲術長はすぐに指示を出した。

「距離10000mに接近したところで攻撃する。誤差修正と信管調整急げ!!」

命令を受けて、ただちに計算機を操作する兵士が信管の調整時間をはじき出し。それを受け取った砲塔内では、砲術科の兵士たちが信管の調整を行う。

そして信管調整を終えた砲弾が砲身内に入れられ、続いて発射用の装薬が込められた。

「主砲装填完了!!」

この時点で、既に翼竜の群れとの距離は10000mにほぼ近づいていた。だから直ぐに艦長は命令を下した。

「撃ち方始め!!」

ドドン!!

間髪入れず、9門の主砲が火を噴いた。

対空戦闘！！ 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 対空戦闘！！ 下

旧日本海軍が太平洋戦争中に開発した砲弾に、三式弾というものがあった。この砲弾は内部に多数のリンで出来た弾子が詰まっていて、空中で破裂して空中の航空機、もしくは地上の目標を広範囲に渡って破壊する計画であった。

しかしながら、実際に使うと対地戦闘で使用するには効果があったが、対空戦闘で使用するには無理があった。日本海軍ではレーダーや射撃指揮装置が連合軍に比べて遅れていたために、目標を上手く捕捉出来なかったのが原因だった。それでも、10機以上の爆撃機を一回の砲撃で撃墜した記録もある。

「おおよど」が元いた世界では、この砲弾を接收したアメリカが応用した。ただし、対地用砲弾として開発したらしい。彼らは焼夷能力を上げるために、弾子に使っていたリンをナパーム（ゼリー状にしたガソリン）に換えたのである。これはかつて東京をはじめ日本各地を焼き払った焼夷弾に使われていたのと同じ物質である。

多くの日本人の命を奪ったナパーム弾を異世界で日本人が、直接生き物に使うのであるからおかしなものである。

そして旧海軍時代と違い、「おおよど」にはアメリカ製の最新鋭のレーダーと射撃指揮装置が搭載されていた。今回は相手が生き物であるからレーダーが役に立たないものの、射撃指揮装置の計算装置は旧海軍時代より遥かに高い精度を持っていた。加えて竜のスピードはジェット機の4分の1、レシプロ機から見ても2〜3分の1である。捕捉出来ない方がおかしい。

ワイバーン

翼竜にとっての不幸は、非常に濃い密度の群で飛んでいたことと、艦隊に向かって飛んでしまったことであつた。

これは数年先になつて、『魔の森』に調査隊が入つてわかつたことであるが、海辺に住む翼竜は森の中ではなく、海上に出て魚や渡り鳥を餌にしていた。そのためこのワイバーンたちは餌を捕りに海上に出てきたのであつた。しかも彼らは、艦隊の出す煤煙の匂いに反応して飛んできてしまった。

それが今回の事態になつたわけだが、もちろん翼竜からしてみれば餌をとるために普段どおり行動しただけであつた。不運としか言いようがない。

その鼻先に、音速に近いスピードで砲弾が飛んできたのである。そして翼竜たちが気づいた時には既に手遅れであつた。

9 発の 48 式対空焼夷弾は設定された時間通りに炸裂し、数百発の燃えるナパームの弾子を四方八方に飛び散らした。15cm という大くない口径の砲弾であつたが、9 発が狭い範囲で炸裂したのであるから効果は十分であつた。

次々と翼竜たちに弾子が命中した。中には皮膜を貫いてしまう弾子もあつたが、多くは竜の体にめり込む形となつた。

そしてその結果は、翼竜たちにとってはまさに悪夢以外の何物でもなかつた。突然目の前で何かが破裂したと思つたら、次の瞬間には体の中に途轍もない痛みと熱さを感じるのだ。

数秒もしないうちにその箇所から燃え始め、流れ出たナパームが広がることで、翼や体全体に炎が延焼する。それこそあつという間



にである。

30秒ほどで、20羽ほどの翼竜が、体から炎を吐きながら墜落していった。

幸運なことに、「おおよど」の乗員たちは距離が離れていたために、聞くことはなかったが、もしそこにいたなら竜たちの断末魔の鳴き声を聞いていたことだろう。

双眼鏡で見ていた兵士たちの多くは、ただ撃墜した竜の数を数えているだけであつた。

「10・・・15・・・20。20匹前後は撃墜したようです。」

大型の見張り用双眼鏡を除いていた水兵が叫ぶように報告してきた。

「残存の目標は反転します！」

10匹ほどにまで減つた翼竜の群れは、怖気づいたのか一斉に180度ターンすると、一目散に逃げ始めた。

「第二射撃ち方中止！！」

小林中將は、必要なしと見て第二弾の発射準備を止めさせた。

竜が墜落していた光景を見ていた人間の表情は様々であつたが、一番多かったのはどこか釈然としない表情であつた。なにせ相手が敵かしっかり確定しているわけでもない竜相手の戦闘であつたのだから当然といえば当然である。

才人の場合は、元々三式弾のことは知っていたし、48式対空焼夷弾の説明も受けていた。だがその焼夷能力は予想していたより高く、多くの翼竜が生きながら火葬という結果になってしまった。

「悪いことしたな。」

竜への攻撃を進言しただけに、責任感を感じる才人であった。彼は両手を合わせて、不運な竜たちに祈りを捧げた。

一方、彼の隣にいたジョンソンは驚愕の眼差しをしていた。

「いやあすごい！！この距離で空中の目標を撃つだけでもすごいのに、翼竜をたった一回の砲撃で20匹も撃墜してしまうなんて！！」

彼の場合は純粹に「おおよど」の15cm主砲と、48式焼夷弾の威力に感銘を受けていた。まあ、ハルケギニアでは前込み式で、鉄球、せいぜい初歩的な散弾や榴弾を打ち出すことしか出来ない。当然射程も短く、空中への対空射撃など論外だ。そんな大砲しか知らないジョンソンにとって、今回の砲撃は大きなショックを与えるものであったことだろう。

もつとも、現在ハルケギニアでも後送式の砲は生産が始まっている。「オストラント」号に搭載されているのがそうだが、すでに陸上用の75mm砲と127mm砲の生産にも入っている。ただし生産しているゲルマニア（トリステインやアルビオンでの生産開始はこの1カ月後）の能力にも限界があるから、陸上用がまとまった数で実戦配備されるのはもう少しばらく後となるが。

とにかく、こうして艦隊はとりあえず脅威を排除したのであった。

ちなみに、この48式焼夷弾はハルケギニア戦役でも大活躍することとなるのだが、この時点では未来の話であった。

さらに付け加えると、後方の「オストラント」号や「にぎつ丸」の乗員らは、竜を一撃で大量撃墜したこの砲撃に、大いに喜んだらしい。

こんなこともあったが、使節団はその後何事もなく航海を進めた。そして翌日にはロマノフ公国の領海内に入り、その日の内に警備行動中のロマノフ公国海軍の通報艦と接触した。

そしてその通報艦の誘導によって、トリステイン使節団は無事首都に一番近い軍港であるポート・アーサーに入港することができた。もつとも、「オストラント」号はともかく、見たこともない艦形の「にぎつ丸」と「おおよど」には大いに警戒されてしまったが。

だがそれは最初から予想されたことだったので、義勇軍側が戸惑うようなことはなかった。

艦隊がポート・アーサーに入港すると、コルベール伯爵率いる使節団はただちに鉄道で首都のニコラエフスクへと向かった。一方、残された艦艇ではロマノフ海軍の軍人に艦を航海するために招いた。最初はこの申し出に訝しげだったが、ロマノフ側もやはり興味はあったらしく、承諾した。

これにより10人ほどの高級軍人が乗り組んでくることとなった。

対空戦闘！！ 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 交渉開始

「おおよど」に乗り込んできたロマノフ海軍高官たちに対して、小林中将をはじめとする艦隊幹部たちは真っ白の礼装を着込み、一列に並んで出迎えた。

「ようこそ、巡洋艦「おおよど」に。歓迎いたします。トリステイン王国、『東方義勇軍』所属、使節団護衛艦隊司令官小林中将です。」

小林が代表して、敬礼をしながら挨拶をする。

それに答える形で、やはり礼装に身を包み、胸の部分に勲章をつけた40代後半と思しき軍人が敬礼をしながら言う。

「歓迎に感謝します。ロマノフ公国海軍本国艦隊司令長官のエッセン大将です。」

その言葉に、小林たちは全員驚きを隠せなかった。どうみても、相手は50代に達していない。それなのに相手は大将と言った。あまりにも若すぎる。

一方才人も驚いた。さらに彼がエッセン以外のロマノフ海軍軍人を見ると、彼よりも若い、40代、30代程度の軍人にしか見えなかった。

「私がいかに若いので驚かれたでしょう？」

小林らの反応を見て、エッセンは苦笑いしながら言った。

「ええ。」

小林は素直に肯定した。すると、エッセンが説明を始めた。

「まあ無理もないでしょう。わが国の海軍は、長い間海ではなく、主に内陸部の河で戦ってきました。そのため規模も小さく、少し前までは陸軍の一部門という感じでした。もちろん艦艇も河川用の砲艦ばかりでした。外洋で戦う戦力を持ったのは40年前の内戦時からです。その後も陸軍の方に予算が取られて、拡張されたのはごく最近なんです。だから自分のような若い人間が大将なんて階級をもらえているんです。」

「いや、そうでしたか。あなた方の国についてはまだほとんど勉強していないので、この機会に多くのことを是非とも学んでおきたいものです。」

「こちらもです。あなた方は我々にはない、様々な物を持っているようですね。この艦のブリッジの上で回っている網みみたいな物は、これまでに見たこともありません。それに港内に入ってくるところを見ておりましたが、この艦とあの平らな甲板を持つ変わった形の艦は煙がそれほど濃くありませんでしたし・・・あなた方は本当に東方からやってきたのですか？私の知る限りでは、秋津州も中華帝国もこのような軍艦は持っていないはずですが。」

どうやらこのエッセンという男、中々頭の良い男のようだ。小林はそれに対して、曖昧な返事をする。

「一応そう理解していただければ結構です。残念ですが、それ以上のことは軍機密で言えないのです。」

「そうですか。」

エッセンが少しばかり落胆したように言った。それが本心からか、演技なのかは誰にもわからなかったが、小林は構わずに話を続けた。

「まあ、そのことについては詳しく教えられませんが、あなたが先ほど気にしたレーダーをはじめとして、艦や装備についてはお教えできるので、どうぞこちらへ。」

小林は艦内へ一行を案内しようとする。

「では、よろしく願います。」

小林ら艦隊幹部らに案内されて、ロマノフ海軍の一行は艦内へと入っていった。この後予定では、彼らは艦橋や機関室などを見ることとなっていた。

そんな中、才人は艦隊の人間ではないので、この後上陸許可が下りるまで艦上で待機となっていた。だからその間を利用して、彼は軍港内に停泊している艦艇をよく観察しておこうと考えていた。

「あのエッセンって言う提督は驚くことになるだろうね、この艦の兵器や様々な物はとても素晴らしい物ばかりだからね。」

才人に声を掛けてきたのはジョンソン中尉だ。アルビオンから観戦武官として派遣された彼も、特に仕事がないので上陸許可がおりるまで暇をするしかない。だから、才人に付き合っていた。

「ああ。」

もつとも、才人はある心配をしていた。これで警戒感をもたれて条約に悪い影響が出ないかと。だが、もはや手遅れであろう。

才人はそのことについて考えるのはやめた。そして気持ちを切り替える。

「さてと。俺たちも行くとするか。」

才人がジョンソンに向かって言う。

「ああ。そうだね。」

2人は港が良く見える位置を探し始めた。

一方それから数時間後のこと、首都のニコラエフスクに向かったコルベールら使節団は無事到着した。そして王宮ではなく、首相官邸へ招かれることとなった。

王宮へ行くものとはかり考えていたコルベールは、政治体制の違いというものを実感することとなった。

その事を尋ねた従者によれば、この国では40年前の内戦以降、王の政治に関する権限は大幅に議会と内閣へ移され、王はその同意なしには何も出来ないことになっているという。いわば国の象徴のようなものだという。

だから王宮は王の住まいとしてしか機能しておらず、政治が行わ



れるのは議場や首相官邸だとか。そのため今回も首相官邸で交渉が行われることになっていた。

列車はトリステインやアルビオンと同じく、蒸気機関車であったが、すでに初歩的なガソリン機関が開発されているこの国では、自動車の実用化されていた。そのためコルベールらは列車を下りると、駅から今度は車に乗換えとなった。

コルベールは地球に行ったさいに車に乗ったものの、やはりこちらの世界に車を実用化している国があるということは、彼に大きな感銘を与えずにはおかなかった。

車が首相官邸に着くと、コルベールら一行は中にある大会議室へと案内された。室内は一応絨毯が引かれてはいるものの、見慣れたトリステインやアルビオンの王宮に比べて質素というのがコルベールの感想だった。

そして会議室へ着くと、中には既にロマノフ側の政府要人が集まっていた。部屋の中に用意された長机の一番端、コルベールたちが入った扉に一番近い所に、王冠を被り、ドレスを着た20代前後の美しい女性が座っていた。

コルベールは彼女が女王だと認識し、挨拶をしようとするが、先に彼女の方が立ち上がると、コルベールたちに向かって言った。

「ようこそ、遠路はるばるおいで下さいました。ロマノフ公国を代表して、このアナスタシアが皆様を歓迎いたします。」

ロマノフ公国女王、アナスタシア1世はそう言ってドレスの端を掴んで、片足を折って正式な礼をした。

いきなり女王自ら挨拶してきたので、コルベールは面食らってしまったが、すぐに彼の方からも挨拶をする。

「ああ、トリステイン王国使節団団長のコルベールです。女王陛下自らの歓迎に感謝いたします。」

挨拶を終えると、彼はもう一度アナスタシアを見た。一応即位してまだ数年も経っていない若い女王とは聞いていたが、予想以上というのがコルベールの感想だった。その姿には、なんとなく現在はアルビオンへ嫁いだアンリエッタや、現在トリステインの代王を務めるルイズと重なる物があった。

だがそう考えていられる時間は短かった。すぐに別の人物から挨拶される。

「ようこそロマノフ公国へ、首相のヒロセ、ミハイル・ヒロセです。よろしく。」

（ヒロセ？）

その響きに気になるものがあつたものの、コルベールは形式どおりに挨拶を返す。

「こちらこそ、よろしく願います。」

その後、コルベールらはロマノフ公国側に対面する形で座つた。そして両陣営それぞれ、他の参加者の紹介を終えたところで、いよいよトリステイン・ロマノフ間の国交正常化交渉がスタートした。

## 交渉開始（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ポート・アーサーにて 上

首都のニコラエフスクで行われているトリステインとロマノフ公国の交渉は順調に進んでいた。親書の交換から始まったその交渉の内容は細かく分類すれば多岐にわたるが、とりあえず交渉1日目の主な内容は、両国間の国交を正式に樹立することであった。そのために、両国首都への大使駐在や、貿易関係者の受け入れなどが決められた。

両国の交渉は終始和やかな雰囲気に進んだ。これはそれぞれの代表の人物が良かったことに起因する。

トリステイン側代表のkolbe伯爵はメイジの中でも珍しく、出会う全ての人を冷静に見る目があった。もしこれが保守的な古い貴族だったら、相手がメイジでないということで見下していたかも知れない。

『東方義勇軍』の活躍などで、最近になってメイジでない人間の地位は大きく向上している。特に2ヶ月前のヴィットーリオ訪問の際に、彼が義勇軍に対してアルビオン戦役の礼を言ったことが拍車を掛けた。

それでも人間中々変われないらしく、いまだ以前ほどではないが見下す人間が多い。もしそんな人間が団長だったら、交渉は不調で終わった可能性が高い。

一方ロマノフ公国側もアナスタシア女王とヒロセ首相が冷静な交渉を牽引していた。

これはコルベールたちも後に聞かされることになるが、ロマノフ公国側では、当初謎多き国であるトリステインと国交を結ぶことに懐疑的な声が大きかった。

その一方で、前回の接触でトリステインやハルケギニアの状況を聞き、貿易相手として有益であるという意見も大きかった。この時期ロマノフ公国は内戦後の混乱から抜けきり、国内の経済成長が著しかった。ところが、貿易相手が限られていた。東の中華帝国や秋津州とは戦争こそしていなかったが、正式な国交はなかった。また南のエルフともやはり正式な国交はなかった。国交があるのは、地球でいう中央アジアに属する地域の、いくつかの小国だけだった。

だから西のハルケギニア方面への調査が検討されていたこの時期、向こう側から国交締結と貿易開始の提案があったことは僥倖であった。

こうした裏の事情もあって、両国の交渉が順調に進んだのであった。ちなみに交渉自体は4日間に渡り行われることとなっていた。

さて、そんな感じで交渉が進められていたころ。才人とジョンソンは「おおよど」の艦上から、ポート・アーサーの軍港に浮かぶロマノフ公国海軍艦艇を観察していた。

「いやあすごいね。空を飛べないとはいえ、鉄で出来た軍艦がこんなにたくさん集まっていると、壮観の一言に尽きるよ。」

居並ぶ艦艇を見てはしゃいでいるのはジョンソンだ。空に浮かぶアルビオンで育つ彼にしてみれば、海上のみを動く艦艇が多数終結

している光景は見たことがない。さらにそれらのほとんどが鋼鉄製の蒸気軍艦であるから、驚きも2倍であろう。

一方才人はそんなジョンソンを他所に、スパイよろしく冷静に艦艇の分析をしていた。軍人にとって、相手の戦力を冷静に分析することは必須条項である。現にロマノフ海軍の甲板にも、「おおよど」や「にぎつ丸」を見ている兵士が数多く見受けられた。

ロマノフ公国側の艦艇は、前回亀山教授が映像に納めていた物と同じく、やはり日露戦争から第一次大戦時にかけて建造された艦艇に酷似していた。才人はそうした艦を昔の映画や本に載っている写真などで見たことがある。

「本当に大昔の軍艦そのまんまだな。それに如何にもロシアの軍艦っていう船ばかりだし。」

才人はジョンソンに聞こえないように、呟くように言った。

才人のいた地球の歴史において、ロシアは独特の海軍を作ることと有名な国だった。例えば18cm口径砲を主砲に使う巡洋艦とか（欧米や日本の標準は20cmと15cm）、外洋での航行をあまり想定していない、つまり艦舷の低い艦艇とか、艦艇の比率が非常に駆逐艦や敷設艇、魚雷艇など小型艦艇等に偏っていること等々。

もともと、こうした独特の海軍をロシア人が作ったのにはちゃんと理由があった。まず、ロシアの海は極東、バルト海、北洋、黒海など、面積的には大きくないが非常に多方面に渡っていたこと。そして極東を除けば、波がそこまで高くない、つまりは内海であり必要とされたのが沿岸警備的役割であること。そして多数の戦艦や空母を建造するだけの国力がなかったためである。

ロマノフ公国も、地球のロシアに似た国情であるせいか、艦艇の多くは沿岸警備任務を主とした艦舷の低い艦艇であるように才人には見えた。ただし、ちらほらと外洋までいけそうな艦も混じっていた。

その中に、前回才人を驚かせた軍艦が混じっていた。

「いた！あいつだ！！」

どうやら西のリバウ軍港から移動してきたらしいその戦艦は、他の軍艦とは一線を画する外見をしていた。全長が180m近い艦体に、30cm程度と思われる大口徑砲を3連装4基の配置で搭載している。

才人の記憶によれば、それは帝政ロシア時代に竣工し、その後もソ連で長く使用された戦艦「ガンクート」級、もしくはその準同型艦であった。

日露戦争のハイライトとなった日本海海戦で完膚なきまでに叩き潰されてしまったロシア海軍であったが、その後戦力の回復に努め、ロシア革命時には数隻の戦艦を有するまでになっていた。しかしながらその多くは革命戦争の中で失われてしまった。

そうした艦の中には爆沈と記録されている艦もある。目の前の戦艦もその内の1つかもしれない。

と、そこで才人にはある考えが浮かんできた。もしかして40年前の内戦は目の前の戦艦の乗員に赤軍派が混じっていて、そいつらが起こしたのではないかと。

しかし才人はすぐにその考えを否定した。だったら、目の前にその戦艦が浮かんでいるなどおかしいからであった。

だが見れば見るほどその戦艦に、どこか地球の匂いを感じ取れた。じつとその戦艦を見ていた彼に、後ろから声が掛けられた。

「そんなにあの艦が気になるのかい？」

ジョンソンではないその声に、才人はハッとして振り返った。するとそこには、20前後に見えるロマノフ海軍の士官が立っていた。

「あ、あなたは？」

いきなり現れたその士官に、さすがに才人も目を丸くしてしまった。また傍にいたジョンソンも驚いていた。

「ああ、失礼した？ロマノフ公国海軍本国艦隊司令部付大尉のセルゲイ・ヒロセだ。」

ヒロセという響きが気になったが、才人は返礼をする。

「トリステイン王国、『東方義勇軍』所属の平賀才人中佐です。」

「アルビオン王国海軍、観戦武官のジョンソン・ボーウッド中尉です。」

ジョンソンも続いて返礼した。

「それでセルゲイ大尉、確かロマノフ海軍の人は艦内を見学中のは



ずではなかったんですか？」

才人が尋ねた。

「ああ、すみません。ちょっと好奇心が働いてしまいましたね。単独行動をとってしまいました。」

敬語を使ったものの、セルゲイは特に悪びれた様子もなく言った。才人はそんな彼に好感を持ちつつ、一応規則に従う形で言う。

「だったら、他の人たちの所まで案内しましょうか。このままウロウロされるわけにはいけないので。」

「ありがとうございます。けど、ちょっとぐらい話をしてもいいでしょう。あなたに聞きたいことがありますし。」

聞きたいことも才人にはあった。本来なら提案を断るべきところであったが。結局好奇心の方が勝った。

「良いでしょう。」

こうしてまた、異世界と地球が繋がることとなる。

## ポート・アーサーにて 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

外伝のアイディアがまた尽きているので、ご意見募集しています。それと土日は作者が帰郷するため、更新はあまり期待しないでください。

## ポート・アーサーにて 中

「あの戦艦は我が国が誇る本国艦隊旗艦「エカテリーナ2世」です。全長181m、排水量23200t、最高速力23ノット、30cm主砲を12門持っています。」

セルゲイがその戦艦、「エカテリーナ2世」を見ながら2人に説明した。

「30cm砲を12門か、確かこの「おおよど」の主砲は15cmだから、その2倍ということか。すごいな、そんな巨大な戦艦を持っているなんて。」

ジョンソンが驚きながら言った。先日15cm砲の威力を見ていたから、30cmというさらに大きな主砲に胸をときめかせて当然と言えた。

一方、才人は別のことに気を引かれて、尋ねた。

「この国ではメートルやノットと言った単位を使っているんですか？」

ハルケギニアにもメートルやノットという単位は存在する。しかしながら、その呼称は地球と微妙に違っていた。メートルはマイルであったし、ノットもノルトであった。一応義勇軍内では地球の呼称で使っていたが、いまだ混在していてややこしい。しかしロマノフ公国では地球と同じ呼称のようだ。ますます地球との繋がりを感ぜずにはいられない。

「ああ、すいません。あなた方の国では使っていませんでしたか？それと、自分の方が階級が下なので、平賀中佐は敬語を使う必要ありませんよ。」

セルゲイが微笑みながら言う。才人はこの人に良い印象を抱く。

「わかった。それからあなたも敬語を使う必要はないから。俺は敬語で話されるのがあんまり好きじゃないから。それで、今の質問の答えだけど、いいや、俺のいた国では同じ呼称で使っていたし、ハルケギニアでは呼称こそ違うけど同じ単位を使っているよ。」

才人は異世界ではなく、いつも使っているように国という言葉をしようした。すると、それに釣られる形でセルゲイが尋ね返した。

「国？そう言えば君の名前は少し変わっていたね？それにこの艦に乗り込んでいる人たちの名前も。容姿も我々より東方の人々に近い気がするし。もしかして、中華帝国か秋津洲の出身かい？」

才人は素直に答えを言った。

「いいや、そのどっちでもないよ。多分セルゲイは知らないと思うけど、日本ていう国だよ。」

普段の才人なら東方というところだが、東方の存在を知っているロマノフ公国人に言ってもややこしいだろうと思い、また先ほどの彼が言った苗字のことが気になって、今回は素直に日本と言ってみた。

もしセルゲイが日本人と関係があるならなんらかの反応をするだろうし、知らないにしてもどこにあるか尋ねられるだけだろう。才

人はそう考えていた。

そしてセルゲイの場合前者であつた。彼は日本という単語を聞いた途端、驚きの表情を顔に浮かべた。

「日本？もしかして大日本帝国のことかい？」

この質問の意味は才人にもわかつた。セルゲイの言う日本は太平洋戦争敗戦前の日本であると。もっとも、異次元の世界からも兵器などが流れ込んでいるから、必ずしも才人のいた世界の歴史が当てはまるとは限らなかつたが。

とにかく、才人にとって地球から来た人や兵器の情報を入手するのは有意義なことであるから、才人も返答して、そのまま次の質問をセルゲイにぶつけた。

「いいや、日本といっても俺が言うのは戦後日本のことだけど、何でああなたが日本について知っているんだ？」

才人はより確信を突こうと試みる。セルゲイは才人の問いに対して、特に何かの疑問を持ったようだが、そのまま質問に答えた。

「自分の場合は直接日本を知っているわけじゃないよ。ただ祖父が生まれ育つた国とだけ父親から聞かされたよ。」

「そのお爺さんというのは？」

「祖父は10年前に亡くなつたよ。名前はタケオ、タケオ・ヒロセだつたね。」

その言葉に、才人は飛び上がらんばかりに驚いた。

「広瀬武夫だって!!」

いきなり才人が叫んだものだから、会話していたセルゲイはもとより、話には加わらず港の軍艦を見ていたジョンソンも驚いてしまった。

「一体どうしたんだい？ 大声なんか上げて？」

「ごめんジョンソン、けど広瀬忠夫って言ったら俺の国が昔ロシアって国と戦った戦争での英雄なんだ。」

広瀬武夫海軍中佐。戦争について知る人間なら、絶対に一度は耳にする人物である。彼は1904年に始まった日露戦争における英雄である。当時ロシア海軍の根拠地があつた中国遼東半島の旅順。その港の入り口に旧式の貨物船を沈めて、敵を袋のネズミにする閉塞作戦を立案、指揮したのが彼である。不幸にして閉塞作戦は成功せず、彼自身2回目の作戦で、沈んだ貨物船からカッターで退避中に、砲弾を浴びて戦死してしまった。

ちなみに、沈む直前貨物船内で行方不明となつた杉野兵曹長を探しに行ったことは後に唱歌となり、さらに彼自身の銅像が神田にあつた交通博物館の前に作られたほど、戦前は有名であつた。現在でも知名度が落ちたとはいえ、ミリタリーを嗜めば絶対に目にする。

その広瀬中佐がまさかこの世界に飛ばされて来ていたとは、これまでも意外な物が流れ着いていて何度もビックリしてきた才人であつたが、今回ほど驚いたことはない。

そして才人は、セルゲイが日本と聞いて、大日本帝国の名前を出してきたことにも納得した。

「そうなのかい？祖父はあまり昔のことを語らなかつただけだね。ただ自分の生まれた国は大日本帝国というこの世界にはない別世界の国で、昔その国で軍人をしていただけ言っていたらしいよ。」

詳しいことはわからないが、恐らく砲弾が爆発した時のショックで次元の壁を越えてしまったのだらう。

そして確かに、セルゲイの顔には日本人の血が8分の1混じっているシエスタと同じく、どことなく日本人の面影があった。

「そうだったのか。しかし驚いたな、広瀬中佐がこの世界に来ていたなんて。」

『事実は小説より奇なり』という言葉は本当だったのだと、つくづく思う才人だった。

「自分もビックリだよ、祖父のことを知っている外国人がいるなんて。けど、なんで才人は祖父のことを知っているんだい？もしかして、やっぱり才人は異世界の出身なのかい？」

才人はやっぱりという部分に反応した。

「やっぱり？それじゃあセルゲイは俺が異世界の人間だって予想していたのか？」

才人の問いに、セルゲイは笑って答えた。

「まあね。なんとなくそんな予感がしてただけだよ。」

「けど、それじゃあもしかしてあの戦艦もそうなのか？」

才人は「エカテリーナ2世」の方を見ながら言った。

「察しが良いね。その通りだよ、あの艦は40年前の内戦中に突然現れたんだよ。ただし現れた時は今の名前じゃ無かったらしいけどね。それから乗員も定員を満たしていなくて、動かすのに苦労したと聞いたよ。とにかくあの艦のおかげで内戦は王室軍の勝利で終わることが出来たんだ。」

セルゲイが誇らしげに言った。と、そこで才人はあることを思い出した。

「そういえば、内戦って言うのは社会主義革命だったんだよね？もしかしてそれにも異世界人が介入しているなんてことあった？」

すると、セルゲイはまたも驚いた顔をした。

「そこまで知っているのかい？」

「それじゃあやっぱり・・・」

才人にはさらに聞きたいことが山ほどあったが、それ以上は聞くことが出来なかった。

「ヒロセ中尉！そんな所にいたのか、行くぞ！！」

艦内から出てきたロマノフ海軍の視察団一行に発見され、セルゲ



イは会話を切り上げざるを得なかった。

「了解！！才人すまない。話はまた今度になりそうだ。僕は司令部にいるから、また尋ねてくれ。」

「わかった。ありがとう。」

「それじゃあ2人とも。」

結局、セルゲイはそう言い残して行ってしまった。しかし才人にとっては大きな収穫があった。それとともに、新たな疑問も湧きあがっていた。

ポート・アーサーにて 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ボート・アーサーにて 下

セルゲイと才人が会った翌日、「おおよど」と「にぎつ丸」、それから「オストラント」号の乗員に限定的な上陸許可が下りた。会谈は友好的に進んでいたとはいえ、いまだ正式に友好条約が結ばれた訳ではなかったから、ロマノフ側としてはこれが精一杯であった。

ただし、長期間海上にいる船乗りからしてみれば、たとえ限られた地域だけでも、不動の地面の上に立てる時間は貴重である。そのため多くの乗員たちがこのロマノフ側の好意に喜んだ。

才人も「おおよど」や「にぎつ丸」、「オストラント」号の乗員たちに混じって港に降り、許可された地域を歩いて回った。ロマノフ側が許可したのは、港付近のわずかな地域だけであったが、それでもハルケギニアとは違う異国情緒溢れる、性格には地球のロシアに近い町並みを見られたこともあり、大いに楽しむことが出来た。

この上陸を才人以上に驚き楽しんでいたのが、「オストラント」号の乗員やジョンソンたちであった。なにせ彼らはこれまでに外の世界を見ることが出来なかったハルケギニア人なのだ。

ハルケギニアにいても、別に異文化に触れないことはない。しかしながら、百聞は一見に如かずという諺の通り、実際に異文化の広がる地に行き、直にその場の空気を吸い、見てくることで受ける衝撃は大きい。

こうしてこの日は才人を含む艦隊の兵士たち全てが英気を養うことが出来た。

ただし、全てが上手く行ったわけではない。才人は昨日の話の続きをかったので、ロマノフ海軍のセルゲイ・ヒロセ中尉との連絡を試みた。しかしながら艦隊司令部の建物に近づくことは防諜上の理由から勿論出来ず、加えてセルゲイとの連絡を試みたが、結局この日はなんの返答もこなかった。

そして翌日才人が朝食を艦内の士官用食堂で摂っていると、伝令の兵士が紙切れを持ってやってきた。

「平賀中佐、ニコラエフスクのコルベール全権代表より電報が来ました。」

「うん？あ、ありがとう。コルベール先生から、一体なんだろう？」

才人は焼き魚を掴んでいた箸を置いて、兵士から電報の紙を受け取った。発進場所はニコラエフスクの電信局と書かれ、宛は直接「おおよど」に乗っている才人の名前になっていた。

ちなみに、このロマノフ公国では既に無線電信が実用化されていた。だから今回の電報も直接送ることが出来たようだ。

ハルケギニアでも義勇軍の手によって電信網の開発が急がれていたが、現在は機械の量産と、それを取り扱ったための人材を教育中である。

才人は受け取った紙を一読した。その内容は以下のようなものだった。

「コルベエルヨリサイトクンへ シキユウコチラニコラレタシ」  
コルベールより才人君へ、至急こちらに来られたし。」

電報であるから詳しく書いてはいないが、才人への呼び出し要請だった。

「至急来られたし？ 一体何なんだろう？」

今回の交渉には才人は関わっていない。『東方義勇軍』関係の案件が出て、その交渉は才吉から全権委任された亀山教授が行う手はずだった。第一、才人は歴戦の戦士とはいえ、交渉ごとのノウハウは、それほど持ち合わせてはいない。

その才人を呼び出すとは一体何事であろうか。才人は首を捻った。

だがコルベールからの要請をきかない訳にもいかないので、とりあえず才人は残っていた朝食を急いで食べ終えようと、すぐに艦橋へと上がった。

さて、才人がニコラエフスクへ向かうと一言で言っても、それは様々な手続きを得なければいけない。まず自分が乗り組んでいる「おおよど」の艦長もしくは艦隊司令の小林中将に外出することを告げる。それに併せて港のロマノフ海軍司令部に連絡してもらって港の外へ出る許可を貰い、さらにはニコラエフスクまでの道案内を付けてもらい、ここから現地までの交通手段の手配も必要である。

そうした煩雑な手続きや要請を1つ1つしなければいけない。『東方義勇軍』も規模が大きくなり、かつてのようにはいかないのだ。

才人はこうした手続きやら要請やらは嫌いなのであるが、もちろ

ん軍隊では必要なことであることはわかっているから嫌でもちゃんとするくらいのことは弁えていた。

ところが、才人が艦橋に着くと驚くべきことが待っていた。息を切らして艦橋内の階段を昇り終えた彼を、艦隊司令の小林中将が出迎えた。

「おお、平賀中佐。全権団からの呼び出しがあったらしいね。」

「え！？なんでそのことを知っているんですか？」

一瞬まさか先ほどの電報が彼の元へも伝えられたのかと思ったが、才人はそんなわけないと直ぐに考え直した。宛名が才人のものだった電報を、いくらなんでも小林の所へ持つていくのは不自然である。そうでなければ通信兵が相当切れる人間であるからだ。

だがその答えはすぐに小林が答えてくれた。

「ああ、実は君宛の電報のすぐ後に、私宛に全権団の亀山少将から君に対する便宜を図って欲しいという電報が届いたからね。」

亀山少将とは、先述した亀山教授のことだ。今回は調査ついでに全権代表を任されていたが、彼の本職はこのハルケギニア世界を科学的に調査する物理学者だ。しかしながら、義勇軍内で動きやすいように便宜的に技術少将の位が付与されていた。

技術少将は旧日本軍にあった技術士官と同じようなもので、戦闘に関しては兵への指揮権は持ち得ない。ただし、自分の研究に必要な資材、人材を要求して使う権利は有していた。

だから小林は彼のことを少将と呼んだわけだ。それにしても随分と用意の良いことである。

「まあとにかく、そういうわけで先にこちらからロマノフ海軍の方へ連絡をしておいた。それから君の外出を正式に認めよう。それで良かったかね？」

「は、はい！ありがとうございます。」

思わぬ展開に驚いたものの、色々な手続きが省けたことで、内心は嬉しい才人であった。

それから１０分ほどして、ロマノフ海軍から連絡のために士官がやってきた。その士官はなんとセルゲイ中尉だった。

「やあ、また会えたね。」

気さくに手を挙げてそうやってきた彼に、才人はまたも驚いてしまった。

「なんでセルゲイが？」

「手が空いていたからだよ。それから、昨日は呼び出してくれたみたいけど済まなかったね。ちょっと所要があつて外回りしていたんだ。」

「ふーん。そうかい。」

「まあ世間話はいこまですにして、任務の方をしよう。君のニコラエフスクへの移動の件だけど、内閣府からこちらに要請が来ていたか

ら許可するよ。」

その言葉に、才人は怪訝な表情をした。

「内閣府？なんでそんな所から？」

なんで才人1人のためにそんな所から軍へ要請が行くのか、才人にはわけがわからない。

「知らないよ、僕はただの連絡役だからね。続けるよ、それからニコラエフスクまでの移動手段は鉄道と車しかないんだけど、鉄道は既に朝の便が出てしまって、次の旅客列車は夕方まで待つて貰うしかない。代替の列車を用意しようにも、あとは貨物列車しかない。だから車での移動しかないね。」

「げええー!!」

才人はよくはしらなかったが、ここからニコラエフスクまでは列車で4～5時間くらい掛かると聞いていた。その距離を車で移動するととなると、もう1～2時間上乗せしなければ行けない。

「他にないのかよ？」

「ない。」

才人の言葉に対して、セルゲイはきつぱりと否定した。

至急と書かれていたからなるべく早く行きたいのに、7～8時間も掛けなければいけないとは。才人は頭を抱えてしまった。



ポート・アーサーにて 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ニコラエフスク飛行指令（前書き）

今回の題名は本編とは少しずれています。ある作品のパロディです。

## ニコラエフスク飛行指令

ロマノフ公国の首都であるニコラエフスクにいるコルベールから呼び出しを受けた才人であったが、ロマノフ公国側の説明によると、この日生憎とニコラエフスクへと向かう列車は夕方までなく、車を使っても移動時間は7〜8時間を見積もらねばならなかった。これでは到着が深夜、もしくは明日の早朝になってしまう。

至急と書かれていたのに、そんな悠著なことはしてられない。しかしながら、他に交通手段がないのも事実である。才人は頭を抱えてしまった。

「まいったな、これが日本なら200kmぐらい離れていても、新幹線が飛行機ですぐ行けるのに。」

才人は齒噛みしながらそんなことを呟いた。

「何だって！？シンカンセン？ヒコウキ？」

連絡役としてやって来たロマノフ海軍士官のセルゲイ中尉が、才人の発した聞き慣れない単語に反応した。

「ああ、こつちのこと。」

才人は説明が面倒くさいので、誤魔化して説明を省いた。しかし、それと同時に何かが頭の中に引っ掛かった。

（あれ・・・何だろう？何か引っ掛かるな・・・）

才人は先ほどの自分の言葉をもう一度思い出した。

（新幹線・・・飛行機・・・）

「ああ！！」

才人は大声で叫んだ。あまりに大声だったものだから、セルゲイは驚き、近くにいた小林中将をはじめとする人間全員が彼の方へと振り向いた。

「あ、すいません。気にしないでください。」

慌てて平謝りする才人。そんな彼を、セルゲイが怪訝な表情で見ていた。

「一体なんなんだね？いきなり大声なんか上げて？」

「いやごめん、移動手段を思いついたんだよ。」

先ほどの憂鬱そうな表情からうって変わって晴れやかな表情を浮かべて話す才人。

「何だつて！？そんなこと出来るのかい？鉄道と車以外に、どうやって200kmも離れたニコラエフスクに行く気なんだい？」

セルゲイがそう言うと、才人は人差し指を直角に立てた。

「空を使えば良いんだ。」

1時間後、才人の姿は今回ロマノフ公国使節団の護衛艦としてついてきた、強襲上陸艦「にぎつ丸」の飛行甲板上にあった。飛行甲板の最後尾には格納庫から飛行機を上げるためのエレベーターがあるが、そのエレベーターに1機の飛行機が載せられていた。

上下2枚の主翼を持つ複葉方式のその機体は、全体を橙色に塗られ、胴体と主翼にはトリステイン王国の所属を示す白百合の紋章が書き込まれていた。

その機体の名は93式中間練習機。通称「赤とんぼ」である。もっとも、厳密に言えば空技廠（航空技術廠）が造ったオリジナルの機体ではなく、北海道にある『東方義勇軍』御用達と成った桜花飛行機でコピー製作されたOR1型43式練習機「赤とんぼ」であった。

本来新米パイロットの訓練用に製作、購入された同機であったが、今回「にぎつ丸」には2機が搭載されていた。これは対潜哨戒、偵察、連絡任務に使えるかを評価するためであった。

ちなみにオリジナルの「赤とんぼ」は実際に小型空母「しまね丸」で爆雷を積んでの対潜哨戒機として使われる予定があった。また太平洋戦争末期には後部座席に補助燃料が入ったドラム缶を積み、胴体下に250kg爆弾を抱いて特攻出撃している。

こんな機体で、未熟なパイロットに特攻させるなどもはや論外であるが、出撃した7機全機が何らかの打撃を敵艦隊に与え、あまつさえ駆逐艦1隻を撃沈しているのだから、もはや皮肉以外の何物でもない。

## 閑話休題。

その現代版「赤とんぼ」こと43式練習機が甲板上に姿を現すと、早速待機していた整備兵が機体にとりつき、発艦のための最終チェックを行う。エンジン、機体、操縦系統などに不具合がないか念入りかつ素早くチェックされる。

その機体に向かって、プラスチック製のヘルメットを被り、新たに制定された飛行服に着替えた才人が歩いていった。その姿を見た整備班長が近寄る。

「平賀中佐殿、機体、エンジン、その他各部異常ありません。」

旧陸軍出身と思われる老齢の整備班長が才人に敬礼した。腕も良く、軍人経験も長いのであるが、その軍服につけられた階級章は大尉だった。ただし、生粋の士官という感じではない。

総司令官である才吉の方針により、旧軍をはじめとして、その他元々軍に関係していた人間は軒並み義勇軍入隊後に階級が引き上げられている。それに加えて元が有能な下士官か下級士官であったからこうなったのだろう。

軍隊を支えているのは、彼らのような古参下士官、下級士官、そして兵であると言っても過言ではない。こうした人間に会ったたびに才人は申し訳なく思うのであるが、顔には出さずただ返礼した。

「ありがとうございました。整備感謝します。」

才人は敬意を表して敬語を使う。

「はい。ただいくら「赤とんぼ」でも停船中の飛行甲板からの発進は危険が伴います。お氣をつけて。」

「了解です。ご厚意ありがとうございます。」

才人は頭を下げて礼を言った。それに対して整備班長は驚いたが、直ぐに才人に向かって言った。

「頭を上げてください。……飛行の無事を祈っております。」

2人は再び敬礼をした。そして整備班長は再び「赤とんぼ」の方へと走っていった。

その姿を見送りつつ、才人は自分の少し後ろの方に立っていたセルゲイを呼んだ。彼も義勇軍式の飛行服に身を包んでいた。

「おいセルゲイ！乗るぞ！！」

才人が声を掛けると、彼は直ぐに才人のいる所まで歩いてきた。

「わかった。……けど、本当にこんな物が飛ぶのかい？」

セルゲイは半信半疑のようだった。実はロマノフ公国では鉄道や自動車は発明されているが、何故か飛行機はいまだ実用化されておらず、飛行船と気球があるだけだった。

ところで今回彼が乗り込むのは、道案内役ということもあるが、実際は才人への監視役であった。才人が飛行機による移動を申し出ると、ロマノフ海軍側は困ってしまったらしい。そりや当然である、飛行機という概念が彼らにはないのだから。ただ自国の空をトリス

ティン軍所属の飛行機が飛ぶことの意味は理解できた。

しかしながら、内閣府から便宜を図るように言われた人物の要請を無下に断るわけにもいかず、仕方がなく監視役ということで、1名を同情させることで妥協した。そしてその任務に就いたのが、偶然にも才人と面識のあるセルゲイだった。

「大丈夫だって、ほら後ろの席に乗って。言っておくが操縦装置や計器には触るなよ。」

「了解。」

セルゲイは整備兵の手を借りながら後部座席に乗り込んだ。操縦桿を握る才人も操縦席に乗り込む。そして直ぐに発進前の最終確認を行う。方向舵、昇降舵、補助翼が動作するか確かめる。

それが終わったところで、両手を大きく振って整備兵に退避を促す。それを見て、それまで機体にとりついていた整備兵が一斉に離れた。

整備兵たちが機体から離れたのを確認すると、才人はエンジンのスタートスイッチを押した。それとともに、お約束になっている言葉を叫んだ。

「コンターックー!!」

最初少しばかり不整音がしたが、すぐに搭載された天風改エンジンは勢い良く回り始めた。ポート・アーサーに、プロペラとレシプロエンジンの爆音が鳴り響いた。





## ニコラエフスク飛行指令（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

11月2日、3日と東京へ出て架空戦記ファンと作者が集うI F CONに参加。羅門先生や高貫先生や小林源文に会えて喜び、この作品を読んでいると言ってくれた人がいて喜び、さらにはゼロの使い魔は架空戦記と言っていた人がいたことに喜びました。

それから買ったゼロ魔のゲーム「小悪魔と春風の協奏曲」をプレイして新たな話を考案中。

## ニコラエフスクへ 上

エンジンが始動すると、才人は計器盤を注意深く見る。異常加熱や、馬力が上がらないなどのトラブルが出てないかを見るためだ。始動前にどんなにチェックをしても、機械というのは気まぐれな故障を起こさないとは限らなかった。

もつとも、この機体は現代日本で作られたから当然出来は良い。幸いにも、計器はエンジンになんらかの異常があることは示さなかった。

「さてと、それじゃあいくかな？」

エンジン内の温度が十分に温められた所で、才人は艦橋の側にあるマストにつけられている吹流しを見た。艦は港に停泊しているため、吹流しはそんなに強くは靡いていない。しかしながら、見た限りではちょうど風は向かい風であった。

飛び立つなら今がチャンスである。

「それじゃあセルゲイ、飛ぶぞ！！」

「ああ。わかった。」

才人が無線を介して言った言葉に、セルゲイは明らかに不安そうな声で言ってきた。まあ飛行機は初体験、おまけに船の上からの発進であるから怖くて当然と言えば当然である。

さて今回の発艦は止まっている船からである。一応150mの長

さがある甲板を一杯に使って発艦するが、通常止まっている船から飛行機の発進など行わない。

飛行機というものは、前進する時に翼の下で発生する揚力を使って浮き上がり、飛ぶ。つまり、一定のスピードを出して風を受けなければ揚力が発生しない。だから空母の場合、飛行機を飛ばすときには風上に向って艦首を回して、全速で走って合成風力という人工的な風を起こして飛行機を発進させる。

しかし今回は生憎と、外洋へと船を動かしている余裕もないし、そのためにロマノフ公国側に許可を取っている時間もない。そこで才人は「赤とんぼ」を使っただのである。

「赤とんぼ」は複葉機である。2枚の羽があるため、その分単葉機に比べて風を受ける面積が広い。だから短距離で離着陸出来る利点があった。さらに、それはニコラエフスクに着いてからも、着陸場所を用意に探せるという、まさに一石二鳥の機体だった。

しかしながら、理論的には飛べるとわかっていても、やはり才人も初めてのケースなので、少しばかり緊張していた。

（落ち着け！この「赤とんぼ」なら150mあれば十分なんだ。絶対に行ける。）

心の中で自分に言い聞かせる才人。

この時、「にぎつ丸」をはじめとして、「赤とんぼ」の姿が見えるほとんどの艦艇の上に将兵たちが出て、その飛び立つ姿を今か今かと待っていた。

衆人環視の中であるが、今はそんなこと気にしている時ではなかった。そしてタイミングを見計らって、才人はスロットルを全開にした。

「行くぞ！！」

500馬力の最大出力を誇る「天風改」エンジンが、それまでも増して大きな爆音を立て、機体を引っ張る。そして才人がブレーキを緩めると、機体が前進を始めた。

「ようし、行け！！」

飛行甲板両側にあるスポンソンにいる兵士たちが、艦橋に詰める将兵1人1人が帽子を振り、あるいは敬礼して見送る。

機体は加速して行き、才人が乗りなれたゼロ戦よりもかなり早い段階で風を掴み、揚力が生まれて機尾が浮き上がる。そこで才人は操縦桿を目一杯引く。

甲板の先端まで行く前に、「赤とんぼ」は上手く風を掴み、重力からの束縛から逃れて浮き上がる。フワリという飛行機独特の浮き上がる感覚を乗り込んだ2人が覚えたときには、機体は完全に浮きび、上昇を始めていた。

「やった成功だ！！」

才人は素直にそう口に出したが、実際には油断していない。なぜなら港の中からの発進であるから、停泊中の艦船の上部構造物（マストとか、ブリッジとか）や港の建物に機体を引っ掛けないとも言えない。

だから才人は、操縦桿を引いて失速ぎりぎりの急角度で機体を上昇させた。

幸いにも機体が失速することも、また艦船や港の建物に機体を引っ掛けることもなく、2人を乗せた「赤とんぼ」は無事飛び立つことが出来た。

高度1000mまで上昇したところで、才人は後部座席のセルゲイに声を掛けた。

「セルゲイ、大丈夫か？」

すると、先ほどに比べてかなりトーンダウンした声が返ってきた。

「ああ、なんとか。だけど、空に向かって飛び立つのがこんな怖いものだとはね。」

浮き上がる際の不安定な感覚は、誰でも最初は怖いものである。また上昇してからも絶えず機体は揺れる。こればかりは何度も乗って慣れるしかない。

「まあ誰だってそうさ。それじゃあ高度も十分な高さに達したし、ニコラエフスクへ向かう。誘導頼む。」

「わかった。ニコラエフスクは、直線で見ればここから大体南南西だ。」

少しばかり落ち着いたセルゲイが、地図を広げて言った。一応才人も地図は持たされているが、セルゲイの持っている物の方が精度

の高い物だった。

「何か途中に、目印になる物はあるか？」

「うーん、そうだね……」

セルゲイは口ごもってしまった。パツとは思いつかないのだろう。

と、そこで才人は地上を一端見てみた。既に離陸してから5分ほど経つが、「赤とんぼ」は200kmの巡航速度で飛んでいる。だから既に発進したポート・アーサーからは10km程離れている。

ロマノフ公国は、地球のロシアに似てかなり広い国土で、人口密度は低い。だから地上にある建物も点在しているのみだ。これでは海上程ではないが、迷子に可能性が出てくる。ハルケギニアのようにビーコンもないから、余計その危険性も高まる。

だが、それは杞憂に終わる。すぐに目立つ目印を才人は楽に見つけることが出来た。

「鉄道の線路に沿って飛ぶぞー!!」

広い大地の中で、一本の線を描くように、エニコラエフスクへと続く鉄道の線路がはつきりと空中からは見えていた。それを辿っていけば、嫌でもニコラエフスクに着くはずだ。

「了解。」

セルゲイからすぐに返事が来る。

才人は線路に沿って、「赤とんぼ」を飛ばした。

それから1時間、才人は操縦に専念した。本来ならセルゲイと会話でも楽しめば良いのであるが、彼は初めての飛行機に酔ってしまったため、才人は彼に時折励ましの言葉を掛けるのみで、とても会話と呼べるようなことは出来なかった。

さて、ニコラエフスク上空に無事到着した才人たちであったが、困ったことが起きた。

「参ったな。」

才人は低空に広がる雲を見ながら言った。だいたい街がこのあたりにあるのはわかるのだが、いったいどんな地形であるかすらわからない。着陸に適した場所を探すなど論外である。

「これじゃあ着陸場所を探せないぜ。」

才人は困ってしまった。雲を突き抜けて降下することは出来そうだが、建物にぶつかる可能性があった。

そこで才人は雲が晴れるまでしばらくグルグルとその場を旋回する。

だが2時間近く経っても雲は一行に晴れる気配を見せず、「赤とんぼ」の燃料が心細くなってきた。今回は発艦時の重量を減らすために、ガソリンを満タンまで積まず、3時間強飛べる分しかなかった。



た。

「参ったな・・・どうする？」

才人は燃料計の針を見るが、その針が指し示す量だと、あと飛べ  
て15分である。

「仕方がない。こうなったら雲の下に出よう。」

このまま飛んでいても仕方がないので、才人は一か八かの賭けに  
出た。高度を下げ、雲の下へと出たのである。

するとそこには首都ニコラエフスクの壮大な街並みが広がってい  
た。

ニコラエフスクへ 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ニコラエフスクへ 下

才人は降下してみte驚いた。

「こりや驚きだ！！けっこうでかい街だな。」

首都のニコラエフスクについて、才人は地方都市に毛が生えた程度の規模、ハルケギニアにある都市と大して変わらないと考えていた。しかしながら、その見通しはあまりにも甘かった。

ニコラエフスクはこの世界における大国の首都に相応しい規模の大きな街だった。もちろん、東京とかニューヨークよりは小さく見えたが、才人の想像よりは遥かに大きかった。さらにハルケギニアにはほとんどない高層ビルや近代的な（才人から見て）建物が立ち並んでいた。

ハルケギニアよりは科学が発達している国だとはわかっていたが、ロマノフ公国の国力や科学力はかなりのものようである。

才人はこの国が、地球のソ連のように領土拡張を目指して西に進ハルケギニア撃するようなことがなくて良かったと実感した。

だがそんなことを考えている余裕はあまり残されていなかった。既に燃料は残り10分飛べるか飛べないかまで減っていた。

急いで才人は下を見て、着陸出来そうな場所を探してみる。だが、才人が当初考えていた野原とか河原と言った場所は全くなかった。見えているのは、ただビルや家だけだった。

「どうする・・・着陸できる場所なんかないぞ・・・」

このままでは燃料切れで墜落である。一応2人ともパラシュートはつけているから、機体を放棄して脱出という手もあるが、才人としては貴重な機体を失いたくはないし、第一街の上で機体を棄てれば、どこに落ちるかわかったものではない。

才人は頭を最大限に回転させてなんとか着陸できる場所がないか探す。すると、ちょうど良い場所が見つかった。

「道路か・・・」

街の中心部を走っている幅の広い道路が何本あった。見たところ幅も長さも十分そうであった。それに車もあり走っているようには見えない。だが通行人や架線に機体をぶつける可能性は捨てきれない。

「どうしようかな・・・」

だが、もう迷っている時間などなかった。なので才人は即決した。

「ようし、セルゲイ、道路に降りるぞ！！ベルトの確認をしろ！！」

ゴーグルをしっかりと付け、才人はスロットルレバーに手を掛けた。

「へ！？」

セルゲイがいきなり才人に言われた言葉に反応した。しかし、彼からの返答もよく聞かないまま才人は機体を降下させ始めた。

「ちょっと待った。道路なんかに降りて大丈夫なのかい？」

「わかんねえ！！」

才人はありのままを叫んだ。

「はあ！？」

それまで飛行機酔いでぐったりしていたセルゲイは才人の言葉に反応する形で気力を取り戻した。

「危ないならやめろ！！」

「やめられるならこんなことするか！？燃料がもうないんだよ！！このままじゃ墜落するしかないんだ！！それが嫌だったら黙って見ている！！」

もう喧嘩などしている時ではなかった。すでに高度は200mにまで下がっている。才人は慎重にエンジン出力を下げ着陸態勢に入る。

着陸目標に選んだ道路は幸い車の陰はなかった。いくらか馬車や通行人の影があつたが、道の端に寄っていたため、障害になるようなことはなかった。また電線も張つてある場所があつたが、空を埋め尽くすような程ではなく、こちらも着陸に支障を来たすことはなかった。

才人は「赤とんぼ」を道路に着陸させた。もちろん直線区間だ。

綺麗な三点式着陸（機体の後部を下げながら着陸する方法）で、「赤とんぼ」はニコラエフスクの土を踏んだ。

地面に脚が着くと、才人はエンジンの出力をさらに絞り、ブレーキを掛ける。「赤とんぼ」は複葉の練習機であるから、着陸距離は短い。さすがにテニスコートに着陸は出来ないが、200m程度の滑走距離があれば十分である。

実際、2人を乗せた「赤とんぼ」はかなり短い距離を滑走しただけで停止した。

「ようし、着陸成功。」

「赤とんぼ」を無事着陸させた才人は、ゴーグルを外した。

「セルゲイ、着陸は成功したぞ。もう大丈夫だからな。」

才人は後部座席のセルゲイに声を掛ける。そしてさりげなく燃料計の針を確認する。針は既に限りなく0を指していた。本当に危ういところであった。

「ああ、そうかい。そうか、成功したなら良かった。」

どこか生気が感じられない声ではあったが、セルゲイは才人に返事を寄越した。

「さてと、けどこれからどうしようかな？」

才人は辺りを見回していた。さすがに街中であつたので、「赤とんぼ」が着陸した道路の両側にはそれなりの数の人がいた。だが、

皆飛行機を見たこともないので気味が悪いのか近づいてこない。

「どうしたもんかな？」

才人が困っていると、間もなく前方から何台かの車が「赤とんぼ」の方へと走ってくるのが見えた。

そしてその内の一台が「赤とんぼ」に近づいて止まり、その扉が開いた。

「才人君！！」

中から出てきたのはなんとトリステイン使節団全権のコルベールだった。

「コルベール先生！？どうして・・・あ、連絡が着いていたんですか？」

「ああ、ポート・アーサーから電報でね。君が飛行機でこちらに向かったのはわかった。だが、まさか街の中心に降りとは思わなかったよ。」

コルベールも少しばかり呆れ顔で言った。

「いや、こっちも着陸したくてここに着陸したわけではないんですけど。けど、やっぱりまずかったですかね？」

ようやくここでこれって国際問題だよなと考える才人。国交のない国の飛行機がいきなり首都のと真ん中に無許可着陸したのだから。

「それは後だ。とりあえず機体をどうにかしないとね。動かせるかい？」

「それが、ガソリンがもうないんです。ですから、燃料を持ってきたらどうか、牽引してもらうかしてもらわなきゃいけないんですが。」

コルベールはどうして才人がここに着陸したのか理解した。

「あ！燃料切れだったのかね！？うーん、だとするとどうしたものかな。まあ、とりあえず降りてきたまえ。」

「はい。」

才人は操縦席から出た。

「おい、セルゲイも降りろ。」

「ああ。」

飛行中、散々飛行機酔いに苦しんだセルゲイも「赤とんぼ」から降りた。

「彼が連絡にあった付き添いかね？」

セルゲイの姿を見てコルベールが尋ねた。

「ええ、ロマノフ海軍のセルゲイ中尉です。」

すると、セルゲイはよろよろしながらコルベールに向かって敬礼



した。

「ロマノフ公国海軍のセルゲイ・ヒロセ中尉です。」

「ヒロセ？もしかしてヒロセ首相の息子さんかね？」

「あ、はいそうです。」

その言葉に、才人はビックリした。

「ええ！首相！？」

「うん。」

「ちょっと待った。それって一体・・・」

才人は色々と聞きたかったが、コルベールが止めた。

「才人君、今はそれよりも機体のことの方を先にしてくれたまえ。  
このままじゃ迷惑だから。」

確かにこのまま道路上に機体を置いておくと迷惑なので、早いところ移動させなければならず、才人はそれ以上のことを聞くのは諦めた。

その後、「赤とんぼ」はロマノフ側によって用意された牽引用の車両によって、街外れの広場に移動させられることとなった。

ニコラエフスクへ 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 歴史博物館で

取り敢えずニコラエフスクに到着した才人とセルゲイの2人組は  
コルベールが乗ってきた車に乗り込んで、市中心部を走っていた。

不時着し燃料切れとなった「赤とんぼ」はロマノフ公国側の厚意  
によって、街外れまで移動させてもらえることになり、さらに燃料  
も手配してもらえらることとなり、とりあえず一安心である。

「それで先生、俺をわざわざこっちに呼び出した理由は何ですか？  
何か交渉で不味いことでも起きたんですか？」

コルベールの隣の席に座った才人が彼に尋ねた。

「いや、交渉自体は順調だよ。ヒロセ首相とアナスタシア女王陛下  
が、非常に前向きに会議を進めてくれているからね。予定していた  
交渉は半ば成功のうちに終わっている。」

「それじゃあどうして？」

才人が怪訝な表情をした。

「実はだね、君の世界から来たと思われる物がこの国でも見つかつ  
てね。是非とも見て欲しいんだ。」

「あ、そういうことですか。」

なるほどと納得する才人。たしかにそれが何かを知るには異世界  
人の才人でなければわからない。しかし、同時に疑問も浮かぶ。

「あれ？けど、亀山教授がいるはずじゃ？」

今回ロマノフ公国にやってきたもう1人の異世界人の名前を挙げる才人。

「それが、彼はそれについては才人君に聞いたほうが良いと言ってきたんだよ。しかも、彼は今ロマノフ公国側と単独での交渉を行っている、調べたくても手が空いてないんだ。」

コルベールの言葉で、才人は出発前に父親から聞かされた今回のロマノフ公国での交渉について思い出した。

さて、『東方義勇軍』総司令官であり、才人の曾祖父である平賀才吉大将と義勇軍トリステイン方面軍総司令官であり才人の父親である才助は、対ガリア・ゲルマニア戦に備えて、常に義勇軍（とその同盟軍）の戦力アップに腐心してきた。

しかしながら、新月を利用しての細々とした地球からの輸入と、ようやく初歩的な工業技術を身につけさせたハルケギニアの工業力ではそれにも限界があった。

そこで振って湧いたように現れた東の大国に彼らは目を向けた。少なくとも第一次大戦時程度の工業力と科学力を持っていると予想されたこの国ならハルケギニアで造っている物より性能の良い武器が量産できると考えた。

だから今回、トリステイン王室から許可を受けて、彼らはロマノフ公国政府と主に武器の生産委託に関する交渉を行っていた。

これが地球だったら、仮想敵国になるかもしれない国に技術を渡すことになるが、この世界では地方ごとに人間の生存権が幻獣の多数住む地域などによって分けられているという特殊性から、ロマノフ公国が侵略してくる可能性は今のところ低かった。

そしてこの交渉は実り、後にロマノフ公国ではトリステイン王国軍向け（実際は『東方義勇軍』向け）に小銃や装甲車、さらには駆逐艦の委託生産が行われるのであるが、これは少し後の話である。

#### 閑話休題。

「なるほど。そういうわけですが。それで、一体どんなものが見つかったんですか？ やっぱり武器ですか？」

「まあ、武器であることは間違いないと思うよ。とにかく、見てみればわかるよ。」

ちなみに、この時車にはロマノフ人の運転手と、セルゲイが一緒に乗っていたので、2人の会話は小声で行われていた。

それから数分後、車は目的地に到着した、

「ここは、王立歴史博物館じゃないですか！？」

着くなり、セルゲイが言った。

「歴史博物館？ここにそのお目当ての物があるんですか？」

「ああ、そつだよ。」

と、そんな彼らの傍へともう1台車が止まった。

「いやあ、間に合った。」

その車から出てきたのは、今しがた才人とコルベールの会話の中に出てきた亀山だった。一応交渉を行っていたためか、義勇軍の白い将官用礼装の姿であるが、目に掛けている分厚そうな眼鏡が、いかにも学者という雰囲気醸し出している。

「あれ、亀山教授。交渉中じゃなかったんですか!？」

突然現れた彼の姿に、少し驚きながら才人は聞いた。

「おお才人君。ちょうどさつき終わったところだよ。喜びたまえ、君の曾お爺さんとお父さんから要請されていた、武器の生産委託だが、とりあえず政府レベルでの話し合いはまとまった。あとはこちらのメーカーさんに直接発注するだけだよ。」

交渉を無事結べたせい、彼の表情は明るい。だが一応交渉の内容は機密条項であるから、そうべらべら喋って良いものではない。

「あの、まだ機密段階の情報をべらべら喋るのはどうかと思いますよ。」

だが才人の忠告に対して、亀山教授は軽く言い返した。

「大丈夫大丈夫。どうせ聞いても問題ない人しかここにはいないから。」

そう言って笑う彼の姿を見て、才人は真剣に思った。

（この人に交渉任せて本当に良かったんだろうかと？）

自分の研究には真剣に取り組んでいるとは聞いているが、才人には目の前のどこか気の抜けた姿からはとても想像できなかった。

「まあいいや。それでコルベール先生、俺に見て欲しいものを早く見に行きましょう。」

才人はコルベールの方を向いて言った。

「そうだね。それじゃあ行こうか。」

一行は博物館の中へと入った。一応地球のそれと同じく、入館料は必要だったらしいが、既に連絡がなされていたらしく、そのまま入ることが出来た。

さすがに歴史と名がついているだけに、展示内容はこの国の生い立ちから始まっていた。ちなみに、何故かわからないが展示物につけられている説明文の文字はハルケギニアと同じであった。だから才人にも読むことが出来た。

ところで、はっきり言えば普通文字が、全く違う文化圏で一緒なということとは有り得ない。現実に地球では現在でも多数の言語がある。もっとも、これでも少ないくらいだ。

現在の文字や言葉は近代国家が形創られた時代、国の指導者たちが国民意識の統一を目的に、それまで地方ごとに全く違う言葉であったのを、次々と統一していったことにより生まれた。

日本でも明治維新の頃は地方出身者の方言が強く、意思統一が難しかったとされている。一時は日本語を廃して英語を標準語にするという乱暴な意見まで出たが、これは最終的に東京方言を標準語にすることで落ち着いたという事実がある。

それなのに、この世界ではハルケギニアだけでも国ごとに方言はあっても言葉も文字も同じである。さらに、遙か離れたロマノフ公国でも文字や言葉が同じとなると、この世界の文化学は相当複雑怪奇なものと言える。

まあそれはともかくとして、一行は博物館の中を進んでいった。

ロマノフ公国の生い立ちは、ロシアのロマノフ王朝と似ていて、宗教の守護者として皇帝が国を平定した所から始まっている。ただし、何故か国の面積は最初からバカデカイのだが。

もともと、そうした部分は今回の目的ではないので、少しばかり見ただけでスルーし、本命の展示物はずっと後、既に終わりに近づいたあたりのコーナーにあった。

そのコーナーは「公国の危機」と題され、40年前にこの国で起きた革命騒ぎについてのことが紹介されていた。

展示物は主に王家が首都を追われ、苦難の末に奪回するまでのことを紹介することに重点が置かれていたが、革命軍側の使った武器の展示コーナーにそれらの展示を遙かに上回る存在感を誇示する巨大な鉄の塊がおかれていた。

それを見た途端、才人は仰天してしまった。



「これって・・・T55じゃないか!!」

## 歴史博物館で（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それから、ロマノフ公国で信仰されている宗教の名前が思い浮かびません。どなたか御意見下さい。

## 過去の遺物

才人の目の前に現れたのは、巨大な鉄の塊であった。そしてそれは間違いなく古びてはいるが、旧ソ連製のT55型戦車だった。しかも、砲塔には赤い星が描きこまれていた。

ちなみにT55戦車というのは、第二次大戦後直ぐに開発量産された戦車であるが、後の世で言うMBTメインバトルタンクの走りとなったことである。1970年代に量産はストップしたが、他のソ連製兵器と同様社会主義諸国や紛争発生国に売却され、21世紀を迎えた現在でもかなりの数が稼働している。

ただし、才人の目の前にある車両は赤い星、さらには車体にキリル文字のスローガンが描かれているので、どうやらソ連で使われていたもののようだ。

それが異世界に何故が存在していた。しかもである。その隣にはやはりソ連製の装甲車とトラックが置かれており、さらにソ連製の小銃や携帯ミサイルランチャーもボロボロではあるが展示されていた。

「一体どういうことだ？」

才人はこれまでに、地球から流れてきた兵器を結構見てはきたが、戦後世代のしかもソ連製兵器がこのようにまとまった数で見つかったことはない。

彼が首を傾げていると、セルゲイが説明を始めた。

「これらはみんな、40年前の革命騒ぎで叛徒が使った武器だよ。」

「何だつて！？それじゃあやっぱり、社会主義革命を引き起こしたのは地球人だったのか！？」

それなら納得がいく。例えばこの世界にやってきたのが、バリバリの政治将校とかソ連の共産党員だったら、王制を打倒して労働者と農民による革命政府を作ると言い出してもおかしくない。加えて武器を持っていれば、実際に実行に移すことも可能だと思っただろう。

「それはまちがいないだろうね。結局叛徒のほとんどは最後の戦闘で殺されちゃったけど、わずかに捕虜になった人間の中にそんなことを言っていた人間がいたとは聞いたことがあるよ。ただ、その話を信じている人はあまりいないけどね。」

セルゲイは苦笑いしながら言った。彼がその話を信じているのは、彼の祖父が異世界からやってきた人間であつたからだろう。

「それじゃあ、これらも地球からこの世界に飛ばされてきた物というわけか、実に興味深いね。」

コルベールが興味深々で言う。

「しかしながら、これらと一緒に飛ばされてきた人間はもう1人残らず亡くなっているらしい。非常に残念だ、当時の状況を聞くことが出来れば、地球とこの世界が繋がる原因を調べられるのにな。」

そう悔しそうに言うのは亀山教授だ。彼はこの世界と地球が繋がる因果関係を専門に研究しているだけに、そう思えるのだ。

と、そこで才人は思い出した。

「そう言えば、セルゲイのお爺さんの広瀬中佐は、この世界に来た時のことで何か言っただけじゃなかったのか？」

「さあ、特に聞いてないね。」

セルゲイは首を横に振った。

結局、どうして彼らがこの世界にやってきたかは、これまで同様全くわからなかった。ただし、収穫もあった。それはこの地球から兵器や人が飛ばされてくる現象は、決してハルケギニアのみではないということだった。

その後、博物館から出てコルベールと亀山とわかれた才人は、「赤とんぼ」を引き取りに行くが、セルゲイから40年前の革命についての話を聞いた。

当時のロマノフ公国は、決して王政府が暴政を行っていたというわけではなかったそうだが、厳しい生活を強いられていた人もいたそうだった。

そんな中で、突然社会主義政府創設をうたった反乱軍が現れたらしい。当初は短時間で騒ぎは鎮圧されると楽観視されていたらしいが、強力な兵器（近代的なソ連製兵器）で武装した反乱軍は次々と政府軍を打ち破り、首都に迫ってきた。

さらに、一部の国民や軍が反乱軍に加担するようになり、王政府は一時首都からの避難も真剣に考慮した。しかしながら、そこで義

勇軍を組織して王政府側について戦ったのが、セルゲイの祖父、つまりは広瀬中佐だった。

広瀬中佐の軍は、正面からの攻撃を避けて、ひたすら敵の補給線への攻撃やゲリラ攻撃に徹したそうだ。海軍中佐の彼が何故そのような考えを起こしたのかは不明であるが、とにかく、彼はゲリラ戦による襲撃を繰り返した。

この戦術は見事に当たり、反乱軍側は物資不足に陥った。とくに致命的だったのは、その当時ようやく試掘されたばかりのガソリンの補給が途絶え、近代兵器が使えなくなってしまったことだそうだ。そして、弾薬や燃料が尽きた革命軍には敗走する部隊が続出した。

またロシア革命と違って、確かに王政府へ反感を持っていた国民がいたのは事実だが、その数が決して多くなかったとのいうのも、後に革命失敗の一因となったそうだ。

そして半年後には、やはり異世界から現れた戦艦「エカテリーナ2世」が沿岸部にあった最後の拠点を艦砲射撃によって撃破した。これによって、革命騒ぎは終結した。

この時の功績により、広瀬中佐は侍従長として王政府に迎えられたそうだ。また、革命の反省から、王政府は民の意見が出来るだけ政治に反映できるよう、立憲君主制に移行したらしい。

「ふーん。広瀬中佐はこの国のために戦ったのか・・・けど、海軍軍人だった彼が、どうしてゲリラ戦術なんかしてたんだ？」

「さあね、お祖父さんは昔のことはあまり喋ってくれなかったから。」

才人としては、同じ地球から来た人間として、彼のことをもっと調べたかった。しかしながら、圧倒的に時間が足りなかった。才人はトリステイン王国とロマノフ公国間の外交交渉が終わる2日後には帰らなければいけないのだから。

「そうか。出来るなら、この国や彼のことにしてもっと調べたいんだけどな。」

「けど、今回の交渉で我が国と、君のいた国・・・トリステインだっけ？その国と国交が結ばれれば、好きなだけ来れるようになるよ。」

「そうだな・・・」

才人は残った交渉の成功を祈るばかりだった。

「ところで、君がいた日本という国はどんな国なんだい？お祖父さんが生まれた国がどんな国だったか是非とも知りたいんだけどね。」

「そうだな・・・俺のいた日本はお前のお祖父さんが生きた時代から見て100年近く後の時代だったけど、とりあえず教えるよ。俺のいた日本は・・・」

そんな感じで会話していたので、時間はあっという間に過ぎ、2人は「赤とんぼ」の置かれた街外れの広場に何時の間にか着いていた。

本当なら、そのままポート・アーサーに飛び立つはずだったが、そうは行かなかった。何故ならロマノフ公国の軍人たちに囲まれて

しまったからだ。（もつとも、実際は日没の関係でどっちにしろ飛べなかった。）

「君、これは空を飛ぶ機械だそうだが、一体どのような用途で使うかね？」

「船から飛んだとポート・アーサーが伝えてきたが、本当かね？」

「かなり速いスピードで飛んでいたそうだが、一体どのようにして飛ぶのかね。」

飛行機に興味を持った軍人たちは、義勇軍の制服を着ていた才人を質問攻めにした。

「ええ！！ちよ、ちよつと。」

結局、こうして才人と何故かセルゲイも足止めを喰らい、結局才人は残った滞在期間を、ロマノフ公国の軍人たちに飛行機について説明する時間に費やすこととなった。

ちなみに、その間行われた交渉は、全て滞りなく進められ、最終的にトリスティンとロマノフは友好条約を結ぶこととなる。



## 過去の遺物（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ロマノフ公国訪問編は次話くらいで切り上げて、そのあとは新しい話に移りたいと思っています。

## 帰路

ロマノフ公国滞在4日目、この日の昼過ぎ、才人はようやくポート・アーサーに帰れることとなった。ニコラエフスクについてからの2日間、ロマノフ軍関係者や技術者に飛行機に関する質問攻めにあつて閉口していたが、ようやくそれから開放された。

「さてと、それじゃあ帰るとしますか。コンタックー！」

才人は「赤とんぼ」のエンジンを始動させた。今回は2日間ずっと外に置きっぱなしで、才人が簡単な点検をしただけであつたがエンジン、機体ともに異常は来たしていなかった。

「それじゃあ飛ぶぞセルゲイー！」

才人が無線機越しに、往路同様後部座席に乗り込んだセルゲイ中尉に声を掛ける。

「ああ、わかつた。」

彼の声は心なしか弱い。それに加えて、才人にはわからなかったが顔色も青かつた。前回の飛行がよっぽどのトラウマとなっているようだ。もつとも、だからといってここで降ろす訳にもいかなかった。こればかりは彼に慣れてもらう以外になかった。

「んじゃあ、出発ー！」

才人は「赤とんぼ」を発進させた。前回は停泊中の「にぎつ丸」からの発進であつたが、今回も通常の飛行場ではなく、道路の直線

部分を利用して発進する。ロマノフ公国には飛行場がないからこうするしかない。

道路は動員された警官と兵隊によって必要な長さは封鎖されているので、障害物を気にする必要はない。

才人は心置きなく機体を滑走させて離陸させることが出来た。短距離の滑走で揚力を得た機体が空に浮かび上がる。

「よし、成功!!」

才人は安全に飛行するために十分な高度まで機体を上昇させた。そして旋回飛行に入ると、離陸するために協力してくれた人々へ向けて感謝の意を込めて手を振り、最後に一回バンクを行うと、ポート・アーサーに向けて進路を取った。

この日の天候は晴れ、雲量2と飛行が難しい状況にはなかった。だからポート・アーサーまで直線ルートの最短距離飛行が出来、さらに目標も雲で見えないということとはなかった。

ただし、実は発進したのが「にぎつ丸」であつたように、才人の乗っている「赤とんぼ」は「にぎつ丸」の艦載機である。であるから、戻る場所も「にぎつ丸」でなければならぬ。

そのため、ニコラエフスクとポート・アーサー間で数回に渡って行った連絡により、今回の着艦は、「にぎつ丸」が出港後に海上で行うこととなった。

才人は本当に「にぎつ丸」が出港したのか確認するために、一端港の上空を旋回してみた。すると、予定通り既に早朝ニコラエフスクを出発して先行したトリステイン使節団を乗せて出港したようだ。

それを確認すると、才人はビーコンの受信装置の電源を入れた。

義勇軍では飛行機の迷子を防ぐために、基地や艦艇ごとに独自の周波数で誘導電波を出すことが、この時期は義務付けられていた。受信装置は直ぐに「にぎつ丸」から発進された電波を拾った。後はその電波に乗って飛ぶだけだった。

10分後、外洋を単縦陣で航行する艦隊が見えてきた。その最後尾を「にぎつ丸」が走っていた。

「見つけた！ようし、着艦に入るぞ。ベルトの確認をしろ！！」

「了解。」

才人の言葉に対して、セルゲイが直ぐに応答してきた。発進前は顔面蒼白にしていた彼であったが、今回は多少なれたおかげか前回のように、ひどい飛行機酔いにはなっていなかった。

才人はエンジン出力を絞って機体を降下させた。既に「にぎつ丸」の方でも無線用アンテナを倒し、さらに着艦時に使用する光学装置を点けて受け入れ準備を整えていた。

そして「赤とんぼ」は「にぎつ丸」の甲板に車輪をつけた。そのまま速度がついているので機体は前進していくが、装備された着艦用のフックがワイヤーの一本を引っ掛け、無事停止した。

強制的な停止であるために、当然パイロットには振動が伝わる。才人は既に手馴れた物で大丈夫だったが、後部座席のセルゲイは見事に頭を打った。

「痛!!」

「お！大丈夫か？」

「ああ、なんとか。」

プラスチック製のヘルメットをつけていたおかげで、頭に直接的な打撃は無いはずだ。ただ痛いものは痛い。

才人は彼のことを気にしつつ、直ぐにエンジンを切った。すると、待機していた整備兵が一齐に機体に駆け寄ってきた。

「お帰りなさい。」

発進した時見送ってくれた整備班長が、操縦席を覗き込んできた。

「ただいま戻りました。整備よろしくお願いします。」

「は、お任せください。それじゃあ機体を格納庫へ収納するので。」

整備班長に促されて、才人は機体から降りた。少し遅れて、セルゲイも機体から降りてきた。

「大丈夫か？」

「うん、ちょっと打っただけだから。」

セルゲイは、まだ少しばかり痛む頭を撫でながら言った。

2人はそのまま機体に載せていた荷物を受け取ると、搭乗員用の控え室へ向かい、そこで飛行服から持っていた通常の制服に着替えた。

そしてそれが終わると艦橋へ向かい、艦長の安田少将に挨拶した。

「トリステイン王国、ロマノフ使節団、義勇軍派遣武官平賀才人中佐、ラ・ロシエールまでご厄介になります。」

「ロマノフ公国、駐トリステイン大使館付武官、セルゲイ・ヒロセ中尉です。同じくご厄介になります。」

2人は敬礼して挨拶した。安田もそれに対して返礼する。

「平賀中佐、任務ご苦労。そしてセルゲイ中尉、ようこそ『東方義勇軍』強襲揚陸艦「にぎつ丸」に。私が本艦の艦長の安田少将だ。大使館付武官には狭い部屋しか提供出来なく申し訳ないが、2日間の航海中、ゆつくりと寛いでくれ。」

今回セルゲイがポート・アーサーのロマノフ海軍本国艦隊司令部に戻らず、才人とともに「にぎつ丸」にまでついてきたのは、彼が今回首都であるトリスタニアに設置されることとなったロマノフ公国大使館付の武官となったためであった。

「はい、ありがとうございます。」

艦橋での挨拶を終えると、2人は用意された士官用居室へと移動

した。

「ふう、ようやくゆつくり出来る。」

部屋に入るなり才人はベットに横たわった。2日間飛行機についての質問攻めに遭い、さらに今日も飛行機の操縦をしたために、才人はくたくたであった。

「お疲れ様。」

セルゲイがねぎらいの言葉を掛けた。

「ありがとう。それにしても、セルゲイもよく大使館付武官なんかに志願したね。」

「そりゃあ、こんなチャンス滅多にないからね。特に誰も知らない未知の国だよ。皆は怖がっていたけど、僕は絶対にこれは歴史を大きく変える瞬間だと思う。」

今回セルゲイは命令ではなく、志願して大使館付武官となっていた。

「歴史を大きく変える瞬間ね・・・まあ、とにかくがんばれよ。」

「ああ。」

気軽に会話をする2人であったが、後にこの2人は本当に歴史を変える（才人の場合は既に変えている）大物になるのであるが、それを知る者はまだこの世界には1人として存在しなかった。

往路では翼竜との接触というアクシデントがあつたが、帰路ではそのようなことはなく、艦隊は無事ラ・ロシエールに入港した。

才人は無事その任務を終え、今回の旅における収穫を才助、才吉、そしてルイズに報告した。

全てを終えて、平穏な日常になるかと思っていた才人であるが、そんな日々は長続きしなかった。次なる事件が彼を待ち構えていた。



## 帰路（後書き）

とりあえずロマノフ編終了です。次回からは最近プレイした「小悪魔と春風の協奏曲」にちなんだ話をやってみます。

御意見・御感想お待ちしております。

## 新たなる敵 上（前書き）

お詫び。春名編なのですが、作者がアイデアに詰まったのと、本編の展開を考えると必要性が薄いので、一端削除しました。

いずれ再構成の上、外伝2部で掲載したいと考えています。読者の皆様には多大なご迷惑をお掛けしてしまいまして、申し訳ありません。

## 新たな敵 上

トリステイン王国とロマノフ公国の間に国交が結ばれ、人と物の行き来が可能になったことはハルケギニアの歴史上、非常に画期的な出来事であった。それまで未開の地である東方（厳密にはその一部）との連絡路を開いたこともそうであるが、ハルケギニアに比べて遥かに高い技術力を持つ地との交易が可能となったのだ。

この時期、トリステインとロマノフ間で行われた交易の方式は物々交換、いわゆるバーター方式であった。これはハルケギニアで使われていたエキューをはじめとする通貨と、ロマノフ側のエーブルとの交換比率がしつかりと定められていなかったからだ。

そのため、トリステインがロマノフから物品を購入する際は、主に外洋諸島の島々で発掘される、金・銀といったレアメタル、そして石油・石炭といった鉱物資源を輸出し、その見返りとしてロマノフ側の商品を受け取るという形が主に採られた。

ちなみに1ヶ月遅れで国交を結んだアルビオン王国との間の交易も同様の方式が採られた。この方式が終わるのは、2年後通信技術の発達によりトリスタニア、ニコラエフスク、ロンディニウムに為替取引所が設けられた時となる。

こうして始まった貿易で、ロマノフ側から購入された物品は多岐にわたるが、多かったのが工業製品であった。その中でも、工業用機械の輸出はトリステインとアルビオンの工業化を促進させた。

義勇軍の調査によればロマノフ公国の科学レベルは地球で言うところの日露戦争から第一次世界大戦にかけての間である。地球の口

シアはその時代における工業力が低かったが、ロマノフ公国はそうではなく、ある程度の工業水準を備えていた。そのおかげで、トリステインやアルビオンへ輸出を行うだけの力が十分にあった。

なお交易できる地域が限られ、なおかつロシアと似たような国情のロマノフ公国がどうしてこのように発展出来たかは不明であった。後の研究では、これに関して地球からの介入があったという説が発表されたが、今回は関係ないのでその話は省く。

さて、そのロマノフ公国からの輸入品には、『東方義勇軍』とその同盟軍が発注した武器が多数含まれていた。生産委託されたT1型小銃や、T2型騎兵銃、75mm野砲、同高射砲といった火器、43式装甲車と言った車両、さらには駆逐艦まであった。

ちなみに新たに採用されたT3型短機関銃は技術漏洩の可能性を考えてしばらくの間、委託生産はなされなかった。

この内43式装甲車というのは、旧日本軍の97式軽装甲車を元に開発された装軌車両で、37mm砲、または20mm機銃を装備した2人乗りの戦闘車両だった。小型で外見は貧弱な印象であったが、まともな近代兵器を備えていなかったガリアやゲルマニアの兵士たちからは非常に恐れられた。また最大装甲も12mmと厚くはなかったが、それでも十分だった。

同車両は交易開始1ヵ月後に、ロマノフ公国のコロメンスキー自動車会社で製造が開始され、ハルケギニア戦役までに60両が引き渡された。

ロマノフ公国からの武器輸入は、それまで貧弱な工業力しか備えていないトリステインやアルビオンでの細々とした生産、さらには

仮想敵国ゲルマニアでの委託生産にしか頼れなかった『東方義勇軍』の武器不足を一挙に解消することとなった。加えて義勇軍の同盟軍といえるヴァリエール公爵領で編成された常備軍の『ケンプ大隊』、義勇軍から戦技指導を受けていたトリステイン王室直属の銃士隊、同じくアルビオン王室直属の『ライオン旅団』の武器充足を急速に促すこととなった。

もちろん、輸入されたのは何も兵器ばかりではない。民間用の車や家庭用の電球など民需製品も流れ込んだ。ただし、これらが本格的に輸入されるのはハルケギニア全体が落ち着き、さらに輸送力が大幅に増した時期を待たねばならなかったが。

そんな中で、武器以外の物としては最優先で輸入された物があつた。鉄道用レールやそこを走行する蒸気機関車や貨車、客車である。これはつい先日開通したばかりのトリスタニア〜ミライ間の鉄道の延長が王政府から正式に認められ、急ピッチで工事が進められたことに起因する。

開通当初のレールはハルケギニアで製造されていたが、それだけではとても必要量に達することは出来なかった。ところが、ロマノフ公国ではすでに鉄道網は大分整備されており、レールや車両の大規模な製造も行われていた。しかも、ハルケギニア地域では30kgレールを造るのが限界であつたのに対して、ロマノフなら40kgレールを製造することができた。

レールの重みが増せばそれだけ強度と安定感が増し、旅客列車なら速度のアップと乗り心地のアップが可能となり、また貨物列車ならより重量のある物を運べるようになる。

ちなみに余談であるが、枕木は木材が豊富なアルビオンからの輸

入品である。

さて、そんな感じで鉄道の路線延長が急速に進められることとなった。最初に行われたのは、ミライから西3km地点に出来た新しい歩兵・砲兵駐屯地への敷設だった。

新しい基地の建設は、繰り返し行われた部隊の拡張により、ミライの基地が手狭になりつつあったから行われた。

ただし、この鉄道の延長は初期の段階から計画されており、路盤自体は最初の鉄道開通時に既に出来上がっていたため、線路の敷設、信号設備の設置（もちろんタブレットと腕木信号機）、駅の建設などは1ヶ月という短時間で終わった。

ちなみに、この鉄道建設には地球からスカウトされた技術者も従事し、建設用機材の一部も地球製のものが使用された。

そんな感じでトリステインとアルビオンが発展し、義勇軍や同盟軍の戦力が急速に拡充していく中で、その喜びを一編に吹っ飛ばす事件が発生した。

事の発端は、ガリア領内にいる『トウ機関』スパイからの通報であった。その内容は、ガリア国内にたくさんの飛行機が現れたという物だった。

当初はまさかと思われたが、もし事実とすれば由々しい事態であ

る。そこで、トリステイン方面軍司令官の平賀才助少将他義勇軍の幹部たちは、航空機による偵察を行ってみた。

スパイが予め位置を報せてくれていたので、地文航法を使ってそこまで飛んでいくこと自体は簡単であった。

ちなみに、偵察に使われたのは武装を外して主翼と胴体に下向きカメラを取り付けた「零戦改」で、防諜上の理由から機体の国籍マークを塗りつぶし、黒一色という如何にもスパイ機であった。ちなみにパイロットも身分を証明する物を一切身に着けていなかった。これは万が一撃ち落とされた場合に備えての処置であった。

数日後偵察は無事成功し、早速偵察機が撮影してきた写真が現像された。もつとも、撮影に使われたのはデジタルカメラなので現像というより、データの取り込みであったが。

それはともかくとして、偵察機が写した映像は中高度からだったので、不鮮明であった。そこで画像解析ソフトを使って修正、拡大した上で印刷した。

印刷された写真は、早速行われた会議で才助や才人、その他の幹部陣が見る所となったが、見た途端彼らは顔を蒼くして驚きの声を上げた。

「そ、そんなバカな……」

「こんなのありかよ……」

偵察機が撮って来た写真に写っていたのは、どう見ても飛行場と思しき基地と、そこに並ぶ100機以上の大小の飛行機の姿だった。





## 新たなる敵 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 新たな敵 下

突如として仮想敵国であるガリア国内に現れた航空機。その数は義勇軍の保有する全ての航空機数に匹敵する程であった。だから義勇軍の幹部たちは、大いに仰天し、そして震撼した。自分たちの優位が意図も簡単に崩される可能性があったからだ。

早速、その現れた相手が何者であるかの検証が始まった。

『東方義勇軍』では地球製兵器を回収して使用する機会も多いことから、武器に関しての資料を多数地球から持ち込んでいる。その多くは、日本で普通に買える市販の雑誌や書籍だ。例を挙げれば世界の船とか、ミリタリー・クシックスとか、光の名鑑シリーズとか、アーム・マガジン等である。

もちろん、その他にも兵器の図面なども所有しているが、手軽さから良く利用されるのは上記の類の本だ。これらの本は司令部本部地下に造られた資料室に置かれており、許可が無ければ見ることは出来ない。もともと、生粋のハルケギニア人からしてみれば、たとえ侵入して持ち出しても、日本語をはじめ地球の言語で書かれているのでチンプンカンプンで終わるであろうが。

とにかく、そうした資料を使って写真に写っている機体の正体が次々と判明した。

写っている機体はいずれも第二次大戦時のようなレシプロ機で、大は3発機から小は単発小型の戦闘機であった。そしてそれら機体の中には、多少なりともミリタリーを嚙んでいる者なら判明できる機体があった。

「とりあえず、この20機くらいが列線を作っている戦闘機は、フランスのドボワチンD520戦闘機だね。」

才人が拡大された写真を手に取って言った。他の幹部たちも、彼の言葉に頷いたり賛同の声を上げた。

ちなみにD520戦闘機とは、WW2（第二次世界大戦）で最も性能が優れていたフランス戦闘機であった。厳密に言えば、フランスが直ぐに降伏したために、この後戦闘機が開発されなかったと言うことなのだが、その性能は当時ヨーロッパの空を制覇したドイツ軍の戦闘機と互角であった。またドイツ占領後も量産は継続されている。

最高速度は534km、武装はヨーロッパの機体に多いプロペラ軸に通した20mm機関砲1基に、7.5mm機銃4基である。

その戦闘機が、今回発見された飛行場には合計22機並んでいるのが確認された。また、資料室室長でもある大久保特務大尉が、付け加える形で指摘した。

「この機体の機種と尾翼には、特徴的な黄色と赤色の縞模様が書き加えられています。ですから、ヴィシー政府軍ですね。」

ヴィシー政府とは、フランス降伏後にドイツ側に立って戦ったフランスの政府だ。ちなみに連合国側は自由フランス軍である。

ちなみに彼は銃器についてのプロフェッショナルだが、最近は艦船や航空機の技術も随分と溜め込んでいる。なにせ、1日中そうした資料に目を通しているのだから。

一方、戦闘機部隊隊長の菅野中佐は、別の写真を見ながら言った。

「この飛行場が枢軸軍の物であるのは間違いありませんね。こつちには数は少ないですが、ドイツのメッサーシュミット戦闘機が写っています。」

彼の持つ写真には、機体を茶色に塗装し、主翼にバルカンクロイツ（鉄十字）、そして尾翼に小さくて見難くはあるがハーケンクロイツ（鉤十字）を描き込んだ、液冷式の戦闘機が写っていた。

第二次大戦を取り扱った映像に必ず一度は出てくる程有名な、ナチス空軍の主力戦闘機であるメッサーシュミットMe109戦闘機だ。

この機体は実に10年近くに渡って改良が重ねられ、最後のヴァリエーションはK型（つまり11番目）である。そしてヴァリエーションごとに性能や武装が異なる。

大久保がその写真を除きこんで見て、溜め込んだ知識を披露した。

「これはどうやら、主翼の形状からしてF型ですね。マルセイユの乗機だった奴ですよ。」

F型だとエンジンの改修により、最高速度が600kmにまで増している。ちなみにマルセイユと言うのは、アフリカ戦線で戦って戦死したドイツ軍の撃墜王のことだ。

そのメッサーシュミット戦闘機は都合12機が確認された。ちなみに、この中に黄色で14のマークを付けた機体があったのだが、

生憎とその事実がわかるのは実際に彼らが戦う時になってからだ。  
た。

そして、写真に写っている機体で最も数が多かったのは、前記した2機種と同じく液冷式の単発戦闘機だが、主翼と胴体の特徴的なカタカナのトを3つ併せたような国籍マークの機体だった。

この国籍マークはその場の誰もがわかった。ファシスト・イタリア政府軍の物だ。

「これは、MC<sup>ムッキ</sup>の202だね。」

ミリタリー知識のある才人は、一発でその正体を見破った。

「そう見たいだな。それが凡そ40機か。イタリア人の造った戦闘機など怖くは無い・・・と言いたい所だが、これだけの機数が揃っていることや、相手のパイロットの腕を考えると侮れんね。」

才吉はそう言うつと溜息をついた。

第二次大戦のイタリアは、早々と降伏したせいか弱いイメージが付きまといっている。時には「へたりあ」などと呼ばれることもあるし、戦後ドイツを訪れた日本人にドイツ人が「今度はイタリア抜きでやろうぜ!!」と言ったという噂話まで出現した。

しかしながら、実際はそこまで弱くは無い。例えば地中海ではMASという魚雷艇や体当たりボート、さらには人間魚雷がイギリス海軍に大打撃を与えている。ちなみに、イタリアの特攻兵器は脱出装置付きなので、生還率は非常に高かった。

またソ連と戦った東部戦線や、アフリカ戦線でも一部の歩兵や騎兵部隊は果敢な戦闘を行い評価されている。

まあ、その後の内戦やファシスト狩りで出た死者の方が戦争での戦死者より多かったというのが、少しばかり気になるが・・・

とにかく、決して弱いばかりではなかった。

今回出現したイタリアの空軍は、国の工業力の低さや装備していた機銃やエンジンの出力不足のために日本やドイツのような派手な戦果を挙げることが叶わなかったが、それでも地道に良く戦い、エース（5機以上撃墜者に与えられる称号）も輩出している。

そのイタリア空軍の主力戦闘機であったのが、MC202だ。最高速度は580km、武装は7.7mm機銃2基と12.7mm機銃2基。当時の戦闘機としてはあまり高いとは言えない性能であったが、数がそろい、ベテランパイロットが使えばそれなりに脅威となる。

『東方義勇軍』では性能的には引けを取らない戦闘機をそれなりの数を揃えているが、パイロットの数と経験では不利と思われた。

また、才助らが警戒したのはなにも戦闘機ばかりではなかった。写真には戦闘機以外にも、少なくとも30機近い双発や3発の爆撃機（後にドイツのハインケル、イタリアのSM81、フランスのポテ爆撃機と判明）が並んでいる姿が写りこんでいた。

双発以上の爆撃機は義勇軍が保有していない機種で、当然対処戦法だって研究していないし、対策も立てていなかった。だからそれだけでも大きな脅威である。

これらの機体はいずれも1t以上の爆弾搭載が可能で、さらに機体が大きいために射撃するのにコツがある。だからこれまで単発機程度の大きさの龍やグリフォン相手に訓練してきた義勇軍にとって、厄介な敵となる可能性が高い。

そして、義勇軍幹部陣全員が恐れたのが、これら爆撃機による都市爆撃だった。

## 新たなる敵 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 緊急会議 上

分析が終わった所で、早速対策会議がスタートした。参加者はトリスティン方面軍司令官の平賀中将、戦闘機隊司令官の菅野中佐、攻撃機部隊司令官の神林学少佐、練習機部隊司令官のエドワード・グルー特務中佐、砲兵部隊司令官の大野太一少佐、特別参加の佐々木技術少佐、兵器保管庫・資料室責任者大久保特務大尉、そして王室連絡将校である才人と、書記係の兵士2名であった。

まず会議が始まるなり、才助が口を開いた。

「諸君らも既に感じていると思うが、今回発見された枢軸軍部隊と思われる航空兵力がガリア軍側に付いた場合、我々は非常に苦しい立場に立たざるを得ない。もちろん、ガリアの味方にならない可能性もなくはないが、楽観的に物を見るのは御法度だ。我々としては敵になった場合を想定して、その対策を立てなければならない。」

その言葉に、全員が頷いた。才助は参加者の顔を一瞥すると、最初に菅野に尋ねる。

「それではまず、菅野中佐、戦闘機部隊司令官として何か意見はあるかね？」

すると菅野は表情を渋い物にして、すぐに口を開いた。

「自分としましては、もしこれらの航空戦力が敵に回った場合、こちらが若干有利か、5分5分の状況になると思われます。我々が使っている飛行機はいずれも何らかの改造を行っており、性能がアップしております。カタログデータを見る限りでは今回発見された飛

行機のいずれよりも優秀です。そして何より機体や武器弾薬の補給があります。これは大きな要素であると考えています。しかしながら、パイロットの総数や練度面では劣っているので、圧倒的有利は有り得ないと断言します。」

すると、神林少佐が同意したように意見を口にした。

「今の菅野中佐の意見には自分も賛成です。我々の機体の性能は向上していますが、戦闘機、爆撃機部隊ともにまともな敵相手に戦った経験が不足しております。パイロットの数も半年経った現在もそんなに増えていませんし。苦戦する可能性は十分にありえます。」

神林は元日本陸軍の爆撃機パイロットであるが、「呂501」潜水艦に乗っていた人間だ。ドイツ大使館付き武官として、ドイツ空軍に関しての情報を日本へ持ち帰る途中で飛ばされてきた。大の急降下爆撃信者であるが、その一方で戦略爆撃の効果も肌身で分かっている貴重な人間だ。現在はSBDに乗っており、また航空技術に造詣があるので、新月の時には桜花飛行機へ設計指導で出かけたりもしている。

その彼、爆撃機乗りであるが、同じ時代出身であるので菅野と仲が良く、意見の交換等を頻繁に行っている。

そして2人の共通の悩みが、パイロットの養成が一行に進んでいないことだった。この時点で地球からのスカウトやこちらの世界に飛ばされていた人間の編入を除く新規に配属されたパイロットは、戦闘機部隊が3名、爆撃機部隊2名に過ぎない。アルビオン方面軍を併せても10人に満たない状況だった。

神林はさらに付け加えるように言った。

「自分としましては、怖いのが今回発見された爆撃機が戦略爆撃に使われることです。ドイツやイタリアの爆撃機は日本の物よりは爆弾搭載量が多いですし、さらにスピードも速いです。」

爆撃機専門家の神林が表情を暗くして言う。本来なら、30機程度の双発爆撃機は前線で敵部隊を爆撃する戦術爆撃に充当するのが常識である。しかしながら、まともな防空体勢が整っていないハルケギニアなら、充分重要拠点や都市を爆撃する戦略爆撃が可能である。場合によっては、王宮への爆撃という最悪の展開も考えられた。

その展開を頭に思い描いた参加者一行は青ざめた表情になった。もし首都への爆撃、特に王宮への被弾は、即敗戦につながり兼ねないし、たとえ敗戦にならなくても、国民の士気に悪い影響を与える可能性があった。

「そうとなると、我々だけでも防空体制を構築する必要があるな……グルー中佐、練習生の養成状況はどうか？」

才助が今度は、新任の練習機部隊司令官であるグルー特務中佐に声を掛けた。彼は32年前にバミューダ海域から飛ばされてきたアベンジャー雷撃機隊の隊長だった。その後才人と出会い、機材は義勇軍に提供したが、本人はこちらの生活に慣れていたため、最初は義勇軍に参加しなかった。

しかし、義勇軍ではパイロットが不足、特に教官役のパイロットが不足していたので、彼に参加を要請した。そして、村人のミライ市への移民と職の保証を条件に、新たに4人のアメリカ人パイロットが義勇軍に参加することとなった。

グルーもまた、渋い表情で答えた。

「残念ですが、現状では急速に大量のパイロットを育成する事は不可能です。このハルケギニアでは国民に対する教育レベルが低く、機械への理解度が0に近いのです。車や戦車ならともかく、空を飛ぶ飛行機のパイロット養成には最低半年必要で、それさえもマンツーマンでしなければ、とても戦闘には出せません。もちろん、シエスタ女史やカルロ兵長のように素質があれば良いのですが、そのような人間は稀にしかおりません。現状では、後半年で出せるパイロットは10人程度でしょう。どんなにがんばっても20人はいかないでしょうね。」

グルーの返答に、参加者全員が失望の表情を浮かべた。これでは敵と同等の戦力を揃えるなど論外であった。

「そうになると、既存の戦力を如何に上手く使うかになりますね。」

菅野の言葉に、またも全員が頷く。そして彼は続けた。

「自分としましては、戦闘機部隊において対爆撃機戦闘の訓練を今後行うようにしたいと考えております。」

さらに神林が発言する。

「それから、防空網の構築も必要かと。電探・・・失礼レーダーに通信網、さらに部隊を分散避難させる基地のさらなる整備。それから、場合によっては王政府を通して住民の避難マニュアルの作成が必要です。」

「それについては当然と言えるだろうな。今後総司令とも話し合っ

て地球からの調達や、王政府との折衝を行うこととなるだろう。・  
・それから、大野少佐！」

「はい！」

それまで黙っていた砲兵部隊司令の大野少佐に才助は顔を向けた。彼は元「にぎつ丸」乗り組みの砲兵で、同艦の砲兵指揮官を部下に譲り、現在はミライ西基地で地上砲兵の教育にあたっていた。

「対空砲部隊の配備にはどれくらい時間が掛かるかな？」

「ロマノフ公国から間もなく75mm高射砲8門が到着いたします。半年後までには、さらに16門が到着する予定です。それから高射機関砲や高射ロケット砲も数は揃います。兵の養成は、荒削りになると思いますが、なんとか実戦に出せるレベルに上げて見せます。」

ロマノフ公国との貿易の開始により、これまで調達困難であった物も調達が可能となっている。高射砲や高射機関砲もその一部であった。これらはロマノフ公国でも研究が進み、技術の蓄積を目指していたものだけに、喜んで生産してくれた。

ちなみに、これらの武器の代金は、外洋諸島の鉱物以外にも、ロマノフへの様々な技術供与への見返りでもなされている。

閑話休題。

とにかく、そうした高射砲や高射機関砲によって新たに対空砲部隊が編成される予定だった。当初は空中艦隊や竜騎士対策に少数用いられる予定だったが、その程度では済まなくなってしまった。恐らく大野少佐はこれから地上砲兵と対空砲兵の養成でてんやわんや

となるだおる。

「それではよろしく頼むぞ大野少佐。それから、佐々木技術少佐！」

才助は、明らかに軍人とは思われない男に声を掛けた。

## 緊急会議 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者は帰省と家族旅行のためにパソコンの前に座る機械が減り、更新が間延びしています。読者の皆様には大変ご迷惑をおかけします。

さて、作者の兄はパイロット練習生としてニュージーランドで訓練をしています。双発機で片エンジン止めの離着陸や、夜間飛行など興味深い話をしてくれました。その彼の話によれば、新月に向かつて飛ぶのは可能だそうです。作者としては少しばかり不安のあることでしたが、可能とわかってホットしております。

それから、この作品にアイディアを何度も出していただいている、ジョン・ドー先生が本作の二次創作を連載中です。

## 緊急会議 下

才助に指名された佐々木技術少佐は、技術士官が示すとおり生粋の軍人ではない。彼は、現在『東方義勇軍』向け航空機を生産している地球の桜花飛行機からの出向者である。歳は30歳と若い、一流大学の航空工学科を卒業した人間だ。ただし、病弱のために大手企業への就職は叶わず、仕方が無く2流どころか当時3流だった桜花飛行機に就職した口だ。

本人は飛行機的设计など一生出来ないと嘆いていたが、運命の悪戯か、桜花飛行機では第二次大戦レベルのレシプロ機とはいえ、大量の飛行機を生産することとなり、さらに既存の機体の改良や、新機体の設計、生産まで委託されるという、ある意味大手企業よりも嬉しい事態（実際彼は大喜びした）となった。そしてその仕事の中心を担うことになったのが彼だった。

「はい。」

才助に呼ばれ、それまでただ話を聞いていた彼は、顔を才助の方へと向けた。

「現在我が軍は、君の会社に飛行機を発注しているわけだが、その設計と生産に携わっている側の君としては、何か意見はあるかね？あまり良い話ではないが、先ほど言ったようにパイロットの増員が見込めない以上、既存の機体の性能をなるべく上げなければいけない。となると、最も頼りになるのは君たちだ。」

その質問に、佐々木は淡々と語り始めた。



「まず、機体の改良についてですが、それについては可能とだけ申し上げておきます。エンジンの換装や風防の取替え程度でも、性能はさらに向上するでしょう。ただし、それには機体を一度地球の工場へ持つて帰る必要があります。こちらでも出来なくはないですが、設備と工具、さらには人員が限られていますので・・・その手間や費用を考えるなら新造の機体を作るか、もしくは長期的なメリットを考えるならこちらに工場を作った方が得策だと思います。」

すると、彼の言葉にグルー特務中佐が反応した。

「工場を作るだって？そんな事可能なのかな？確か小銃や機関銃の工場を作るのだって当初は苦労したと聞くぞ。」

ハルケギニアにおける生活が長い彼としては、この地に飛行機工場を作るなどとは微塵も考えていなかったらしい。

「確かに、これまでだったらそうでしょうが、しかし現在は状況が変わりつつあります。工場を稼働させる電力は、充分に目途がつきます。そして既に我が社ではDC3型輸送機を改設計したOY1型輸送機がロールアウトしています。この機体はオリジナルよりも多い5t程度の荷物、または20人近い乗客を乗せられます。ですからこれまでより効率的な輸送が可能ですし、持ち込める物も以前より大きく出来ます。そうすれば機械類も持ち込めます。さすがに大型の4発爆撃機を作れと言われれば無理でしょうが、単発機程度の生産工場なら出来ない事はありません。」

彼の発言に、参加者から歓声が起きる。だが、そんな中で才助は冷静に聞き返した。

「それで、もしその工場を作った場合、いつごろ稼働できるかね？」

「そうですね・・・機械類の持ち込みは1回で出来るでしょうが取り付けに2ヶ月、工場自体の建設に2ヶ月。工員の教育に3ヶ月程度と考えれば・・・伸びれば1年、突貫でやっても半年ですね。」

この言葉に、今度は落胆の声が漏れた。半年では恐らく間に合わない。よくてギリギリだろう。

ただし、工場の建設事態は今後ハルケギニアの発展を考えれば悪い話ではない。何せ月に1回、数日間だけしか飛行機を持ってこれないよりも、毎日飛行機を生産できるほうが補充には便利である事など子供でも分かる。特に戦時では相当重要な問題だ。

「まあ、飛行機工場の建設については、総司令と話し合って進めよう。幸い先日地球から倒産したが腕の良い建設業者を会社ごとここにスカウトしてきたからね。彼らに手伝って貰えば建物の建設もスムーズに進むだろう・・・とりあえずこの話はここまでにして、目下すぐに出来る対策については何かないかね？」

話題を切り替え、再び才助は佐々木に尋ねた。

「それについては、機体については現在我が社で新型戦闘機2種類を計画中です。いずれもモデルが存在しているので、3ヶ月もあれば初号機がロールアウトします。それと、パイロットや整備兵等の人材面についてなんですが・・・」

「何かあるのかね？」

「はい。地球からさらにスカウトしてはどうでしょうか？向こうなら機械を理解している人間は多数降りますし、レシプロ機の操縦

ならジェット機よりも容易です。何よりこの世界なら、文字はともかく言葉が通じるので英語が出来ずに諦めた人間などをスカウトできるかもしれませんよ。」

これまで義勇軍の新規パイロットは、ハルケギニア内でのみ募集してきた。地球からしなかったのはそうした人材を探し出し、こちらに連れて来るだけの余裕がなかったからだ。しかしながら、既に地球との太いパイプが出来上がっている現在ならそれも出来る。

と、そこで才助が気づいた。

「もしかして、宛でもあるのかな？」

「はい。実は知人に何人がそういう人間がいます。いずれも経済的な理由などで操縦ライセンスを取る余裕がなかったり、素質はありましたが語学面で落とされた人間です。」

「なるほど・・・ようし、なら地球の人材募集係に連絡して、そうした人間も探してもらおう。」

何人集まるか全く分からないが、それでも今は1人でもパイロットが欲しいので、才助はこの案を採用しようと思った。

2人の会話が終わった所で、今度は才人が手を上げた。

「あの、さっき佐々木さんは2種類の戦闘機を設計中って言いましたが、なんで2種類なんですか？生産することを考えるなら1種類の方がよくありませんか？」

すると、数人が才人に同意する声を上げた。確かに、桜花飛行機

のような小規模会社であるなら、数種類の飛行機を作るのは現場に混乱を生む可能性があった。ただでさえ、既に数機種の飛行機を生産しているのだ。

「それはだね、1種類が重戦闘機で、もう1機種は軽戦闘機なんだよ。」

「あ、なるほど。」

才人は納得した。佐々木の言う重軽戦闘機というのは、機体重量のことではなく、主に武装やエンジン出力で対比される類別だ。厳密には重が大馬力、重武装、高速で、航続距離や旋回性能を犠牲にした機体。逆に軽戦闘機は低馬力で速度や武装を犠牲にして、航続距離が長く旋回性能を良くした機体だ。

義勇軍では零戦や「隼」など軽戦闘機が圧倒的に多い。しかしながら、爆撃機相手や凡用性を高めるなら重戦闘機の方が便利だ。ところが、パイロットが軽戦闘機に乗りなれると、重戦闘機は扱いづらい。現に「隼」のパイロットが「コルセア」の乗ったところ相次いで事故を起こしてしまった。

そのことをパイロットからの聞き込みで知った桜花飛行機は、高価だが性能が高く多様とに使える重戦闘機と、凡用性は低いが対戦闘機や対ドラゴン程度なら充分の性能を持ち、扱いが容易な軽戦闘機の2種類の設計を同時に行っていた。

「それで、その新型機はどんな機体なんですか？」

戦闘機隊を預かる菅野中佐が尋ねる。

「重戦闘機については、FW190と「紫電改」戦闘機などを参考にしています。軽戦闘機の方は、F2A「バッファロー」戦闘機をモデルにしています。」

「何バッファロー！？何であんな機体を参考にしたんだ！？」

菅野中佐ら数人が声を上げた。そりやそうである、「バッファロー」戦闘機は低性能で有名な機体で、日本軍人にしてみればやられ役でしかない。そんな機体作られても嬉しくない。むしろ嫌である。

だが、佐々木の方は自信満々だ。

「そんな邪険にしないでくださいよ。確かにピア樽のような機体ですが、エンジンの出力は上がっていますし、機体も新素材を使って軽くなりますから、きっと見違えますよ。まあ、生産コストを抑えられるというのも理由なんです。」

だが、菅野中佐はしかめっ面のままだった。

ちなみにこの機体は、後にOS3型戦闘機として採用され、安価で使いやすい戦闘機としてハルケギニア各国の空軍や、ロマノフ公国でも使われるのだが、それは別のお話だ。

「まあ、とにかく、今回の会議で出た意見を早急に実行に移すよう、皆尽力するように。いいかな？」

「了解！！！！」

才助が締める形で、この日の会議は終了した。



## 緊急会議 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお、「バッファロー」戦闘機を出したのは自分の趣味です。すいません。

それから次話はどんな話を書こうか迷っています。アイデアがある方はどうぞお寄せください。

## 頓挫と革新

緊急の幹部会議で出された意見は早速実行に移された。ただし、その全てが上手く行ったわけではなかった。パイロットの人材確保や新型戦闘機の開発は順調に進んだのだが、レーダー網と防空網の開発は最初の段階から暗礁に乗り上げた。

現在トリステインは『東方義勇軍』の出現とアンリエッタ、その後のルイズのおかげで最近改革が進んでいる。しかしながら、未だ旧態依然とした領邦国家体制であることに変わりはない。そのため、王家直轄地や平賀家領を除く地域では、戦時など緊急の時期を除けば活動するのに許可を得なければならない。

ところが、各地の領主はこれまで分散避難用の飛行場の建設許可は出してくれたが、今回のレーダー基地の建設には難色を示した。

彼らからしてみれば、実際にこれまで戦歴を上げてきた飛行機が自分の領地にやってきて、いざと言う時は自分たちを守ってくれるという協定（王家のお墨付き）、さらには平時の間は5機以上を常駐させないという条項があったからこそ、飛行場の設営を許可してくれた。（実際には王家やヴァリエール家の強い後押しもあった。）

しかしながら、元々近代兵器の概念さえないこの世界において、レーダーのような電波工学を使った兵器を、ハルケギニア人がそう簡単に理解できるはずも無く、むしろ飛行機以上に理解させるのに厄介な代物だった。

だから才吉や才助らが、いくら直接出向いて説明しても無駄であった。それどころか、電波という見えない波を使って敵を探知する



と説明したところ、逆に気味悪いと一蹴されてしまう始末であった。

結局の所、王家直轄地（ちなみにこの世界ではレコン・キスタ派についたの貴族領地は没収されて全て王家直轄地となっている）となんとか理解してもらえた（と言うより金で釣った）数箇所の領地には基地の設営ができたが、それ以外は駄目であり、リーダー網に大きな穴が開いてしまった。

これを聞いて才人はルイズに協力（ルイズやウェールズもこの話を聞いて協力を申し出てくれた）してもらうべきだと才助に進言したが、これも最終的に総司令官の才吉によって却下された。

「これまでだって大分両王家の後ろ盾を使って事を進めてきたんだぞ！これ以上そんなことして見る、余計貴族の顰蹙を買うだけだぞ！」

というのが才吉の言葉であり、実際のところそうであった。

王家や一部縁の深い貴族からは厚い信頼を貰っている『東方義勇軍』だが、未だ消えぬ平民蔑視の感情のせい、その他の貴族の受けはお世辞にも良くはなかった。むしろ、戦争の手柄や領民を横取りし、さらにやたら王家に厚遇される相手としてかなり悪い。

さすがにこれらによって内乱が起きていることはいらないだろうが、他の貴族との関係がこれ以上悪化するのには義勇軍としては得策ではなかった。そうなったら、現在進めている鉄道の各方面への延長や、交易に支障を来す可能性があった。

それらを総合的に判断して、才吉らはしぶしぶリーダー網の建設に関しては大いなる譲歩をせざるを得なかった。そしてこの代償が

後に、それぞれレーダーを拒絶した貴族領や、ひいては王都トリスニアに最悪の結果をもたらすこととなるのだが、まあそれはこの時点では未来の話だった。

そんな中で、アルビオン解放戦争から8ヶ月、義勇軍が進めていたある事業がようやく成就を見た。その日早朝、首都トリスニアから5 kmほど離れたミライの街の一角でそれはスタートした。

その建物は他の建物より高い特徴的な鉄塔を備えており、中には音響機器が多数設置されていた。実はこの建物、ようやく先日になって完成したラジオ局であった。

トリスティンにおけるラジオ放送は、計画としてはかなり早い段階からスタートしていたが、電信や電話など軍事目的に転用可能な物が優先され、さらに強力な電波を飛ばすための送信機や受信機の入手、加えて中継基地の設置に戸惑ってしまい、ようやくこの日のスタートとなった。もちろん、今回の事業にはコルベール率いる科学研究所も協力しており、今後の維持管理の一部は彼らに委ねられる予定だった。（後に交通通信省へ移行。）

ちなみに、電波を受信する側であるが、いきなり一家に一台のラジオを用意するのはさすがに無理であったので、村や町の中心地、または代表者の家に大きめのラジオが1台ずつ置かれることとなった。昔の街頭テレビのようなものだ。加えてその電源は、やはり地球から持ち込んで設置された風力や太陽光発電によって賄われる予定だった。

既に数回の試験放送が行われ、電波が飛んで受信されることは確認されていた。そしていよいよスタートする本放送では、前日の内にミライ入りした現トリステイン王室代王のルイズが、国民に向けての第一声を発する予定だった。

「な、なんか緊張するわね。」

控え室で待つルイズが、原稿を持つ手を震わせながら言った。実は彼女、これまで大人数相手の演説はほとんどしたことが無かった。そんな彼女を、夫である才人が笑いながら見ていた。

「大丈夫だってルイズ、演説って言ってもスタジオでマイクに向かって話すだけだから。リハーサルだってしたし。」

だがしかし、話す当人からしてみればそんな言葉気休めである。

「わかってるけど、それでも緊張するのよ！あんたは良いわね、直接喋るわけじゃないから。私は仮にもトリステインの王なのよ、万が一失敗したら、それは即トリステインの恥になるのよ！！緊張するなって言うほうが無理よ！！」

王宮では自分を信頼しているアンリエッタのためと思つて重臣たちに威厳を持つて接している彼女も、夫の前では地の自分を見せびらかせていた。

もつとも、才人自身はそんなに心配していなかった。ルイズはこんな風にやる前は緊張するものの、実際にやればきつちりこなせるということを知っていたからだ。本来ルイズは賢く、また強い意志を持つて事をなす娘なのだ。もつとも、才人が傍にいればやりや

すいということも事実である。だからこそ、顔を見せない今回の放送には、才人が傍に付いているのだった。

そして予定の時間がやって来た。

「ルイズ殿下、スタジオの方へお入りください。」

スタッフが彼女を呼んだ。

「はい。」

彼女は覚悟を決めて、立ち上がった。才人も立ち上がると、彼女の肩に自分の手を置いて言った。

「大丈夫、ルイズなら出来る。」

先ほどの少し冗談めかして言葉とは違い、今度はやさしく言った。すると、ルイズは安心したのか途端に笑顔になる。

「うん、ありがとう才人。」

そして彼女は、普段王宮で振舞うような凛々しい物へと表情を変えると、スタジオの中に入った。そして、リハーサル通りにマイクの前へ立った。放送開始予定の朝9時まで後2分。

スタッフが機器の異常がないか最終チェックをする。1分半後、全てのスタッフがOKの合図をした。それを確認したディレクターがルイズとアナウンサーに向かって言った。

「それじゃあ、秒読み入ります。10、9、8、7、6、5、4、

3、2、1、スタート！」

音響係がボタンを押し、軽快な音楽が流れ出した。その音をバツクに、アナウンサーが喋り始めた。

「皆さんこんにちは、こちらはミライにありますトリステイン第一放送です。本日よりよろしくお願いいたします。今日は本放送スタート記念……」

放送は順調にスタートした。才人は控え室のスピーカーでそれを聞いていた。

アナウンサーによる冒頭の挨拶が終わると、ルイズが喋る番である。

「……それではこれより、現トリステイン王国代王殿下にあらせられる、ルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエール殿下による、国民の皆様へのお言葉を流します。」

ルイズの前に立つマイクの電源が入り、ディレクターがルイズに向かって合図した。ルイズは軽く頷くと、一瞬目を閉じて気持ちを落ち着け、そして喋り始めた。

「親愛なるトリステイン王国国民の皆さん、私ルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエール、今日皆さんに直接声を掛けれることを光栄に思いながら、喋りたいと思います。」

ルイズがした放送はおよそ5分ほどの短い物であったが、王が国民全てに向かって語りかけるといふ異例の事態に、多くの国民は驚き、感動を与えた。そしてそれが、彼女への疑念のイメージを大き

く払拭させ、後に彼女が正式な王位に就く下地になることを、この時点では誰もわからなかった。

放送を終えた当の本人はというと。

「ああ、疲れた。」

と、ホット一息吐いていた。そしてそんな彼女に、才人はやさしく労いの言葉をかけたのであった。

## 頓挫と革新（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 交流 上

レーダー基地建設は暗礁に乗り上げたものの、佐々木技術少佐立案の地球におけるパイロットの確保事業は順調に進み、開始1ヶ月後までに、新たに15名もの候補者をスカウトすることに成功することとなる。またそれに伴い、才助を初めとする元自衛隊の人脈を生かして教官役の人間のスカウトも進められた。こちらはパイロット候補者ほど簡単ではなかったが、それでも3名のスカウトに成功している。これにより、1年以内に40名近い新規パイロットの配属の目途が立ち、義勇軍幹部らを喜ばせた。

また桜花飛行機における新型戦闘機の開発も、元の機体が存在するだけに順調に進み、1カ月後には軽戦闘機の初号機が、さらにその1ヶ月後には重戦闘機の初号機が完成する見込みが立ち、こちらも義勇軍幹部らを大いに喜ばせた。

既にガリア国内や、首都であるリュティスのベルサルテイル宮殿に潜入しているスパイから、ジョゼフ王は遅くとも半年以内に行動を起こすという連絡を受けているだけに、戦力や防衛体制の拡充は急速に進められていた。特に編成が遅れていた砲兵や狙撃兵部隊、さらには海軍力も増強されつつあった。

この内砲兵は、旧日本軍の90式75mm野砲をモデルに開発された新型の後装式砲である43式野砲が続々と配備され、さらに口ケット砲や高射砲、高射機関砲の生産が進み、一気に戦力が強化された。もちろん、兵の練度はこれからの訓練に掛かっており、砲兵部隊指揮官の大野中佐（部隊拡充により進級）らの意気込みは高かった。



砲兵より若干遅れて編成された狙撃兵部隊も、梶田中佐の肝いりでスカウトされた友澤中尉（他部隊との兼ね合い等から進級）の下で練成が進みつつあった。

そして海軍力は、ロマノフ公国製の新型艦の建造と配備や、また同国の助けによる乗員の練成が進んでいた。

トリスティンとロマノフが比較的短期間で協力関係を結んだのは既に記したが、これにともない『東方義勇軍』は多数の技術を同国に供与している。具体的には重油専焼缶や爆雷、電気溶接と言った軍事技術から、繊維や農業などの民生技術など多岐に及んだ。もちろん、渡すと不味い技術（潜水艦とか高性能の魚雷）などは意図的に外されている。

しかし、これらはいずれも、ロマノフの技術者たちが泣いて喜ぶほどの物であったために（実際これら技術は10年から15年近く先を行く物であった）、同国の技術力は一気に上昇した。

これによって、同国のアナスタシア女王（正確には内閣）は、返礼として一部の輸物物資の無償化、さらにトリスティンが求めた艦船乗員の練成に協力する意向を発表した。これによって、重油石炭混焼缶を備えた巡洋艦「ボロジノ」、練習艦1隻の艦隊がラ・ロシエール海軍基地に派遣されている。

さらに、同国国内では日本海軍の特型駆逐艦を参考に設計された駆逐艦「ノール」級、商船改造ながらハルケギニア世界で初の空母となる「ブリシנגアメーン」の建造も進みつつあった。

これに対して義勇軍側も、さらなる援助をロマノフに対してスタートさせた。それが航空技術の供与であった。ただし、ロマノフに

はその下地がなかったので、取り敢えず技術研修生と、同じくパイロット研修生数名の受け入れに留まったが。

また、対ガリア、ゲルマニア戦に伴う作戦プランも作成が本格化していた。ちなみにこの作戦プランは通称レインボープランとされ、それぞれのケースに対して色で呼称される作戦プランが練られた。具体的にはガリア相手なら青、ゲルマニア相手には赤、ロマリアには黄色、その他諸国（グルテンホルフなどの小国）には黒、ロマノフにはオレンジと言った具合である。またこの計画にはアルビオン、トリステイン国内の騒乱に対処する白と紫も存在したが、オレンジと後者2つの計画は可能性が低いとして、青や赤ほど厳密な物ではなかった。

そんな感じで、徐々に戦争に対する準備が進みつつあったが、それは何も『東方義勇軍』だけの話ではなかった。例えば義勇軍から武器の供与や戦術の指導を受けた部隊の中で、銃士隊は小銃や機関銃の扱いのみならず、限定的ながら迫撃砲の使用術や狙撃戦術の吸収に努めていた。その他の部隊も合同訓練を活発に行うなど、練度上げに力を注いでいた。

また、これまで面子からか戦術の変更などを拒んでいたメイジ主体の王軍部隊の中にも、改革の意識が起き上がりつつあった。特にこれまで一方的な惨敗に憤慨してきた下層や若い兵士に顕著であった。

こうした兵士の中には、自主訓練名目などで義勇軍に出入りしたり、また義勇軍兵士と私的に会って意見を交換したりする等の積極

的な動きをする者もいた。

ラジオ放送開始から数日後のミライ基地に、そんな王軍の若い兵士が数名やって来ていた。その相手を、ちょうど非番だった平賀才人中佐とカル口兵長の小隊がすることになった。

「初めまして平賀中佐、自分は王軍竜騎士隊のルネ・フォンク中尉であります。」

才人とたいして歳が変わらないと思われる若い王軍の士官は、代表して才人に挨拶した。もっとも、才人としては堅苦しい挨拶は嫌いである、特に自分と同じような歳の人間には。

「ああ、初めまして。それでルネ中尉、今回はあくまで私的な交流だから、そんな堅苦しくなくて良いよ。俺のことは才人で良いよ。」

その言葉に、ルネ中尉は一瞬呆気にとられたような顔をしたが、すぐに顔に笑みを浮かべると、言い返した。

「わかりまし・・・わかったよ才人。僕のことルネって呼んでくれ。」

それからお互いの部下を紹介しあった後、早速才人とルネらは意見交換へと移った。この日ルネらは自分たちの自慢である竜騎士は連れていなかった。もっとも、義勇軍航空隊との模擬空戦はこれまで嫌という程やっており、才人もルネもお互いのことはそれなりにわかっていた。

と、話を本格的に始めようとしたところで、才人に声を掛けてく

る人間がいた。

「やあ才人、今日は非番じゃなかったのかい？」

もつとも、普通なら基地内で制服を着た左官である才人に気軽に声を掛ける人間などいない。そんなことをする人間は限られていた。

「ああ、セルゲイか。午前中の座学が終わったところか？」

才人が振り向くと、そこには黒の制服を着た青年士官が立っていた。その制服は義勇軍のものでも、またどの王軍所属部隊の物でもなかった。帽子のエンブレムに描かれた双頭鷲の紋章と、袖の青色の鉤十字は未だハルケギニアでも珍しい、ロマノフ公国海軍の物だった。

ロマノフ公国大使館付武官にして、パイロット研修生のセルゲイ・ヒロセ中尉だった。

「そうだよ、これから昼食をとりに行こうとしてたんだけど、君こそ今日は非番じゃなかったのかい？それに、そっちの人たちは？」

「ああ、紹介するよ。王軍の竜騎士隊のルネ中尉だよ。ああルネ、この人は最近トリステインと国交を結んだロマノフ公国から派遣されてきたセルゲイ中尉。」

才人に紹介されて、ルネがセルゲイに敬礼した。

「初めまして、ルネ・フォンク、トリステイン王国竜騎士隊中尉です。」

「こちらこそ、ロマノフ公国海軍大使館付き武官のセルゲイ・ヒロセです。」

セルゲイもルネに答礼した。

「へえ、竜騎士隊か、王軍の中でもそれなりのエリート部隊って聞いたけど、その人がなんで義勇軍基地に？確かメイジの軍人は義勇軍を嫌ってるって聞いたけど。」

すると、ルネは笑った。

「よく知っているね。確かにその通りだけど、全員が全員そういうわけじゃないよ。王軍のメイジの中にだって、新しい戦法や義勇軍と協力しようって考えている人はそれなりにいるんだ。けど、上層部は未だに石頭が多くてね、だからこういう風に、半ばお忍びで来るしかないんだ。」

釣られる形で、セルゲイも笑った。

「なるほど、頭の固い人たちは僕たちの軍隊にもいるからね。けど、それで非番の才人が急遽対応しているってわけか。で、一体何を話していたのさ？あ、軍機密に触ることなら言わなくても良いよ。」

「いや、別に軍機密ってことはないさ。お互いの意見交換をして、今後の戦いに役立てようとしているだけさ。」

「へえ。それじゃあ、後学のために、僕も参加させてもらって良いかな？」

「良いけど、飯はどうするんだよ？」

才人のその言葉を、セルゲイは笑い飛ばした。

「一食ぐらい抜いたって死にはしないさ。それにどうせ午後の飛行訓練になれば、絶対に吐いちゃうからね。」

その言葉に、その場の全員が笑った。

## 交流 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

文中に出てくる狙撃部隊は、ジョン・ドー先生の本作の2次創作に登場する部隊です。あちらの作品は、自分の作品にない味と、良いところを補完していただいているので、作者としては大いに好きです。

## 交流 下

調度空いていた格納庫の一角で、才人、カルロの義勇軍隊員とルネら竜騎士隊員、さらに飛び入り参加のロマノフ公国軍人のセルゲイも交えての勉強会が始まった。

もちろん、話題の中心はお互いが使っている武器についてだ。正確には才人らは飛行機、ルネらは自分たちが今乗っている竜についてだ。

義勇軍の飛行隊と、王軍の竜騎士隊とはこれまでに何度も模擬空戦を行っている。しかしながら、その結果は竜騎士隊の全敗に終わっている。

もっとも、それは当然といえば当然であった。竜騎士隊の乗る竜は火竜の場合だと最高速度がどんなにがんばっても150 km程度しか出ない。またそのブレスの射程範囲も20〜30 m程度であった。

風竜の場合だと、速度は500 km以上と飛行機と同等だが、ブレスは吐けないし、攻撃方法は乗り手の魔法のみとなる。だから乗り手が『スクウェア』クラスのメイジなら良いが、それより格下だとやはり厳しい。

魔法の場合も射程距離は機関銃に比べれば短い。また『風』系統で射程が長い物を使っても、直線的な攻撃しか出来ないために、飛行機が急旋回や急降下、急上昇といった竜とは次元的に違う動きをされてはお手上げだった。なにせ空戦性能が低い機体、つまりは爆撃機や雷撃機にさえ勝ったことがない。その場合は大概後部機銃の



曳光弾に驚いて怯んだ所を、逆襲されていた。

その他に大きく劣る点としては、通信手段の皆無だった。無線機が全機に装備されている義勇軍とは対照的に、竜騎士隊の隊内連絡は手話などのジェスチャーや、『風』魔法によるものしかない。もちろん、空戦に入ればそんな悠著なこととしていられない。だから、隊員同士が協力し合つての戦闘など論外であつた。

しかしながら、王軍の各部隊（竜騎士隊やマンティコア隊など）はプライドから敗北を認めようとはしない。当然、ともに問題を解決する姿勢など見られず、それどころか訓練を増やし、あまつさえ部下に無理強いしたりする上官もいるから性質が悪い。

そんな軍の体質に失望し、ルネたちが独自に対策を講じようとするわけだ。

「とにかく、どうしたら僕たちは義勇軍の飛行機との模擬戦で勝てるようになるのか、今はそれが一番の課題だね。」

ルネの言葉に、他の隊員たちが頷いた。

「けど、勝てるようにするって言っても難しいと思うぜ。」

ルネたちの意気込みとは正反対に、才人は渋い表情で言った。

「何度か空戦をした俺から言わせれば、竜はスピードも遅いし、機動性も悪い。攻撃力もそこまで高くない、つまり飛行機に勝てる要素がないんだよな。」

すると、ルネの部下たちが今度は一斉に不機嫌な表情をした。も

つとも、実際に怒りはしない。実際はそれが事実ということをしつかりと弁えているからだ。ただし、こうもあっさり指摘されたのが癪だったのだ。

「やっぱりそうか・・・実際にスピードが遅いのと機動性が劣っているのは、僕たちも感じていることだからね。けど、それはどうしようもないことだな。いくら訓練しても、竜たちのスピードや動きが劇的に変わることなんかないし。」

ルネがうめく様に言った。彼の言ったことは正しい。だいたい羽ばたきで飛ぶ竜の飛行性能に限界が出るのは、自明の理であった。飛行機のようにエンジンを換装してスピードを上げることなど、絶対に出来ないことなのだ。

「それにさつきも言ったけど、攻撃力の問題もあるぜ。火竜のブレスにしろ、乗り手の魔法にしろ、射程距離が短いじゃないか。」

才人はさらに欠点を指摘した。

「それもあつたね。君たちの使う銃は50メートル以上離れていても正確に撃ってくるからね。ブレスも魔法もとてもじゃないけど間に合わないよ。」

さらに、カル口兵長が付け加えた。

「そう言えば、自分が模擬空戦した時は上昇して高度を上げたら、追いかけてきた竜がまるで息切れするように落ちていったことがあります。別に急上昇したわけではなかったのですが。」

「それは多分、竜が乗り手が酸素不足になって追跡できなくなった

んだろ。うな。あ、そうか。竜騎士には電熱服も酸素ボンベも無いんだよな。」

この世界における空中戦が行われる高度は低い。せいぜい2000～3000mだ。(アルビオン上空では地上面から2000～3000m付近) 飛行艦船が飛ぶ高度も概ねその程度だ。それ以上高い高度は酸素も薄く、気温も下がるので、はっきり言ってハルケギニア人からしてみれば到達できない高度だ。

しかしごく一部を除いて最大上昇限度が10000m以上、最大出力発揮可能が4000mから6000mであるのが、義勇軍の使用している飛行機だ。はっきり言って次元が違う。

だから、戦闘せず、追跡してくる竜騎士隊を上昇して撒く事だってお茶の子さいさいで出来てしまう。もはや戦闘の必要性さえない。「けど、こうなると絶対に竜で飛行機に勝つことなんて不可能だと思っぜ。」

その才人の言葉に、隣にいたカルロも頷いた。逆にルネたちは深刻そうな表情になってしまう。

才人は正面切って竜騎士隊を役立たずとは言わないものの、飛行機の前では車に対する馬同様、時代遅れの産物に過ぎない物と考えていた。実際この考えは義勇軍の士官らの多くが認識しているものだった。

先ほども書いたとおり、速度、機動性、あらゆる点で竜は飛行機に劣っている。しかも、竜騎士の養成は馬以上に難しいもので、これはその他の幻獣にも当てはまっている。その点でも、訓練さえす

れば平民でも飛ばすことが可能な飛行機より劣ってしまう。

だから、今後もしハルケギニアで飛行機が爆発的に普及し、さらにはジェット機が登場することになれば、大量輸送可能な飛行艦船ならともかく、竜騎士や幻獣の部隊は衰退する可能性が高い。

ちなみに、実際この数年後には竜騎士隊は事実上戦闘部隊から外されることとなるのだが、もちろんそんなことを神ではない彼らが知る由もなかった。

ルネら竜騎士隊の面々が才人の言葉に落胆する中、それまで議論を聞いていたセルゲイが初めて口を開いた。

「けどさ、竜にもそれなりに飛行機にはない長所はあるんじゃないかな？」

「え！？セルゲイは何か思い当たることがあるのか？」

「いやさ、実は以前竜騎士隊を視察した時のことを思い出したんだけどさ、竜って飛ぶのに確か飛行機みたいに滑走路が必要なかったじゃん。それに空中にも静止していたみたいだし。あれを生かすことは出来ないかな？」

才人はなるほどと思った。

「つまり、ヘリコプターみたいなもんか・・・確かに飛行機には無い長所だな。それに空中戦の最中にいきなり停止したら飛行機を翻弄できるだろうな。」

「それ本当かい？」

ルネが目を輝かせて聞いてきた。

「ああ、飛行機は確かに竜より早く飛べるよ、けど上空で急停止することは出来ない。もし竜が小刻みに止まったり、動いたりすれば翻弄できると思うぜ。」

ルネらにとって、それは目から鱗が落ちるような気分だった。竜を動かすのは、容易ではない。しかし、訓練さえすればそうした動きは出来なくもない。これまで動きながらのことばかり考えていた彼らにとって、止まることで相手を翻弄するという単純なことは頭に全く思い浮かばないことだった。

もつとも、実際にはこれも万能ではない。相手が少し距離を離して狙撃するように撃つたり、2対1のロッテ戦法をとれば意図も容易く打ち破れる。

だが、この時はそれに気づく者はまだいなかった。また例え才人やカルロが気づいても、彼らのへの気遣いから、言ったかどうかは微妙なところだ。

さらに、セルゲイはこんな意見も出した。

「あと、竜の羽音は飛行機のエンジン音よりは小さいよね？だから隠密偵察なんかも向いていると思うよ。銃火器評価班を視察したとき、指揮官の友澤中尉が部下の『使い魔』である鷹を見て、無人飛行機よりも役に立つとか言っていたし。」

その言葉に、才人は大いに驚いた。

「おお！セルゲイ、お前良いところに気がつくな。やっぱりお前がいて正解だったぜ。広い視点で物が見れる。」

しかし、才人は内心彼に未恐ろしい物を感じていた。

（こいつ頭が良く切れるな・・・もしかして将来はすごい人間になるかも・・・）

実際この予感当たることになる。

しかし、とうの本人は笑顔を絶やさず、カルロや竜騎士たちと議論を続けていた。

最終的にこの日の議論はお互いに有意義な物となり、そしてルネらにとつてはこれが後に自分たちの命を救うこととなる。

ちなみに、この勉強会は2時間ほど続き、当然セルゲイは午後の飛行訓練に遅れて練習機部隊司令官のグルー中佐に大目玉を喰らうこととなり、後日才人やルネらによって話の肴にされることとなる。

そして20年後、彼らが顔を合わせたとき、それらは懐かしい青春の回顧話として語られることとなる。

## 交流 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 新型戦闘機 上

才人がルネやセルゲイらと勉強会を行ってから3週間後、1ヶ月に1回の新月の日（ちなみに新月に近い月の状態でも移動は可能であるから、だいたい3〜4日、粘れば5日程度は行き来できる。）を利用して、その日も地球から貨物や人員を満載した輸送機がミライヤラ・ロシエールの飛行場に到着した。

闇に紛れるような形で飛んでくるそれら輸送機には、ハルケギニアという名の新天地を求めてきた人間や、『東方義勇軍』を支える上で重要な自衛隊から手に入れた中古武器（84mm無反動砲や64式81mm迫撃砲、60式106mm無反動砲など）、ハルケギニアでは売れ筋商品である衣料品、食料品等の民生品、さらに各種情報が詰まった書籍類などが積まれていた。

輸送機が着陸して停止すると、直ちに積まれてきた貨物や乗客が下ろされる。この時期、輸送に使用されているのは桜花飛行機で製造されているOY1型輸送機であった。この機体は米軍のC47軍用輸送機を参考に開発されたもので、その物資搭載能力は貨物なら最大5t、旅客なら24名である。

OY1型輸送機5機で編成された輸送隊が一回に運びこめる荷物の量は平均16t。それを1日に2回行い、さらに4日間連続毎晩行うのだ。ただし、天候その他の理由で絶対にこの数字になるわけではない。

危険な夜間飛行で、しかも機体を酷使しているのだから大丈夫かと思えなくも無いが、実際のところ大丈夫だった。なにせ、飛行時間は1時間にも満たないし、それに飛行機自体に固定化の魔法が掛



けられているので、機体やエンジンの耐久力も上がっているからだ。

またパイロットも、元航空自衛隊パイロットである義勇軍トリステイン方面軍司令官にして、才人の父親である平賀才助中將のおかげで、夜間飛行の経験を持つ元自衛隊のベテランパイロットたちが多数集まっていた。

彼らの多くは既に現役を退役しているか、もしくはなんらかの理由で退役せざるを得なかった者ばかりだ。そんな訳ありの人々が、色々と言ひ交わす物資や人を運んでいるのだから、ある意味奇妙な繋がりがあると言える。

さて、地球からの荷物が全て下ろされると、今度はハルケギニアから地球へ持つていく貨物が詰まれる。その多くは金や銀と言ったレアメタルで、地球に持ち込めば高値で取引される物だ。これらによって得た資金によって、地球側における義勇軍の活動が支えられているわけだ。

こうした作業は当初は作業員が慣れておらず、大分時間を食っていたが、既に何回も行われていることなので、作業員も習熟し、手際よく貨物を載せられるようになった。

また、地球へ向かう人間も乗り込む。もちろん、その多くは用があつて乗り込むわけだが、中には地球への観光のために乗り込む者もいる。地球出身者がこちらで作った友人とか、また地球の存在を知っている数少ないハルケギニア人だ。

こうした人々も、申請して審査をパスすれば地球行きの便へと乗れる。ただし、二度と戻れない場合の責任は自分で負うという誓約書にサインする必要があるが。

そしてこの日、ラ・ロシエールの飛行場から地球行きの輸送機に乗り込んだのは、平賀才人義勇軍中佐と、菅野直義勇軍中佐だった。2人の場合は何度も地球との行き来を行っているのです、すんなりと乗り込むことが出来た。

今回2人が乗り込んだ理由は、観光でもなければ以前のように東京で何らかの工作を行うためでもない。今2人が配属されている戦闘機隊に関わる仕事であった。それは新型戦闘機の空輸と領収である。

義勇軍が地球の北海道にある桜花飛行機に飛行機を発注し、さらには新型戦闘機の設計も委託しているのは前にも書いたが、今回ついにその戦闘機の初号機と2号機が完成したという連絡が入った。完成したのは、性能はそこまで高くは無いが、値段も安価で大量生産向きの軽戦闘機の方だ。

ガリア軍に多数の枢軸空軍機が確認された現在、大量に揃えられる戦闘機を義勇軍は欲していた。ただし、その戦闘機の性能が低性能では何の役にも立たない。そこで、歴戦のパイロットである才人と菅野の2人が性能確認を兼ねて領収することと成った。

2人は命令を受けると、ラ・ロシエールへと向かった。しかし出発前から、菅野はどこか釈然としないような、不機嫌な表情をしていた。才人にはその理由が良くわかっていた。

「やっぱり気が進みませんか？」

輸送機に乗り込んで席につくと、才人は隣の席に座った菅野に尋ねた。

「ああ、いくら未来の日本で造られたとは言え、参考にした機体があのピア樽じゃねえ。」

菅野は苦虫を潰したような表情をして言った。

「けど、佐々木少佐の話じゃ「バッファロー」そのままじゃないそうですし。それに、「バッファロー」はフィンランドじゃ空の真珠って呼ばれたくらいですから、そこまで悪い機体でもないでしょ。」

と才人は言うものの、彼自身実際は心配だった。なにせF2A「バッファロー」という戦闘機は、設計も古く、機体も先ほど菅野が言った通りまるでピア樽のようなデブプリした機体なのだ。当然性能も良くなく、太平洋戦争時にはイギリスやオランダ軍に配備されていた機体が日本のゼロ戦や「隼」と戦ったが、全く歯が立たなかった。10対1でも勝てなかったという話まである。

これだけならただの駄作機なのであるが、幸いにもフィンランドに売却された44機はフィンランド空軍のベテランパイロットに助けられ、性能は優秀だがパイロットの質が悪いソ連軍を圧倒した。フィンランドでは自国で量産まで考えたほどだ。もっとも、それは例外中の例外で、実際の性能値が高くなかったのは事実である。

日本軍はその事を実戦と、捕獲した機体の検分でよく分かっていた。だから、元帝国海軍大尉の菅野にとって、「バッファロー」など鴨以外の何物でもなかった。

「頼むから、ちゃんとした戦闘機であってくれよ。」

菅野が出発前に祈るように呟いた。才人は口にこそ出さなかった

が、その言葉に心底頷いた。

それから間もなくして、2人を乗せた輸送機はラ・ロシエールを出発し、新月を使って地球へ転移し、短時間の飛行で北海道にある、桜花飛行機の工場に隣接する飛行場に着陸した。

輸送機が着陸して停止し、2人が機から降りると早速出迎えの人間が2人の前に現れた。スーツをキツチリと着込んだ、40代前後の男だった。

「菅野中佐に平賀中佐ですね、お待ちしていました。桜花飛行機社長の太田です。」

なんと社長自ら2人を出迎えに来た。予想外の事態に少しばかり戸惑いながらも、菅野と才人は急いで頭を下げ、挨拶した。

「菅野直です。今回はよろしく願います。」

「平賀才人です、同じくよろしく願います。」

「今回は我が社の新型戦闘機の領収と性能確認のために、わざわざ来ていただくこととなりました。我々としては十分な性能を持っていると自負していますが、やはり現場の人に直接確かめて貰った方が良いでしょう。それでは、宿舎の方へと案内いたします。」

2人は太田に案内されて、飛行場脇にある従業員用宿舎の空き部屋へと案内された。

「こちらです。明朝8時にお迎えに上がりますので、それまでごゆっくりおくつろぎ下さい。」

「ありがとうございます。」

2人が礼を言うと、太田社長は行ってしまった。そこでようやく才人と菅野は肩の力を抜いて、口を開いた。

「社長自ら出向いてくるなんて、本当にビックリですよ。」

「よっぽど自信があるのか、それとも機体の性能に不安があつておべっかを使っているのか、わからんな・・・とにかく、機体を見せてもらふまではなんとも言えんな。」

菅野のその言葉に、才人は頷いた。

開けて朝、時間通りに桜花飛行機の社員が2人を迎えに来た。既に起きていた2人は、彼についてまず、桜花飛行機の社屋へと移動して朝食を摂った。

久しぶりに食べる日本食の味を楽しみながらも、2人の頭の中は新型機で一杯だった。そして食べ終わり、食後のお茶を啜っていた所に、つなぎを着た若い女性が歩み寄ってきた。

「義勇軍から派遣された菅野直さんと平賀才人さんですね？社長からお2人を格納庫まで案内するよう言われて来ました。」

「ああ、御苦労様です。なら才人君、行くとするか。」

「はい。」

2人は立ち上がると、その女性について歩き始めた。

歩きながら、菅野が前に行く女性に尋ねた。

「そういえば、あなたの名前を窺っていませんでしたね？」

「そうでしたね。私は中島栄子。この桜花飛行機エンジンの技師です。」

その言葉に、菅野は非常に驚いた。

「なに！？あなたのような若い女性が技師だって！？」

「若くて女性だからって舐めないでくださいね。一応こつ見えても大学の航空工学科を卒業しているんですから。実を言うと、今回の新型戦闘機の設計も一部を私が設計しています。」

「はあ・・・時代は変わったもんだな。」

まだ女性の地位が低かった時代の出身である菅野にとって、女性の設計技師が存在するということは驚天動地のことだった。このあたりはジェネレーションギャップである。

「それで。設計者のあなた自身は、今回の機体をどう思っていますか？」

「それについては、あなた方自身で判断して下さい。ただし、強いと言うなら自信はあるとだけ言っておきます。さあ、着きましたよ。」

扉が閉まっている格納庫の1つに3人は到着した。その人員出入り用扉から、3人は中へと入った。

格納庫の中は既に明かりが灯され、そのライトに浮かび上がる形で1機の真新しい戦闘機が置かれていた。レシプロ、単発の機体である。

「おお！」

「へえ！！！」

その機体を見るなり、菅野と才人の2人は感嘆の声を上げた。

## 新型戦闘機 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 新型戦闘機 中（前書き）

前回投稿した話はやはりちょっと無理があったので、大幅に訂正して再投稿しました。

## 新型戦闘機 中

格納庫内に置かれている機体をみて、才人と菅野中佐はそれなりに驚いた。確かにそこに置かれていたのはF2A「バッファロー」と思われる機体であった。しかし、2人が知っているオリジナルのそれとは少しばかり違っていた。

まず風防が半分ほどの大きさになっており、その分尾翼から続く胴体部分が延長されている。風防自体も支柱が減らされており、機首にあつた無線柱も撤去されているため、全体的にすっきりとした印象となっている。また主翼や尾翼も形が若干ではあるが変えられていた。

外形的な改正点はそれ位であるが、それでも彼らの知っているそれよりも洗練されているように思われた。

「どうですか？」

恐る恐るという感じで、中島技師が2人に尋ねる。

「全体的にはあまり変わっていないのに、少しばかり改良しただけでそれなりに印象は変わるものですね。以前本物を見たときは、本当に不恰好で頼りないと思ったけど、こいつには何か期待できそうな気がしますよ。」

菅野が目を輝かせて言う。

「ですかね。ベテランの菅野さんが言うならそうなんでしょうね。俺としても写真で見たオリジナルよりは強そう気がします。」

菅野と才人の評価に、一端中島は安堵の息をつく。しかし、才人が続けて言った。

「けど、性能的にはどうなんですかね？見てくれが多少良くなっても、性能的に向上してなければ、新型機としての意味がありませんし。」

この言葉は実際の所切実なものである。先日までなら、相手は竜やグリフォン、風石で飛行する船だけであつたので、オリジナルの「バッファロー」の性能でも充分に役に立った。

ところが、有力な枢軸軍の航空部隊が敵になる可能性が高くなつた現在、その性能はドイツのメッサーシュミット戦闘機のE型を越えるのが最低条件と成る。そうすると、元の「バッファロー」の性能では当然及ばない。

「その通り。何せ元の「バッファロー」と言つたら空の棺桶と呼ばれたような機体だからな。グリフォンや翼竜相手ならあれでも良いが、今度の相手は独伊仏の第一線機と、おそらく実戦経験のあるパイロットだ。そうなると例え凡用機でも、最低限の性能は必要だ。それについてはどうです？」

菅野が意見を述べる。すると、中島技師が説明を始めた。

「それでしたら大丈夫です。エンジンは原型と同じ大きさですが、出力が3割り増しになっていますし、重量も新素材を使つたおかげでオリジナルより200kg近く軽くなっています。計算上では最高速度はオリジナルより30km近く速くなっている筈です。あ、詳しいスペックはファイルにあるので、ちょっと待っていて下さい。

取ってきます。」

彼女はファイルをとりに行くために、その場を一端離れた。

「それにしても、あのビア樽も少しいじるだけでそれなりに印象変わるもんだな。」

菅野が何かを思い出したのか、しみじみと言う。

「菅野中佐は「バッファロー」と実戦で戦ったことがあるんですか？」

「戦ったというよりも、乗ったことがあるんだ。横須賀の追浜飛行場でね。」

その言葉に、才人は以前本で読んだことを思い出した。

「ああ、そう言えば南方で「バッファロー」はたくさん日本軍に捕獲されていたんでしたよね？」

「その通りだ。そいつの内の一機に乗ったんだよ。しかし見るからに不恰好でね、速度も中途半端だし旋回性能も良くはなかった。ただ、操縦性能が素直だったことを覚えているし、着陸後のオイル漏れが全くなかったのも印象的だったよ。向こうの整備兵達はエンジンからのオイル漏れに悩まされていたからね。」

第二次大戦当時の日本軍機は、性能が良くても生産性や整備性に難がある機体が多かった。エンジンや機体を作るための基礎工業力が大きく欠落していたからだ。

「確か曾爺ちゃんも当時の日本機のエンジンはオイル漏れが酷かったって言ってましたよ。そういえば、佐々木少尉のゼロ戦も最初使っていた頃はオイル漏れしていることがよくあったような。」

「資料室の本を読んで、当時の日本の技術力の低さには呆れたよ。あんな飛行機で俺たちは戦っていたのかとつくづく思った。本当に、どうしてあんな戦争したもんかな？回避出来ていれば、杉田や関も死なずに済んだのに・・・おっと、ごめん。しけた話に成っちゃったな。」

「いいえ、あの戦争を実際に体験した人の感想を聞けたんですから、むしろ貴重なことですよ。」

と、そこへようやくファイルを抱えた中島技師が戻ってきた。

「持って来ました。どうぞ。」

中島技師からファイルを受け取った菅野は、才人にも見えるように開いた。

#### 試製OS2型戦闘機

全長 8.2 m      全幅 1.1 m      自重 2100 kg

速度 550 km      航続力 1700 km

武装 12.7 mm 機銃 4 基

爆装主翼下にロケット弾 4 発又は 60 kg 爆弾 × 4。胴体下に 2

50 kg 爆弾 1 発。

エンジン  
発動機 ライト R1820-40 改      空冷 1600 馬力

小型機上レーダー装備。防弾板、防弾燃料タンク装備。自動空戦フラップ装備。

「ほお、自動空戦フラップが装備されているのか。そうなると空戦性能は多少改善されていそうだな。しかし、「バッファロー」の主翼に積める物なのですか？」

菅野が中島に問うた。ちなみに、自動空戦フラップはGの作用を利用して自動的にフラップの出し入れを可能にした装置だ。以前菅野が乗っていた「紫電改」はこの装置を積んでいたおかげで、すばらしい旋回性能を発揮できた。

「はい。主翼内部の設計は手が加えられてオリジナルとは違いますから。だから自動空戦フラップだけじゃなくて、20mm機銃だって搭載できますよ。」

現在義勇軍では航空機に搭載する機銃を、地上部隊で使っている12.7mm機銃と同じ機銃を使って弾薬の共通化を図っている。しかしながら、それ以上の大口径機関銃も必要になる可能性があるので、一部の機体は20mm機銃や30mm機銃の機体への搭載を考慮するよう、桜花飛行機に要請していた。

「そうか。それなら充分でしょう。後は飛行性能ですね。そればかりは実際に飛んでみないとわからんから。」

渡されたスペックを見る限りでは、この機体がそここの機体であることがわかる。オリジナルより最高速度では40km近く増しており、爆弾の搭載量や航続距離も伸びている。しかし、これはあ

くまで紙上の値に過ぎないので、実際の性能を確かめるには飛ばすのが一番である。

「全力飛行試験については、いつもどおりハルケギニアへ移送してからとなります。こちらで行なえるのは、仮飛行試験のみです。」

桜花飛行機の工場が北海道にあるとはいえ、やはり日本で試験飛行をする目立ってしまう。だから、桜花飛行機でロールアウトした機体は、飛行に支障がないかを確認する短時間の仮飛行試験のみを桜花飛行機の飛行場で行うのが慣例となっている。

「わかりました。早速飛行試験を行いたいんですが、よろしいでしょうか？」

「はい、そのつもりでこちらも用意していましたので。既に試験飛行のための燃料は入れてありますし、機体の整備もバッチリです。」

「じゃあ、やりましょう。」

「了解です。」

1時間後、飛行服に着替えた菅野と才人の手によって、太田社長や中島技師を含む設計チームが見る前で、試験飛行が始まった。

格納庫の外に引き出された機体は、まだ試製戦闘機であるが、既に『東方義勇軍』航空部隊共通の濃緑に機体全体が塗装され、主翼と胴体の国籍マークも白百合のトリステイン王国の物が描かれている。

た。

試験飛行の内容は方向舵や昇降舵、さらに主脚と言った部分の動作がスムーズに行われるか、離着陸時における飛行特性に欠落がないかなどを調べる。先ほども書いたようにあくまで仮試験なので、全速力試験や急降下試験、完全武装状態での試験は行わないし、時間にしても1時間程度だ。

まずベテランの菅野中佐が1番機に乗り込んで試験を行った。彼の乗った機体は、規則正しく回るエンジンの音をバックに、危なげなく大空へと舞い上がった。そして高度1000m程度で旋回や直線飛行、上昇、下降と言った簡単な動作を行うと予定通り1時間もしない内に滑走路へ着陸した。

早速技師らが機体へ駆け寄ると、コックピットから出た菅野が言った。

「悪くないですね。操縦性も素直だし、旋回性能もかなり向上している。使い方を間違えなければメッサーともやれるかもしれません。まあ、全力での試験じゃないからそれ以上何とも言えませんが。」

その言葉に、技師らは喜ぶとともに強い期待感を持った表情をした。

次に才人による2番機のテストである。彼の機体も特に異常はなく空へと飛び上がった。そして高度1000mまで上昇して、各種動作の確認を行った。

「エンジン異常なし、機体異常なし。速力250km。ようし、右旋回。」



フットバーを軽く蹴り、操縦桿を右に倒す。そうすると、機体は直ぐに旋回を始めた。

「ゼロ戦ほど過敏じゃないけど、それでも大分良いな。ようし、今度は左旋回！」

先ほどとは逆の操作を行い、機体を左へと旋回させた。

「よし！OKだ。うん、菅野さんが言った通りだ。操縦性は大分素直だな。これなら素人のパイロットでも飛ばしやすいだろうな。」

素直な操縦性能や、安定性の良さから才人はそう判断した。

彼の操縦する新型戦闘機はその後30分ほど滞空して各種異常がないかチェックしたが、そのようなものはなく、無事に飛行場へと戻った。

こうして仮飛行試験をパスした2機は、早速この日の夜、ハルケギニアに移送して全力飛行試験に挑むこととなった。

## 新型戦闘機 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者テスト（今週金曜日から）、レポート（現在2つ）により、投稿間隔が大幅に伸びております。ご迷惑をおかけします。

新型戦闘機 下（前書き）

なんとか更新できました。

## 新型戦闘機 下

夜、桜花飛行機の飛行場にはライトの明かりが煌々と煌き、その光によって滑走路が照らされる。その中を、静寂を破るかのようにエンジン音を轟かせながら、レシプロエンジンの飛行機が次々と飛び立っていく。昼の間に保守点検と補給を済ませ、ハルケギニアに運ぶ物資や人員を胴体内一杯に積んだOY1型輸送機だ。

彼らは飛び上がると、新月の月へ向かって上昇していった。新月の場合、地上から見ても月はよく見えないが、実際のところは目を凝らせば視認することが出来る。だから輸送機を操縦しているのは副操縦士こそ若手だが、主操縦士は元自衛隊パイロットや民間航空会社で働いていたベテランばかりなので、まず間違うことは有り得ない。

彼らが無事離陸するのが認められると、いよいよハルケギニアに空輸する桜花飛行機製航空機の番である。今回空輸されるのは、「零戦改」6機と「赤とんぼ」4機だ。そしてその後に、菅野と才人が乗り込んだ試作戦闘機が続く。

ちなみに空輸する機体は一部を除けば、全てハルケギニアからやつてくる『東方義勇軍』の隊員によって行われる規定となっている。今回才人と菅野は昼間に試験飛行をしていたが、通常の場合やつてきたパイロットは付き添いの元で、近くのコンビニやスーパー等へ行ってハルケギニアへのお土産を買っていくか、提供された宿舎で休憩するのが普通だった。

『東方義勇軍』パイロットにとって、地球行きは楽しみの一つとされている。何せ地球に行けばハルケギニアにはない物品が大量に売

っているからだ。タバコ、酒（この場合チューハイ等）、また日本語の分かる人間ならマンガなどの書籍も人気アイテムだ。中には同僚への販売目的で買い込む人間もいた。そしてこのような形で持ち込まれた物品も、それなりにハルケギニアの文化に影響を与えることとなるのだが、それはまた別の話だ。

こうした背景があるので、地球へのルートはいつ閉じるか分からないにも関わらず、搭乗員たちの、空輸のための地球行きの人気は高かった。

さて、そんな地球を少しばかり楽しんだパイロットたちが空輸する機体を見送った所で、ようやく管制塔から才人らにも離陸許可が降りた。

「それじゃあ平賀中佐、行くぞ！」

先に発進する菅野が才人に伝える。もちろん、才人の返事は決まっている。

「了解！！」

2人は地球の大地に別れを告げて漆黒の空へと飛び上がる。彼らにとって第二の故郷とも言うべきハルケギニア目指して。

2人の乗った新型戦闘機は特にトラブルもなく、発進から30分後には地球からハルケギニアへの転移を終えて、無事ラ・ロシェールにある義勇軍飛行場へと着陸していた。

ラ・ロシエール飛行場は当初こそアルビオンへ向かう機体の補給基地と不時着場を兼ねた小規模飛行場に過ぎなかったが、現在は地球からの空輸ルートが変更されたため、さらには「にぎつ丸」と、現在ロマノフ公国で改装中の空母「プリシンガメーン」搭載艦載飛行隊の展開に備えて拡張され、30機近い航空機が同時に展開できるだけの能力を備えるに至った。

もちろん、この拡張はラ・ロシエール周辺を支配する領主の許可を得て行われたものだ。現在この地を支配しているのは老練なランファイア伯爵であるが、彼は喜んで飛行場拡張を許可してくれた。

これはトリステインの貴族としてはかなり珍しいことではあるが、この時期『東方義勇軍』ぐるみで行われていたトロ（ロマノフ）間貿易が上手く行き、ラ・ロシエールが大きく潤っているのが要因だった。つまりは義勇軍に恩を売って、さらなる貿易の拡大をランファイアは望んだらしい。これまでラ・ロシエールは対アルビオン貿易で栄えていたが、現在はそれにロマノフ公国や外洋諸島・アイスランドからの交易も加わり、さらなる発展を見せていた。

ランファイア伯爵はそこまで革新的な考えを持ち合わせているわけではなかったが、貿易に関する利益には目ざとい人間であった。それが義勇軍には吉と出ていた。

さて、そんな感じで拡張されたラ・ロシエール基地はミライやアルビオンのホープ基地に次ぐ基地へと発展しており、当然そこで働く人員の数も急激に増加していた。だから、才人らが持ってきた新型戦闘機が着陸すると、夜間にも関わらずすぐにその姿を一目見ようと人だかりが出来た。

もつとも、菅野と才人はそんな連中に構っている余裕はなかった。新型戦闘機のテストはより設備の整ったミライ飛行場で行う必要があった。また今回はテストに桜花飛行機の技師も付き添うから、義勇軍としては1分1秒でも早く試験を行いたかった。そのため2機は急いで燃料を補給し、整備を終えて飛び立つ必要があった。

野次馬を退け、横につけた燃料補給車から急ぎタンクに燃料を入れ、さらに簡単な整備を終えると、菅野と才人はさつさとラ・ロシエール飛行場を後にして、ミライ基地へと飛び立っていった。

ちなみにここからは本当の夜間飛行であつたが、装備されている小型レーダーやその他の計器、さらにミライ基地からの誘導電波によつて、2機は楽とは言わないまでも、苦勞せずミライへと到達した。

ミライへ到着すると、才助たちトリステイン方面軍の幹部たちが2人を出迎えた。

「空輸御苦勞だつた菅野中佐、平賀中佐。時間がないので、午前中には全力飛行試験を始めるが、2人とも体調は大丈夫か？もし無理なら代わりのパイロットを手配するが？」

才人の父であり、トリステイン方面軍司令官である才助が2人に尋ねる。

「大丈夫です。これから少し仮眠出来ますから。」

「俺も大丈夫。」

2人は疲れた様子も見せず、そう答えた。

「ようし、じゃあ悪いが2人ともしつかり頼むぞ。今回のテスト如何で今後の航空機整備に大きな影響が出るからな。」

「了解！」

それから2人は、宿舎にある自分の部屋で数時間ほど仮眠し、いよいよ新型戦闘機の全力試験に挑んだ。今回の試験のために飛行場は事実上閉鎖され、本来ここを使っているその他の部隊は、ラ・ロシエールやタルプの飛行場を間借りして任務を遂行している。

滑走路の脇には才助をはじめとする義勇軍幹部や桜花飛行機の技師らが並び、特設のテントには無線機が置かれて常時連絡が取れる体制が整えられていた。また、緊急事態に備えて応急対策班も、いつでも出動可能な体制に入っていた。

そんな少しばかりピリピリした空気もお構いなく、滑走路に移動した菅野の乗る1号機は快調なエンジンを轟かせて、滑走を開始した。一同が緊張して見守る中、機体は飛び上がった。

そして機体は性能測定の高高度へと上昇していった。ちなみに、義勇軍で機体の性能測定を行う条件は、機体の燃料3分の2、銃弾満載、高度4000mとなっている。

5分ほどして、菅野からの無線連絡が入った。

「現在高度4000m。機体、発動機共に異常なし。これより水平飛行での最高速度試験に移る。」

「了解。万が一機体に不具合が出た場合はただちに中止せよ。」



才助がマイクを握って指示を出す。

「了解。」

菅野からの通信が終わると、皆一斉に双眼鏡を上空に向けた。高度4000mを、小型機が1機、飛行機雲を引きながら直線飛行を行っているのが確認された。

「現在速度510km・・・515・・・520・・・」

菅野の読み上げる数値が、無線機を通して伝わる。

「545・・・550。設計値突破！もう少し行けそうだ・・・51・・・552・・・ここまでだな、最高速度552km！」

その言葉に、中島をはじめとする桜花飛行機の設計陣がどよめいた。

テストは続いた。

「これより自動空戦フラップの作動確認に移る。」

そう通信が入って再び一同が空中の機影を確認すると、それまで水平飛行をしていた機体が急旋回や、横転などといったアクロバチックな運動に入っているのが確認された。

「空戦フラップの作動は良好！異常なし！・・・こいつは良いぞ！「紫電改」程じゃないが中々だ！以前乗ったバッファローとは天地ほども違う！」

菅野の声は、心なしか驚きと喜びが交じり合っているように一同には感じられた。

「それでは次に急降下速度試験に移る！！」

菅野のセリフに、一同の緊張が高まる。ここからがある意味本番だった。急降下速度試験は、機体がどれだけの角度、スピードで降下しても大丈夫か調べるものだが、一歩間違えば地面に激突、機体の分解などの危険がある。まさに命がけだ。

それから間もなくして、飛行機が明らかに急降下する音が飛行場に聞こえてきた。桜花飛行機の技師たちは、ひたすら上手く行くよう祈っていた。

「現在速度650・・・670・・・690・・・710・・・730、振動が出てきたが、もう少しいけそうだ。750・・・770・・・790、ここが限界だ！引き起こす！！」

その通信とともに、飛行場の滑走路にぶつかるギリギリの高さを菅野の機体が上昇して行った。

「菅野中佐、大丈夫か？」

心配になった才助が言った。だが、そんな心配とは裏腹に、すぐに菅野の明るい返事が返ってきた。

「ええ、大丈夫です。もう少し高い高度からの降下ならもつと行けたかもしれませんが。取り合えず、800は行けそうです。」

「機体に異常は？」

「ありません。胴体や翼に皺も寄ってないし、発動機も正常です。これより着陸します。」

「了解！」

数分後、着陸した菅野の機体は一同の前まで滑走してきて、止まった。整備兵が車輪止めを噛ませると同時に、風防を開けて菅野が現れた。

「司令、こいつなら行けますよ。確かに「紫電改」程ではありませんが、この性能なら充分です！」

彼が開口一番言った言葉に、桜花飛行機の技師たちは肩を抱き合って喜び、また義勇軍の幹部たちは安堵の表情を浮かべた。

それから間もなくして、今度は才人ののる2号機の試験飛行が始されたが、こちらも特に問題は無く、試験飛行は滞りなく進んだ。

「菅野さんの言ったとおりだ、確かにゼロ戦や「紫電改」程じゃないけど、良い飛行機だ。」

試験飛行の最中、才人は誰に言うわけでもなく、そんなことを呟いていた。ちなみに、彼の機体が計測した値は、菅野のものより少しばかり良いものだった。

この日の試験飛行でこの機体の採用と、大量量産が決定した。そして後日、幹部会議でその正式名が桜花飛行機と、義勇軍飛行部隊に通達された。

「今試作戦闘機を、OS2型、44式1型艦上戦闘機「バッファロー」と採用・命名する。」

この機体はその後大量生産され、ハルケギニア戦役では現れなかった戦線が無いくらいに頻繁に使われ、標準戦闘機とまで言われることとなる。

またロマンノフ公国にも供与され、意外な活躍をすることにもなる。

## 新型戦闘機 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ラ・ロシエール会議 1

アルビオン解放戦争から10ヶ月が経ったこの時期、トリステイン王国とガリア王国の国境線沿いではガリア軍とトリステイン軍（厳密には国境線地域の領主が編成した諸侯軍）の間に小競り合いが頻発していた。しかも、その多くはトリステイン側にガリア軍が侵入したことで起きていた。

ガリア側の言い分では、トリステイン領から侵入した武装集団が、国境線付近の自国の村を襲撃しており、その追跡のために止む無く越境したに過ぎず、逆にトリステイン側の野盗に対する取締りの不備を糾弾してきた。

しかしながらトリステイン王政府直々の調査によれば、トリステイン側から賊が越境したという事実は確認されず、それどころか逆に侵入して来たガリア軍が国境線の村に攻撃を仕掛けているという報告がもたらされた。当然、今度はトリステイン側がガリアに対して抗議した。もっとも、ガリア側はこの抗議を無視し、逆にトリステインに謝罪と補償を改めて求めた。

そして1週間後には、ガリアが抗議すればトリステインが抗議し返すの繰り返しとなった。もっとも、トリステインで政治が分かる者が見れば、これがガリアの謀略であることは明白だった。ガリア軍側が一方的にトリステイン領内に侵入し、さらにえげつないことに、その部隊が自国内の村を襲っていたのだ。それをトリステイン側に責任転嫁していた。これが真相であった。そもそもトリステインにはガリアに喧嘩を吹っかける気など毛頭ない。

地球でなら当然これは国際法違反だ。しかしながら、そもそも国

際法の概念が充分に育っていないハルケギニアでは、ガリア側の行為を証拠付きで立証しても、裁く機関もなければ、罰する法も無い。例えそれらがあったとしても、今度はそれを伝えるための情報伝達機関が脆弱だった。だから各国の国民が情報を共有し、連携して加害国に経済封鎖などを行うことは、とてもではないが出来ない。せいぜい一部の政治家の違反国に対する信頼を少しばかり落す程度だ。

もつとも、トリステインでは既にラジオ放送が始まり、重要なニュースは村単位で伝わるようになっていた。そのためこのニュースも当然ガリアとの国境線地帯に住む住民の耳に入り、ガリアに対する警戒心を植えつけることに成功した。これは後に開戦の際には住民の早期避難に役立つこととなる。

一方、ハルケギニアにおける国際法の整備については、才吉ら『東方義勇軍』の工作が功を奏して、トリステイン・アルビオン・ゲルマニア・ロマリア・その他数ヶ国間で捕虜の取り扱いや戦利品に関する細かい取り決めを決めたロンディニウム条約が間もなく締結されることとなっていた。

もつとも、上記したように取り締まる機関がないので一種の紳士協定に過ぎないが、ロマリア教皇ヴィットーリオが賛意を示しているから、彼の権威を後ろ盾にしてある程度の効力は持つとは言える。

だがそれ以上に踏み込んだ条約、つまりは戦争その物に制限を課すものや、民間人の保護に関する条約の締結については不発に終わった。アルビオン・トリステイン政府は条約作りを了承したのだが、ガリアとゲルマニアが締結に難色を示したのが原因だった。

こうしたガリアの動きに対して、『東方義勇軍』はその情報機関である『トウ機関』から得た情報から、これらは開戦へ向けての下

準備と判断していた。

さて、これまでも何回か登場してきた『トウ機関』については、義勇軍内でも色々な噂が立っていた。何故噂になるかといえば、まず集めてくる情報の量がすごい。酒屋で交わされるような会話から、ガリアのジョゼフ王の肉声まで、それこそ本当に何でもありますという感じだった。

さらに、その『トウ機関』の機関長が一体どのような人物であるのか、義勇軍のほとんどの人間が知らなかった。噂だけは多々あり、「才吉がスカウトしてきた自衛隊の元スパイ」とか「呂501に乗っていた情報部員だ」など数え上げたら切が無い。賭けのネタになるくらいだ。

そもそも『トウ機関』とは、『東方義勇軍』の前身である『トリステイン空中義勇軍』時代にアルビオン・トリステイン両王政府の協力の下で出来たレコン・キスタに対する調査機関だった。その後、レコン・キスタが壊滅した後は両政府から義勇軍へ所轄が移管され、ハルケギニア中、特にガリアとロマリアを重点的に調べていた。

ちなみに、トウとは東という漢字の音読みと、才吉がかつて見たアニメの中に出てくる日本の諜報機関の名前から来ている。

さて、国境線でガリアとトリステインの小競り合いが起こり、いよいよ開戦が現実のものとなりつつあったこの日、ラ・ロシエールの港に現トリステイン代王であるルイズの姿があった。



つい1年前までは、ラ・ロシエールの海に面する港は沿岸漁業用の小規模な物であった。しかし、水上艦船の需要が増えた現在、港は大きく開発・拡張され1万tクラスの軍艦や貨物船が停泊できる棧橋が整備されていた。その港の東半分を民間船舶が、西半分を義勇軍とトリステイン海軍所属の艦船が使用していた。

ルイズは西側の軍用棧橋の上にいた。その場にはテントが張られて椅子が並べられ、『東方義勇軍』の平賀中将や小林中将、さらにはトリステイン王国政府やロマノフ海軍の関係者がいた。実はこの日、ロマノフ公国で建造された艦船のトリステインに対する引渡し式が行われることになっていた。

現在トリステインでは「にぎつ丸」や「おおよど」等の乗員から抽出した人間、さらには地球からスカウトしてきた人間により突貫での海軍水兵の養成が進められていた。もちろん艦艇の整備も同時に行われていた。ただし、中世ヨーロッパの技術力からようやく打破しつつあるハルケギニアにおいては石炭炊きの小型軍艦を造るのが精一杯であった。

そこで、艦艇の建造の一部はより技術力のあるロマノフ公国に委託されていた。もつとも、流石に戦争が1年以内に始まりそうな現状では悠著に戦艦や正規空母を造っている暇はない。だから小型艦艇や改装艦艇の整備に重点が置かれていた。既にロマノフからは何隻かの中古軍艦が購入され、通商護衛任務に従事していた。

そしてこの日待望の新造艦艇第一陣としてロマノフからトリステインに引き渡されることとなったのが、新造の小型駆逐艦2隻と改装軽空母1隻である。これら3隻は建造段階からロマノフに委託された初めての艦艇であるために、両国友好の記念すべき艦艇として今回ルイズがわざわざその引渡し式に立ち会っているのであった。

小型駆逐艦は才人らのいた世界で第二次大戦中にアメリカ力で建造されたP F、パトロール・フリゲートを参考にした艦である。全長95 m、排水量1200 t、速力24ノット、127 cm単装砲3基に爆雷と貧弱な性能であるが、起工から竣工まで4ヶ月で済むという点から建造が決定された。艦名は「双月」と「新月」である。

なお艦名については、現在トリステイン海軍の運用が『東方義勇軍』に委託されているので、今回は義勇軍水上部隊司令官の小林中将が名づけている。

また改装空母の方は、ロマノフ公国が東方への進出に備えて建造中だった重油専焼式の大形給油艦を買収、改装した船である。全長は190 m、速力は23ノット、搭載機は21機である。なおこちらの改装も第二次大戦中の米軍の護衛空母の設計を参考にしている。こちらの艦名は神話から採られて「プリシंगाメーン」となった。

「今日こうして、親愛なるロマノフ公国から我がトリステイン王国に、その絆の証として送られた鉄の船の引渡しはがねの儀式に同席できることを、トリステイン王室を預かる身として非常に光栄に思いつつ、ロマノフ公国への感謝と、これより乗り組む乗員たちの武運を祈らせていただきます。」

「ルイズ代王殿下に敬礼!!」

特設の演説台の上でルイズが挨拶を行い、棧橋に並んだ乗員たちが敬礼。それを終えるといよいよ艦艇の引渡しが始まった。国旗掲揚用のポールからロマノフ公国旗が降ろされ、代わりにトリステイン海軍旗が掲揚される。そして回航要員と入れ替わる形で、トリステイン側の乗員が乗り込み、引渡しが完了する。

その瞬間、軍楽隊がトリステインの国歌を演奏し、参加者全員が立ち上がって拍手した。引き渡された艦艇はこれより猛訓練に入り、実戦配備されると直ちに各通商ルートの護衛任務に入ることになっていた。

ルイズは演説を終えて乗り組む乗員を見送ると、休む間もなく式典に出席したロマノフ海軍や義勇軍関係者に挨拶して回り、多忙な時間を過ごした。

そして日が落ち夜になったが、彼女の仕事は未だ終わっていないかった。公式な予定では、彼女はそのままラ・ロシエールの宿屋に泊まるはずであったが、彼女は式典終了後に地味な服に着替えると、義勇軍差し回しの車に乗り込んだ。そして秘密裏に、『東方義勇軍』ラ・ロシエール基地へと向かったのであった。

## ラ・ロシエール会議 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

昨晚「ヒトラー最期の12日間」が放送していたので録画。朝久しぶりにちよつと見ましたが、陥落寸前のベルリンで、12歳や14歳の少年少女が軍服着て8、8cm砲を操っている姿が悲壮だった。戦争なんてするもんじゃないですね。

さて、今回は『トウ機関』に触れましたが、次回はその機関長が登場します。一応言っておくと転移してきた人です。最初は本郷義昭にでもしようかなと思いましたが、却下してとある漫画の憲兵少尉に来てもらう事にしました。

## ラ・ロシエール会議 2（前書き）

明日、明後日と忙しいので更新が滞ります。すいません。

## ラ・ロシエール会議 2

『東方義勇軍』トリスティン方面軍ラ・ロシエール飛行場の本部棟は、ミライの基地が司令部機能を破壊された時に備えて、その代用になるように大きく造られていた。そしてその大会議室において、秘密会議が行われようとしていた。

義勇軍差し回しの車で本部棟前にやってきたトリスティン代王のルイズは、夫であり義勇軍中佐の才人に出迎えられた。

「御足労おかけします。ルイズ代王殿下。」

車の扉を開け、敬礼しながらそう言った才人に、ルイズは苦笑した。

「才人がそんな言葉を言っても似合わないわね。」

「余計なお世話です。」

自嘲気味に言う才人。

「それに、私にそんな敬語なんか使わなくても良いのに。」

ルイズは代王になった現在でも、2人だけで話す時は普通に話している。

だが、今回のルイズはあくまで代王という身分でやって来ているからいつものようにはいかない。才人もルイズの夫ではなく、義勇軍中佐という身分で彼女と接する必要があった。

「曾爺ちゃんや父親から言われてますので。それにこの基地では俺たちの関係を知っている兵士は少ないものですから。どこから情報が漏れるかわかりませんから。さ、どうぞ殿下。既に会議出席者全員集まっております。」

才人は彼女を会議室へと案内した。会議室は2階にある一番大きな部屋で、この時はルイズが座る玉座を底辺としてコの字型に机と椅子が並べられていた。

扉が開いて才人に案内されたルイズが入ると、一斉に中で待っていた人間たちが立ち上がった。そしてその代表として平賀才吉義勇軍総司令官が声を張り上げて言った。

「全員、トリステイン王国代王、ルイズ・フランソワーズ・ヴァリエール殿下に敬礼!!」

急いで自分の席に移動した才人を含めた義勇軍からの参加者全員が彼女に向かって敬礼した。またトリステイン王政府から出席したマザリー二枢機卿、そして今回特別に参考人として呼ばれたガリア王国の姫君シャルロット・エレーヌ・オルレアン嬢、つまりタバサの2人は席から立ってお辞儀した。

一方、玉座に座るルイズも参加者全員に向かって軽く礼をした。そして彼女は席に腰掛けた。それと同時に、司会役の才吉を除く全員が席に腰掛けた。

「それではこれより、トリステイン政府と『東方義勇軍』による秘密戦略会議を始めたいと思います。なお、始める前に出席者を簡単に紹介しましょう。今回はトリステイン政府よりルイズ殿下とマザ

リー二枢機卿に参加して頂いています。我が義勇軍からは総司令官である私平賀才吉、トリステイン方面軍司令官の平賀才助中将、副官として同軍航空隊司令の菅野中佐、王室連絡将校の平賀才人中佐、アルビオン方面軍から私の副官として葛西豊少佐、そして王室連絡将校のトマス・ジョーンズ中佐です。海上部隊からは小林武中将、そして『トウ機関』からは司令の平成太郎准将です。そして参考人として、ガリア王国王弟の姫君であるシャルロット・エレヌ・オルレアン殿下も参加して頂いています。」

トリステイン政府からの参加者は少ないが、それでも政治のトップ2人が参加している意義は大きい。また今では隠れて暮らしているタバサを連れてきていることから、これがガリアがらみの会議であることが良くわかる。

そんな中、才人は『トウ機関』司令官の平准将に目を向けた。才人が彼と会うのは今回が初めてである。第2種軍装をキツチリと着こなしていることから、軍人出身であることがわかる。歳は37のはずだが、それよりも若く見える。

才人が才吉に聞いたところによれば、彼は5年前にこの世界に流れ着いた人間で、元の所属は大日本帝国陸軍憲兵隊中尉だという。ただし、才人らのいた世界とは違う平行世界の住人で、元いた世界の平成9年から飛ばされて来たらしい。ちなみに飛ばされたときは今の奥さんと一緒に広島市内で任務中だったという。サイドカーに乗っていた所で爆弾テロの爆発に巻き込まれ、気づいたらハルケギニアに流れ着いていたらしい。

彼は元いた世界では特務での功績を認められて、一兵卒からあつという間に尉官にまで昇進したことから、『今のらくろ』とも呼ばれていたらしい。



その彼、最初は義勇軍に歩兵として志願してきたらしいが、前歴から才吉に諜報部員として採用され、こちらの世界でも頭角を発揮してすぐに『トウ機関』の機関長を命じられている。

『トウ機関』が実に多種多彩かつ有益な情報を持ちこめられるのは彼の手腕に拠る所が大きかった。なお、彼の奥さんも同時に現役復帰したと才人は聞いていた。

「今回の会議の開催目的は、ガリア王国のトリステイン王国に対する侵攻の兆しについてと、それに対する対策の検討です。」

才吉の言葉に、全員の表情が厳しくなった。

「アルビオン解放戦争において、ガリアによるレコン・キスタへの介入が認められたために、我々はガリアが今度はトリステインに対して何らかの行動を起こすことを警戒し、これまで必要な処置を取ってきました。各種兵器や部隊の整備に加えて諜報活動もその一環です。結果平准将率いる『トウ機関』の働きにより、貴重な情報を多数入手することが出来ました。平准将、頼む。」

「はい。」

才吉に呼ばれて、平が立ち上がった。

「我々『トウ機関』は、アルビオン解放戦争前後からガリア王国に対する諜報活動を行ってきました。困難な作業ではありましたが、4ヶ月ほど前から首都リュティスの宮殿に平民の召使を装ったスパイを何名か送り込むことに成功しました。スパイは城内において活発に盗聴や撮影（隠し撮り）などによる情報収集を行っております。

その言葉に、これまで情報を知らされてこなかった数名からは感嘆の声が上がった。

「ガリア側はマジックアイテムへの用心こそしていますが、こちらが仕掛けた盗聴器や隠しカメラにはほとんど気づいておりません。そして1ヶ月前、ついにジョゼフ王の玉座に盗聴器を仕込むことに成功しました。今回はその中から、重要な音声をピックアップして聞いていただきます。また、撮影された写真も後ほど見てもらいます。」

「ありがとう平准将。それでは皆さん、これより『トウ機関』が収集したガリア王ジョゼフの音声を聞いてもらいます。」

既に才人はジョゼフ王についての情報を文章で一部才吉や才助から見せてもらっていた。だから彼が精神を病んでいることは知っていた。しかしながら、それから間もなく流された音声は、文章ではわからない物をその場にいる全員に伝えることと成った。

音声の内容自体は、ジョゼフがトリステインへの武力侵攻を準備するよう命じている物や、今回起きた小競り合いを命じている物、さらにはエルフの使者と密約を交わしているものまであった。それでさえも充分驚きのものだが、真に参加者たちを驚かせたのは、まるで狂人のように戦争や謀略を楽しむかの発言をしている部分だった。

さすがの才人やルイズも寒気を感じたくらいだった。またマザリ一二を含む数人は驚愕の表情を浮かべており、1人タバサはどこか怒りを含んだような表情をしていた。

さらに参加者を驚かせたのは、ジョゼフがシェフィールドという女性と会話している音声と、その会話から明らかに彼女が『虚無』の使い魔である趣旨の発言をしていることだ。

全てを聞き終えたとき、マザリーニ枢機卿が呆然としながら言った。

「いやはや、あれがジョゼフ王の本心と言うのか・・・無能王と呼ばれているが、あれでは狂王だ。しかもその彼が『虚無』の担い手であり、例のシェフィールドという女がその使い魔で『ミヨズニトニルン』とは・・・信じられない。」

「けど、今の声は間違いなくジョゼフ王の物だった。」

マザリーニのうめきに、タバサが簡潔に答えた。

「むうう・・・」

「しかし、相手が戦争を望んでいるようでは、外交努力なんかしても無駄ということか？」

才助が言つと、平が頷いた。

「中将の仰るとおりで、ジョゼフ王も外交についてはあくまでトリステインに対する時間稼ぎと攪乱に過ぎないとしています。しかも我々の得た情報によれば、トリステインへの参戦はガリア国内の多くの貴族には好意的に捉えられているようで、例えジョゼフ王を暗殺してももはや戦争を止めることは出来ないでしょう。」

その言葉に、全員が溜息をついた。さらに才人はルイズが顔に手を当てているのに気づいた。自分が戦争という国の一大事に本当に臨まなければならないことを改めて確認したことで、心に重圧が掛かったらしい。

もつとも、そんな姿を見せたのは一瞬で、才人以外の誰にも気づかれること無く、すぐに前と同じように手を膝に当てて表情を戻している。才人はそんな彼女の姿に感服する思いだった。

さらに会議は進んでいく。

「ここからはガリア国内で撮影されてきた写真をお見せいたします。

」

平の言葉と共に、部屋の明かりが消され、用意されていたプロジェクターの電源が入られ、壁に写真が映し出された。

## ラ・ロシエール会議 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお平准将の元ネタは、小だまたけし先生作の「平成コンプレックス」です。

### ラ・ロシエール会議 3

ガリア国内で撮影された写真には、様々な物が映し出されていた。宮殿内の部屋を撮った物から、ガリア軍の拠点である重要な基地などを写した物など内容は色々であった。

それら1枚1枚が次々とスクリーンに映し出されていく。その度に『トウ機関』機関長の平准将が撮られた場所と時期を説明していく。だが、音声の方に比べてこちらは当初参加者らの気を引くような物は少なかった。

半分ほど過ぎ、参加者が少しばかり飽きを感じ始めた頃、ある1枚の写真に来たところでマザリーニ枢機卿が声を上げた。それはガリアの主力艦隊の母港であるサン・マロンで撮られた物だった。

「うん？これは！？」

いきなりであったために、何人かは彼に視線を向けたほどだ。

「枢機卿？」

ルイズが何事かと思いつつ、彼に尋ねた。

「これは・・・まさか・・・エルフか？」

マザリーニが声を絞り出すように言った。他の参加者もその写真をジッと見た。すると確かにその写真には特徴的な尖った耳を持った人間、すなわちエルフの姿が映し出されていた。ただしかなり小さくではあったが。他の人間が見落とすのも仕方がない。

ただし、平はもちろんわかっていたらしく、すぐにマザリー二の言葉を肯定した。

「はい、間違いなくエルフです。この写真が撮られたのは1ヶ月前、サン・マロン軍港の近くにある実験農場と呼ばれる、ガリア国内でも非常に警備が厳重な地帯です。撮ったのはそこから少し離れた資材置き場へ資材を運び込む労働者の1人で、彼自身もレポートによればエルフを見たと言っています。なおこの写真は遠距離から撮られていたので、画像の引き伸ばしと修復を行っています。」

平が写真に関する説明を行う。そして引き伸ばした写真も映した。

「なんでエルフなんだ？ 以前提供された情報では、この実験農場はガリア軍の新兵器の工場と聞いたぞ！？ ガリアがエルフと密約を結んだという話は聞いていたが、どうしてこんな所にいるのだ！？」

いくら密約を結んだからと言って、さすがに軍の最重要施設に入れているなど、マザリー二にしてみれば想定外も良いところだった。

「残念ながらさすがに実験農場の警備は堅く、こちらのスパイは今のところもぐりこめておりません。ただ集まった情報から推察するに、エルフがガリアの兵器開発になんらかの技術供与を行っているようです。」

「技術供与とはどういうことかな？」

才助が念のため尋ねる。

「良い質問です中将。この場合の技術とは科学技術ではなく魔法関

連の技術となります。こちらの調査では、エルフの科学力はハルケギニアよりは進んでいるようですが、機械文明を持っているとは考えられませんので。」

「魔法ということは・・・先住魔法か！なんたることだ。」

説明を聞いたマザリーニがそう言って頭を抱える。ロマリア出身で自信も熱心なブリミル教徒である彼はエルフト、彼らが操る先住魔法の脅威をよく理解していた。その力を敵国となるガリアが持っているのは、彼にとつてあまりにも始末の悪い話であつた。また参加した義勇軍人の中にも、先住魔法に関しては脅威を感じている者が何人かいた。

そんな参加者たちを他所に、平は説明を続けた。

「一体どのような武器を作っているのか自体は、残念ながら盗聴したジョゼフ王の音声からも掴めておりません。ただ他のスパイからの情報によれば、実験農場に多数の『土』系統のメイジと鉄を作る職人が集められたそうです。しかもメイジはいずれも『トライアングル』以上の高位者です。また、多量の鉄が持ち込まれたのも複数の人間の証言が得られているので確かです。」

「ふむ。魔法については我々よりも詳しい方々に聞いたほうが良からう。ルイズ殿下、シャルロット殿下、マザリーニ枢機卿、何か平准将が今言つたことで思い当たるものはありますか？」

才吉の質問に、3人とも少しばかり考え込んだ。

「そうね・・・『土』で、しかも工場で造るような強力な武器って言つたら・・・やっぱり『ガーゴイル』かしらね？きつとそうよ、



多分『ガーゴイル』をたくさん・・・才人たちの世界の言葉で確か大量生産だったわね。それをしているのよ。間違いないわ。」

ルイズが答えた。というか断定しきっている。もっとも実際その通りであつたのだが。大砲等の可能性も捨てきれないと言えば捨てきれないのだが。

ただし、義勇軍側からは何も反論は出なかった。これはそうした兵器類の発展に対して魔法が貢献することがほとんどないと、皆わかつていたからだ。

そういうわけで、サン・マロンで研究されている兵器は『ガーゴイル』の可能性が強いということになった。

ちなみに才人らは模擬戦で『土』系統のメイジが造った『ゴーレム』や『ガーゴイル』と戦ったりしている。だからそれなりにその強さはわかつていた。ただし、小型の物（ギーシュの『ワルクューレ』クラス）程度だと、確かに常人と戦うだけなら強いのだが、義勇軍の人間なら小銃の徹甲弾、場合によっては銃剣を使えば充分対処できる。またマチルダが造るような大型にしても、重機関銃の徹甲弾があれば充分というのが共通の認識だった。ガーゴイルもゴーレムより多少防御力が勝り、加工の仕方では飛行能力を付与できたりするが、それとてあまり脅威としては捉えられていなかった。

なにせ、どんなに大きくても緒戦は土である。コンクリートさえ粉々にしてしまう重機関銃の射撃に耐えられる筈が無かった徹甲弾や焼夷弾を使えば尚更である。

閑話休題。

「しかし殿下、例えばガーゴイルだとしても、造るだけならエルフの手など借りる必要はございません。ですから当然ただのガーゴイルではないでしょう。」

ルイズの言葉にマザリーニが付け加えた。

「枢機卿としては、それについて何か意見をお持ちですか？」

才吉が尋ねる。しかしながら、マザリーニは渋い表情で言った。

「さすがにそこまでは、私にもわかりませんな。口惜しいことです。先住魔法は確かに四系統の魔法より強力です。しかしながらそれが一体どのような物であるかは、私の埒外です。」

生憎とハルケギニアの人間は先住魔法の脅威こそ教えられていたが、それが具体的にどのようなものであるかは良く把握していなかった。つまり敵のことが良くわかってない。6000年もの長い間、人間がエルフに勝てない理由がここにあるかもしれない。

「それに大量の鉄の意味もわからない。」

聡明なタバサですら、大量に運び込まれているという鉄の意味を推測しかねた。まさか魔法を掛けた上で、巨大ガーゴイルの鎧にするなど、彼女と言えども思い浮かばなかった。

「それについては、さらなる『トウ機関』からの情報を待ちましよう。ただし、ガードが固いのでより詳しい情報が入るかは不透明です。こちら側も、不正確でも良いからある程度推測はしておくべきでしょう。」

才助が言つと、マザリーニが頷いた。

「そうですね。早速、魔法研究所の『土』メイジに調べさせましよう。それで良いでしょうか、殿下？」

マザリーニがルイズに顔を向けると、彼女はすぐに頷いた。

「ええ、そうして。」

こうして、実験農場で研究されていると思われる新兵器についての当面の対策がトリステイン政府の最重要人物である2人の間で取り決められた。おそらく明日の王宮での閣議でそのまま通達されるはずだ。もちろん、その際には今日の会議の情報の一部も流されるが、意図的に重要箇所がぼかされるはずだ。

さて、一段楽したところで平准将が再び写真を壁に映し始めた。そこから先はサン・マロンの軍港を写した物がほとんどだった。ガリア軍両用艦隊旗艦である「シャルル・オルレアン」をはじめとする空中戦艦の停泊中の姿が次々と映る。さらに艦隊司令部や弾薬庫、砲台と言った重要施設の写真もあった。

こうした写真は、もし空襲や艦砲射撃、さらに同地を占領する際には大いに役立つはずだ。そして最後の1枚になったが、映す前に平が手を止めて言った。

「これから最後の写真を映しますが、じつはこれに気になる物が写っているんですね・・・ただし、先ほどのエルフのものより遥かに不鮮明であるのですが。」

「構わない、見せたまえ。」

「は!!」

才吉に促されて、平は最後の写真を映した。その写真にはサン・マロン港の一角が映されていた。栈橋に何隻もの帆船が係留されている。

「これがどうしたというのかね？ 私には帆船が普通に並んでいるようにしか見えないが？」

海上部隊司令官の小林武中将が言った。

「はあ、我々も最初は気づかなかったんですが。引き伸ばしてそれらしい物が出て……ここです。」

引き伸ばした写真を彼は映した。そしてその中の一箇所を、棒を使って指した。そこは帆船と帆船の間のほんの僅かな空間。そこにわずかだがこの時代の物とは思えない船の船首部分が写りこんでいた。

「これは……潜水艦のようだが？」

「小林中将の言うとおりです。実は写真はありませんが、スケッチは届いております。こちらです。」

平は、そのスケッチを参加者たちに回し始めた。

### ラ・ロシエール会議 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

外伝の更新がストップしています。もうしわけありません。

## ラ・ロシエール会議 4

参加者に回されたスケッチは、お世辞にも上手いとは言えなかった。それこそ、小学生低学年の人間が描いたような駄々草な絵だった。しかしながら、一応特徴は捉えていた。

「これは、形からして潜水艦だな。小林中将はどう思います？」

スケッチを見た才吉が、海上部隊司令官の小林中将にそれを渡した。

「確かに、感じからして潜水艦ですね。平たい船体に、中央部の艦橋。ただ、この砲塔と砲身のような物が気になりますね。」

小林が見たスケッチに描かれていた物体は、確かに潜水艦と思しき特徴が見られた。しかし、その艦橋と思われる部分に、砲塔と2本の太い砲身と思われる絵が描かれていた。

現代の潜水艦は、魚雷とミサイルが主兵装なので大砲を積むなど有り得ない。また時代を遡って第二次大戦以前の潜水艦は大砲を積むには積んでいたが、その多くが玩具のような小型砲で、砲塔や連装の大口径砲を積んだ潜水艦など常識的には有り得ない。

そのため、小林中将は首を傾げたわけだが、既にピンと来ている人間もいた。最初にスケッチを見た才吉もそうであったし、また末席に座る才人を初めとする数人がそうであった。

「砲塔を積んだ潜水艦？まさか「伊507」・・・じゃなかったフランスの「シエルクーフ」！？」

才人が口に出した。

「やっぱりお前もそう思うか才人。その通りだ。あの艦はカリブ海で貨物船と衝突して沈没したことはなっているが、しっかりと沈没した所を見た人間はいない。そのショックでハルケギニアに転移したというなら、それなりに理屈が合うと思うんだ。」

才吉が言った。もつとも、その会話についていけない人間がいるのも事実なので、直ぐに才助が補足説明を行った。

「「シエルクーフ」とは、我々の世界で70年近く前にフランスという国の海軍が建造した潜水艦、つまり海に潜る軍艦です。我が義勇軍でも同種の艦艇を運用していますが、こちらは我々が運用している物（「呂501」）よりも大きく、特徴的なのは20cm連装砲を積んでいることです。」

ちなみに、才人が言った「伊507」とは数年前に日本で作られた潜水艦映画に登場したこの艦をモチーフにした艦だ。そのため、才人はぶつぶつと「もしかして秘密兵器の美少女を乗せているのか？」と呟いていた。もちろん、それは100%有り得ないことだ。

「ああ、そう言えばそんな話聞いたことがありますね。しかし、もしこのスケッチの艦がそのフランスの潜水艦だとすると、ちょっと厄介ですね。」

小林がそう言って渋い表情をした。

「一体、何が厄介となるのですか？」

マザリーニが尋ねた。彼には近代兵器がすごいことがわかって  
いるのだが、未だすべての兵器に関して知識を得ているわけではない。

「まず潜水艦は海の中を潜って移動するので、発見するのが困難な  
のです。しかもこの艦は大砲を積んでいますから、陸上への攻撃も  
出来ます。つまり海岸に限定されますが、好きな時に好きな場所を  
攻撃できることになります。さらに海上を行く商船には脅威以外の  
何物でもありません。その場合は水中から魚雷という兵器で攻撃が  
出来ますから。もしこの艦が外洋諸島との航路を攻撃するような事  
態が起きれば、大変なことになるでしょう。特に金や銀と言った鉱  
物を運んでいる船を襲撃された場合は。」

「うー！」

才助の説明にマザリーニも納得した。外洋諸島は現在トリステイ  
ンとアルビオンに莫大な財をもたらししていた。何せ金銀と言ったレ  
アメタルや石油や石炭という燃料となる資源が豊富に埋まっており、  
さらに暖流が流れているおかげで豊かな漁場や土壌を持っているの  
で移民地としても最適だった。そしてそれがトリステインとアルビ  
オンの国庫を大いに潤わせていた。

その外洋諸島との連絡は、現在の所ハルケギニアで建造された蒸  
気船、もしくはロマノフ公国から買い入れた中古の商船で行われて  
いた。これらはいずれも足の長い水上船舶で、海上を走行している。  
一応海獣対策に武装はしているが、それでも水中から魚雷で狙われ  
てはひとたまりも無い。

「もしそうになったら、義勇軍の海上部隊とトリステイン海軍は全て  
の商船を護衛する必要に迫られます。しかしながら、現状ではそん  
なこと不可能です。」



小林が苦虫を潰したような表情で言った。現在彼らの手元にある艦艇はいずれもハルケギニアのレベルからすればそれなりのものだが、数自体は20隻にも満たない。これで通商路を守るなど不可能である。それに加えて、対潜装備も一部を除いては粗末な物しか積んでいなかった。

また彼は大戦中に米海軍の潜水艦によって通商路を破壊された事実を、身を持って体験している1人だった。現状ではどうなるか想像するのは容易い。

もつとも、実際に発見されたのが「シエルクーフ」であるという確証はまだない。だから才吉は警戒をしつつも、真偽を確認させることにした。

「だがまあ、まだ「シエルクーフ」だと断定出来たわけではありません。平准将、この船の情報収集に全力を尽くすように命じてくれ。」

「了解です。」

才吉の命令に、平はただ一言そう答えた。ちなみに、この艦が「シエルクーフ」と正規に確認されるのはこの2週間後のことである。

「シエルクーフ」に関する話題はここまでとされ、そこから先は義勇軍の戦争準備に関するもの、つまり対ガリア戦を想定した作戦

名ブルー、対ゲルマニア戦を想定した作戦名レッドに沿った兵力整備の進捗状況についてだった。

この2作戦の内、レッドの方は諜報活動の行方が大きく左右するはずだった。なぜならこの計画ではまず戦前の内に国境線の領主とあらかじめ同盟関係を結んでおき、敵軍の直接侵攻を阻害し空軍による侵攻へ誘引、そこを義勇軍の航空戦力で殲滅するはずだったからだ。

「国境線の領主に懐柔については、計画通り進捗しております。ゲルマニアの人間は中央政府への帰属意識が弱く、利に目ざといので

」

平が笑いながら報告した。その言葉に、ルイズを含む他の参加者からも失笑が漏れた。

「まあ、こつちだってかなり彼らに稼がせてやったんだ。それくらいしてもらわんとな。」

才吉が正直なセリフを口にした。ゲルマニアの領主たちを懐柔するために、随分と才吉はアメを彼らに与えてきた。さすがに武器を輸出するような真似はしなかったが、冶金技術を初めとする技術供与や、地球製製品の優先取引権の融通など様々だ。その結果得たのが、ゲルマニア中央政府へ隠す形で取り交わされた不可侵条約等だ。

後にハルケギニア戦役が起きた際、この条約は予想通りの威力を発揮する。さらには、ゲルマニア皇帝の権威を著しく落とし、皇帝の退位と新皇帝の即位という事態に陥るのだが、それはまだ未来の話だった。

続いてゲルマニア艦隊を殲滅する上で重要になる航空戦力については、航空隊の菅野中佐が報告した。

「敵艦隊に対処するための航空戦力については、とりあえず予定通りの増強が続いております。パイロットの方も目処が付きまして。ただし、ガリアの敵空軍がどのように出るかで状況は大きく変わります。」

ガリア国内に現れた枢軸国空軍部隊。それが来る戦争で一体どのようなに動くかが、大きな鍵になりそうであった。

「そう言えば、それについて『トウ機関』は何も情報を得ていないのですか？」

才人が以前から思っていたことを、平に向かって口にした。ガリア国内に突如として現れた飛行場と空軍。その存在にどうして優秀な『トウ機関』が気づけなかったのかと。

「残念だがまだ得ていない。一応航空偵察の結果に基づいてスパイを派遣しているんだが、相手の警備は厳重でね、しかも民間人の居住地域から大分離れているから、民間人に擬装しての潜入っていうのも難しくて。だから増強も考えているところだよ。」

「そうですか。」

才人は有力な情報が得られることを祈るだけだった。

「それでは、次に作戦ブルーについては？」

才吉の問いに、才助が答えた。

「現在歩兵、砲兵、戦車、補給各部隊とも順調に戦力強化を行っています。また同盟関係にある各部隊の戦力増強、装備に対する習熟も順調です。あとは、例の訓練を行うだけです。」

すると、マザリーニが首を傾げた。

「例の訓練とは何ですか？」

「それはですね・・・」

彼の言葉に、マザリーニは啞然とした。

「そんなことを本気でするのですか？」

「ええ。」

才吉は自信満々で答えた。

「うむ・・・しかしガリア逆上陸とは・・・」

「もちろん、それはトリステイン国内に侵攻するであろうガリア軍を追い出してからの話になるでしょうけどね。なお、ガリア軍の迎撃プランについては後ほど文章にして提出いたします。」

それから2、3確認をした後、会議は終了となった。ただし、才吉と平、そして何故かタバサは別室に移動して秘密の会合を持ったようだった。

ルイズとマザリーニ、そして王室連絡将校だった才人は、用意さ

れた義勇軍の車でラ・ロシエールの市街地にある宿へと戻った。

#### ラ・ロシエール会議 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、作者はいよいよテスト週間突入です。ただし、実際には既に終わっているものや締め切りまで間があるレポートがあるので、全部が全部テストをするわけではありません。ただし、更新がまた間延びする可能性がありますので御理解下さい。

ちなみに作者の採っている授業は語学関係を除けば労働問題と現代史関係が多いです。竹島問題とか。

竹島問題は笑っちゃいましたね、日本の研究の杜撰さに（笑）

## 2人の時間

宿に戻ったルイズと才人は、同じ部屋でこの日一夜を共にする。

これはマザリーニ枢機卿や才吉らの計らいによるものだ。結婚したとはいえ公には発表しないということなので、2人が夫婦であるということとはわずかな人間しか知らない。当然、まともな夫婦生活など送れるはずが無い。

2人にとって、一緒になれる時間は現在めっきり少なくなり、最近ばかりでルイズの予定が会う日の夜だけになりつつあった。

「ねえ才人？」

「どうした？ルイズ。調子でも悪いのか？」

シャワーを浴び、寝巻きに着替えた所でベッドに腰掛けていたルイズが才人に声を掛けてきた。ただし、その声はどこか不安を含んでいる物だった。

「別にそういうわけじゃないわ。・・・ただ、心配なの。」

「心配？」

「そう。さっきの会議でも言っていたけど、ガリアとの戦争はもう止められそうにないわ。別に義勇軍の力を信じていないわけじゃないけど、あの大国のガリアとゲルマニア相手に戦争をして勝てるかしらと思って。」

そう言う彼女の表情と声は代王であるルイズの物ではなく、今で

はごく限られた人の前でしか見せない少女としてのルイズの物だった。

才人はルイズの隣に腰掛けながら返事をする。

「そうだな・・・多分勝てるとは思えない。」

「え!？」

才人の発言に、ルイズがギョツとした。

「いや、別にトリスティンが負けるってわけじゃない。ただな、相手は人口でも国土でも何倍も大きい大国だからな。義勇軍の力で侵攻して来た軍隊を追い払うことは出来ると思う。けど、ガリアやゲルマニアの王都まで直接侵攻できるかはわからない。つまり、負けないようには出来るけど、ガリアを屈服させる所までは行けないってことだ。」

才人の言葉は義勇軍で行われた演習の結果からはじき出されていた。これがもし、ガリアだけが相手の戦争ならアルビオンと共同してガリアの内陸部まで侵攻出来るかもしれない。しかし東側のゲルマニアに対して、国境線の貴族を取り込んだとはいえ防衛用の兵力を引き抜くことは難しい。だから国内から敵軍を追い出す分には充分であるが、ガリアやゲルマニアを直接屈服させるだけの兵力は無いというのが義勇軍幹部陣の結論だった。

「義勇軍も増強はしているけど、直接敵地を占領する歩兵自体はアルビオン方面軍とあわせて1000弱しかないんだ。王軍だってアルビオンからも掻き集めたところで確か4万ぐらいだろ?これじゃあ点の占領(街や村と言った拠点の占領)は出来ても、とても面



の占領（地域その物を占領）をするなんて無理だ。そんなのは、今のトリステインとアルビオンの国力をあわせても出来っこない。」

才人はミリオタであり、最近では義勇軍の上級幹部から将校教育を受けている。だから少ない兵力で広い地域を占領することの愚は心得ていた。

「そう・・・じゃあ、苦しい戦いになるわね。」

「ああ、出来ればアルビオンの時みたいに敵の頭が一箇所に揃っている所へ強襲して、1週間ケリつけるのがいいけど、相手はあのジョゼフ王だしな・・・」

世間からは『無能王』等と呼ばれているが、スパイ情報から義勇軍では、狡知に長けた相当な策略であるという評価を受けているのが彼だ。でなければアルビオンに対する工作など出来っこない。

「それに彼を殺しても、ガリアの有力貴族の多くが戦争に賛成しているから直ぐには止められない・・・か。」

言い終えて、ルイズは溜息をついた。今の彼女の肩に掛かっている重荷は、恐らくレコン・キスタ侵攻前夜にアンリエッタが感じた物以上だろう。

「ルイズ・・・けど、もしガリアとゲルマニアに対する例の工作が成功すれば、多分戦争は一気にトリステイン有利になると思っぜ。それに、今日話した作戦もあるし。」

すると、ルイズは表情をいつになく真剣なものにした。

「才人、私は一時的かもしれないけど女王なの。だから、別に義勇軍の実力を疑っているわけじゃないけど、最悪の事態を考えなきゃいけないの。もし姫様から預かったこのトリステインを滅ぼすようなことになったら、私は・・・」

ルイズはそこから先を言えなかったが、才人にはもちろん何を言わんとしているかわかっていた。彼女の眼は、才人もこれまで何回か見たことのある、死を覚悟した者がする眼だ。

王になるということは、彼の想像以上の物をルイズの肩に背負わせているようだった。

（こいつ、普段は王として不安も見せずに振舞っているけど・・・やっぱり。）

現在ハルケギニアは大いなる転換の時代を迎えている。それを率先して作っているのは才人やルイズ、ウェールズ王子やアンリエッタと言った若い人間たちだった。しかし、その分彼らには重い責任がのしかかっている。

才人もその1人であるが、一軍人に過ぎない彼が持たなければならぬそれは、王族であるルイズに比べれば遥かに軽いだろう。これまで彼自身何度も感じていたであろうが、ルイズと2人きりで話して、改めてそれを実感する。

「ごめんルイズ、俺お前の気持ち全然わかってなかった。」

「いいのよ。こうして話せただけでも大分気が楽になったわ。」

頭を下げる才人に、ルイズは笑みを浮かべて言った。

「ルイズ・・・」

「え!？」

才人はルイズを抱きしめた。

「さ、才人!？」

「ルイズ、何があっても、俺はお前を守るからな!! 使い魔として、夫として。だから、安心しろっていうのは無理かもしれないけど、1人で全部背負わなくても良いんだ。」

その言葉に、ルイズはどこか救われる思いがした。彼女も才人を抱く。

「才人・・・ありがとう。」

2人はしばらく抱き合った後、ベッドへと倒れ込んだ。

翌朝、義勇軍の飛行機に乗り込んだルイズら一行は、ミライ経由でトリスタニアへと戻った。そして昼から行われる会議に出席し、昨晩行われた会議の内容を今度はトリステイン政府の重臣たちに伝えた。

もつとも、既に戦争の臭いを嗅ぎ取っていた者がほとんどだから、

驚かれるということはなかった。重臣たちが驚いたのは、王室連絡将校として参加した才人が持ち込んだジョゼフ王の声が録音されたテープを聴いてからだった。

ここに至って、彼らもようやくジョゼフ王がどのような人物であるかを知ることと成った。

ちなみに、この会議では前日の会議の内容が全て話されたわけではなく、義勇軍の戦備・作戦関係のことは当然機密漏洩の観点から話されていない。

とにかく、2時間に渡った会議によってトリステイン政府はアルビオン政府と合同で対ガリア・ゲルマニアとの戦争準備に本腰を入れることとなった。ただし、この世界では民間人の避難とか、戦時に備えての物資統制などのマニュアル作りと言った概念はまだない。

そのため、一部を（後にはそのほとんどを）義勇軍関係の人間が肩代わりすることとなるのだが、それはもう少し後の話だ。

会議終了後、才人はルイズと分かれてミライの基地へと戻る。王室連絡将校とはいえ、いる必要と正当な理由が無ければ、彼が王宮内に留まれる権利はない。

ルイズの執務室で、僅かな時間だけだが2人切りとなった間に挨拶を済ませる。

「それじゃあなルイズ。次の報告は3日後だから。公務、がんばれよ。」

「言われなくてもわかっているわよ。才人も義勇軍の訓練しつかり

やるのよ。『ガンダールヴ』なのに、ケガとか事故死とかしたら許さないんだからね。」

「安心しろ、俺は簡単には死なないよ。御主人様。」

そして才人は、彼女に向かってウィンクした。最初の頃は不器用であつたが、最近は随分と様になった。

「ま、まあ犬としては上出来かしらね。」

「何を！」

2人は冗談を言い合い、笑い合った。

「じゃあ3日後な。」

「ええ、楽しみにしているわ。」

挨拶を済ませて、才人は部屋から出て行つた。それを見送つて、一人残されたルイズは溜息をついた。

「3日か・・・長いわね。」

彼女は執務機の椅子に座つた。机の上には、ハルケギニアには珍しい写真盾が乗せられていた。1つはミライの写真館で両親や姉らと一緒に撮つた家族写真。そしてもう1つが、地球に行った際に才人と2人で撮つた写真だつた。

ルイズはしばらくその写真をじつと見ていたが、まもなく部屋の扉がノックされるとさつと表情を真剣な物へと変えた。

「誰？」

「マザリーニです。新たな報告書類が届きましたので。」

「お入りなさい。」

若い代王様の戦いは、始まったばかりだった。

## 2人の時間（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに、2人の夜のシーンが中途半端なのはこの作品が18禁でないことと、作者がそういうの書くのダメなためです。

## 久しぶりの発見 上

ラ・ロシエールでの秘密会議から数日後ミライ、正確にはそこから3km西にある陸上部隊基地に新たなる戦力が搬入されていた。それには才人も立ち会っていた。

さて、義勇軍で自動車やトラックを活用していることはこれまで何回か記してきたが、実際のところその数はそれほど多くはなかった。なにせ輸送手段が月1回、しかもたった4日間だけの新月しかないため、いくら分解して運ぶと言ってもその量はタカが知れている。

そのため、現在に至るも義勇軍が保有している車両はジープ・トラックを総計してもたったの50両強である。もちろん、これだけではとてもではないが需要を満たせるはずが無い。定数を保っていたのは、輸送が比較的簡単なバイクやサイドカーのみだった。

一応最近になってトリスティンとアルビオンでは鉄道の整備が始まっている。しかしながら、開通した路線網は現在のところ総延長50km程度で、自由自在に部隊を移動できる状況には程遠い。

部隊の迅速展開の意味からも車両の整備は必要不可欠であった。そこで義勇軍幹部らの目に留まったのが、既にある程度の工業力を持っているロマノフ公国であった。同国の技術レベルなら、多少の技術供与をすれば第二次大戦時代の車両を生産するのは可能であった。現に同国では自動車は少ないながらも生産を行っていたし、同様の経緯で43式装甲車が発注されていた。

義勇軍から技術供与を受けてロマノフ公国に発注された自動車は、



第二次大戦時に連合国で大活躍したアメリカのウィリアムスMBジープと、GMCトラック、そしてM3A1ハーフトラックだった。

これらの車両はいずれも使い勝手が良く、頑丈であり、さらに整備性も良かった。そのためこれらは整備能力が弱体で、なおかつ悪路の多いハルケギニアで使うには必要不可欠なものだった。

これらの車両は、ロマノフ公国に存在する自動車会社に分散されて発注されたが、それと同時に先ほども書いたが地球製の工業機械や、高い効率の生産方法と言った技術も同様に供与されている。

機械は倒産した会社から買い取った格安の中古品、生産方法も地球で見れば何十年前も前に確立された方法であるが、ロマノフ側からしてみれば泣いて喜べる程の優秀な機械であり、先進的な手法だった。もちろん、ロマノフのトリステインへ対する高感度は上がっている。

こうした事が、後にロマノフ公国をトリステイン側としてハルケギニア戦役に参戦させる遠因となるのだが、この時点でそれを知る者はいなかった。

とにかく、こうして義勇軍は車両を安定供給してくれる相手を作ったわけである。車両の義勇軍に対する納入は既に3ヶ月前から始まっている。既に設計図が存在していただけに、短期間で生産、引渡しにこぎつけることが出来た。

この日もラ・ロシエールで陸揚げされ、自走と鉄道によって運ばれてきたジープとトラック、そしてハーフトラックが基地内にそのエンジン音を轟かせていた。

これらの車両は配備されると一端教習用車両となり、大急ぎで運転手の養成に使われる。運転や整備を行える人間が多いことに越したことは無いのだ。

しかしながら、この光景は既に3ヶ月前から定期的に見られるもので、今さら珍しい物ではない。実は才人がわざわざ見に来た新戦力とは別のものであった。

さて、義勇軍の情報機関である『トウ機関』ではハルケギニアに散らばる地球製兵器の回収にあたっている。そのおかげでこれまでに多数の銃やロケット砲の類が集められている。

だが、飛行機やヘリコプター、戦車や装甲車と言った大型の物は発見しても容易に運べる物ではなかった。トリステイン国内ならそれも可能だが、他国では絶対に警戒されてしまい不可能だ。ところが今回、トリステイン王国のお隣の小国、グルテンホルフ公国内で見つかった兵器の輸送が可能となった。

これは一体どういうことかというところ、つい先日才人が魔法学院を訪れた際に、留学中のグルテンホルフ大公家の娘、ベアトリスの護衛である空中装甲騎士団を演習名目でボコボコにした。演習を仕掛けたのはベアトリスの方であったから、当然彼女としてはこの一件を闇に葬りたかったことだろう。

しかしながら、そう上手くは行かなかった。事情はどうあれ、才人が外国の軍隊と演習を行い、銃弾を消費したのだから義勇軍の幹部、この場合父親の才助司令官の耳に一件が報告される。当然外交問題に発展する必要があるので、さらにトリステイン王政府のルイズやマザリー二枢機卿に報告された。

才人が自分の身分を大公家の娘とは言え、口外したことは問題であり彼はルイズや才助からこっぴどく叱られるわけだが、その一方でルイズからすれば生意気な小国の鼻をへし折ってくれたのだから嬉しいわけだ。しかも、かつこのゆする材料を得たのだから尚更だった。

そんな訳で、これ以後ルイズはグルテンホルフ公国に対して非常に高圧的な態度を採った。もっとも、マザリーニの教えを受けて恨みを買わないようにそれなりの飴を与えるよう心がけたため、後のハルケギニア戦役で敵方に回られるようなことはなかった。

ちなみにこうしたやりとりは公式記録には残らず、数十年後にルイズや才人が回顧録を書いて初めて歴史となるのであるが、それはまた別の話だ。

とにかく、グルテンホルフ公国に対して強く出られるようになったおかげで、同国内で発見されていた武器をトリステインの義勇軍が引き取り、運び込むことが出来たのだ。

「へえ、これがM51「スーパー・シャーマン」ですか。」

今回運び込まれた戦車を見て、才人が言った。

「ああ、間違いないね。車内からはヘブライ語の文字書きが見つかったし、大分汚れてはいるけど砲塔にダビテの星が描かれている。間違いなくこれはイスラエル軍の戦車だよ。」

才人の隣に立つて言うのは、最近進級した戦車隊隊長の長田中佐だった。彼は今回発見されたこの戦車に対して、大いに満足していた。

今回発見されたM51戦車は、アメリカの傑作戦車であるM4「シャーマン」の派生型の1つだ。建国当時のイスラエルは、周辺のイスラム諸国を圧倒する軍事力を備えるために、金に物を言わせて様々な武器を買い込んだ。「シャーマン」もその1つだった。

ただし、イスラエル軍の面白いところはこの戦車をその後も改造しながら30年近くも運用し続けたことだ。そのために、俗に言う魔改造戦車と呼ばれる多数の派生戦車が誕生した。M51の場合は長砲身の105mm砲を積んだタイプだ。そしてこの戦車は世代的には2世代も違うソ連製のT62やT55戦車と戦った。

そのM51がグルテンホルフの田舎から発見されたわけだ。現地の村人の話によれば、これが現れたのは7年前のことで、現れた時点で既に無人だったという。どうやら燃料切れで戦場に遺棄された物が何らかの理由で飛ばされたらしい。

発見された時から義勇軍では回収を考えていたわけだが、ようやく先日王室からお墨付きが出たので、義勇軍から早速何名かが現地に赴き、回収してきたわけだ。

調査の結果、『固定化』の魔法こそ掛かっていなかったが、村人が筵を掛けてくれたおかげで、エンジンや車体等に致命的な損傷はなく、また主砲や機銃の弾薬も残っていたため、戦車部隊の付属品として使うこととなった。

これまで装甲車ばかり配備されて、どこか物足りなさを感じていた長田少佐にとって、1台だけとはいえまともな戦車が手に入ったことは喜ばしいことであつた。

「この105mm砲さえあれば、T62レベルの戦車が現れても大丈夫だよ！」

そう言つて彼は笑つたが、戦車がいるはずも無いこの世界じゃ活躍の機会なんてそう簡単にはないんじゃないかと才人は思った。

しかしながら、この戦車は実際に数カ月後にはかつてのドイツ軍のライバル戦車と一騎打ちをすることになるのだが、神ならぬ才人にはこの時点でそれを予測できるはずが無かつた。

それから才人は、長田少佐と2、3のことを会話し、M51を簡単に見ると、もう1つの方を見に行くことにした。実は今回持ち込まれたものは1つだけではなかつた。

もう1つの方は、空に関連する物だったので、3km離れた航空隊基地に持ち込まれていた。才人はバイクに乗り込むと、陸上部隊の基地を出て今度は飛行場へと向かつた。

## 久しぶりの発見 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

テストがようやく終わりました。まだレポートや帰省でのごたごたしますが、多分更新ペースは上がると思います。

## 久しぶりの発見 下

飛行隊基地に移動した才人は、グルテンホルフから持ち込まれた機体を見るために、一番端の格納庫まで歩いて行かなければならなかった。お目当ての格納庫に着くと、アルビオンからやってきたUH60Jのパイロットである山田明雄中佐が才人を出迎えた。

「やあ平賀中佐、久しぶり。」

「お久しぶりです山田中佐。」

2人は互いに敬礼をした。義勇軍の軍人になって1年以上が経っているため、才人の軍人としての仕草は生粋の人間と同レベルの違和感のない物になっていた。

「ここへ来たつてことは、グルテンホルフから持ち込まれたやつと才吉司令官が新たに持ち込んだやつを見に来たんだね。」

「はい。今日は戦闘機隊の仕事はないんで。王室連絡将校の任務も、夕方王宮へ行けば良いからそれまではフリーなんです。」

すると、明雄は如何にも羨ましそうな表情をして言った。

「そうかい。羨ましいな。こっちなんかたった1機のヘリで、しかも清水大佐がずっと地球へ帰ってたもんだから本当に忙しくてね。おちおちデートする暇もなかったよ。」

現在『東方義勇軍』に在籍しているヘリコプターは清水大佐と山田中佐が乗ってきたUH60Jヘリ1機だけである。固定化の魔法

を掛けたので整備に掛かる手間は大幅省けているのだが、それでも使い勝手の良さ、特に垂直離着陸可能で10人以上の人間を乗せられることから重宝され、出勤回数はやたら多かった。

そんな状況なのに、2人しかいないパイロットの内清水大佐は発見された戦闘ヘリ「うみどり」の修理と改装のために地球へ戻っていたため、最初の頃は彼は速成教育したパイロットと共に飛ぶ羽目になった。

さすがに才吉や才助もヤバイと思ったのか、すぐに地球からヘリパイロットをスカウトして来たがそれもたった1人だけであったので、ヘビローテーションであることには変わりなかった。その後一人増えたが、それでも正直キツイ。

「けど、それももうすぐ改善されるんでしょ？」

「ああ、清水大佐も戻ってきたし。練習用の機体と新たな機体も揃ったからね。最低でもこれまでのようなことはなくなると思う。」

「マチルダさんの時間も増えますね。」

才人が冗談めかして言うと、明雄は才人の言葉をはぐらかすように笑った。

「ハハハ・・・とにかく、機体見るんだろ？」

「はい。」

2人は立ち話を切り上げ、格納庫の中へと入った。現在義勇軍が使っている航空機用格納庫は、基本的にミライやホープのような基



幹基地であれば共通のかまぼこ型をしている。その大きさは単発戦闘機なら3〜4機、双発機なら1〜2機程度入るように設計されている。

今回才人が入った格納庫には、4機の機体が置かれていた。前に2機、後ろに2機が並ぶ形となっている。明雄はまず一番近い所にある機体に才人を案内した。

「これが今回グルテンホルフから持ち込まれたUH-1Hだよ。」

そう言って彼は迷彩色に塗装された機体を軽く叩いた。

UH-1Hはベトナム戦争で大活躍したことで有名な軍用ヘリだ。性能的にはUH-60よりも劣るが、量産性などは勝っている。現在も日本の自衛隊を始めとする各国軍隊で多数が運用されている。

それが今回グルテンホルフの寒村から発見された。調査の結果機体の状態も良好であったため、『東方義勇軍』が回収する所となった。

「一体これどこですか？乗員は？」

才人としてはそれが気になる所だった。

「残念だが乗員はいなかった。現地からの報告でも乗員と一緒に飛んできた形跡はなかったから、多分機体だけ飛ばされてきたんだろうね。ただ機体のマークや操縦機器から見て1970年代前後、おそらくベトナム戦争で使われたやつだろうな。機内からはM16やM72ロケットランチャーも出てきたし。」

「なるほど。それで、飛ばせるんですか？」

「見たところ燃料も残っているし、それに『固定化』の魔法は掛かっていなかったけど、現れたのはここ最近らしいから、腐食もほとんど進んでいない。整備すれば直ぐにでも飛べるよ。」

「じゃあ今度の戦争には間に合うんですね。」

才人が聞くと、明雄が頷く。

「ああ、多分こいつはそのままトリスティン方面軍に配備されるだろうから、友澤中尉あたりは喜ぶんじゃないかな？ヘリって言ったらやっぱり敵地に潜入する特殊部隊を運ぶのが絵になるからね。」

「もしかしたら、ロケット弾を積んで地上攻撃に使われるかもしれませんよ。」

2人は機体を見ながら、これがどのように使われるか話し合った。しかしながら、その予想は結局ことごとく外れることになる。まさか、戦争が始まって直ぐの仕事が避難民の救出と輸送になるなど、この時点では2人には予想出来なかった。何事も始まらなければどんなことが起こるかわからないのだ。

続いて2人はその隣に置かれた機体の側へと移動する。その機体はUH1Hに比べて遥かに小さな小型ヘリだった。

「OH6ですか。」

そこに置かれていたのは、やはり陸上自衛隊でも使われている小型観測任務用のOH6型ヘリだった。

「これは訓練任務に充当する予定だよ。けど、確かこれを手に入れたのは君のお父さんらしいけど、自衛隊の機体なんか一体どこから手に入れたんだろうね？」

そう言って明雄は首をかしげた。彼の言うとおり、今回ここに持ち込まれたのは才助が地球の自衛隊で使われていたのを持ち込んだ物だった。現に機体には『陸上自衛隊』と黒い文字で書き込まれていた。

「あの人たち（才吉と才助）の人脈、息子である俺にも全くわかりません。本当に一体どうやって武器を手に入れてくるんだろう？」

才人も首を傾げた。ただそんな彼でもわかっていることは1つだけあった。それは自分の親や曾祖父がやっていることは、決して普通に人に話せるようなことではないと。

「まあ、それ以上勘繰ると何か人として越えちゃいけないような一線を越えてしまうような気がするから、俺としてはこれ以上聞かないことにするよ。」

「俺もそれが良いと思います。」

明雄の言葉に、才人も頷いた。ちなみに、才人がその真実を知るのは随分と後のことだ。

「じゃあ、気を取り直して次の機体見に行こうか。」

「はい。」

才人が次に見せられたのは、やはり地球から持ち込まれたベル社のヘリコプターだった。ただし、こちらは青と白で塗装された海上保安庁の物だった。海自・陸自・空自さらには海上保安庁の装備まで一体どのようにして手に入れたのか本当に気になるところであったが、2人はそのことに関しては一切スルーして、とりあえず機体が見えることだけを確認した。

ちなみにこの機体は、後に塗装を迷彩色に塗り直してUHHと共通運用されることになる。そして最後の機体は、才人たちがこれまでに待ち焦がれていた機体だった。

「ようやく修理が完了したんですね。」

「ああ、こいつはそんじょそらのヘリとは段違いだ。上手く使えば、「アパッチ」以上の性能を発揮するぞ。」

彼らが今見ているのは、ようやく修理が完了してこちらに運ばれてきた偏向翼機の「うみどり」だ。発見時は前席がベイルアウトされ、さらに機種に搭載されているバルカン砲の回路が断線していたが、現在は完全に修理されて戦闘可能となっている。

「幸い射撃管制システムや操縦システムには異常がなかったからね。もしダメになっていたら再戦力化は望めなかったよ。」

「元は艦載機でしたけど、これからはどう使う予定なんですか？」

「爆弾倉がついているから爆撃も出来るし、バルカン砲が付いているから爆撃機ぐらいなら空戦も可能だと思うよ。まあ、清水大佐と一緒にまた考えるよ。」

この時点において、彼らにとって未知の機体である偏向翼機の運用方針はしっかりと固まっていなかった。

「そうですか。そう言えば、今日はその清水大佐はいないんですか？」

「うん、今日は非番で、こいつの試験飛行も明日の予定だから。ミライの街にでも遊びに行っているんじゃないかな？ 才人君もどうだい？ 俺も昼からはアルビオンから来た部下たちと一緒にミライへ出掛けるんだ。だから夕方まで一緒にどうだい？」

しかし、才人はその誘いを断った。

「ありがとうございます。けど、今回は遠慮しておきます。酔って王宮に行くわけには行きませんか。」

「そうか。それは残念だな。まあ、またの機会があったら是非とも来てくれ。」

「そうします。それから、ミライで飲むなら『魅惑の妖精亭』が一番人気ですよ。」

「ああ、アルビオン方面軍にもその噂は轟いているよ。なんでも、戦闘機隊に所属しているシエスタっていう娘が店長なんだろ。ウエイトレスも可愛い娘ばかりって聞くし。」

「ええ、ただしあんまり羽目を外さないでくださいよ。間違いを起こすと、彼女の旦那の菅野中佐の鉄拳制裁が待っていますから。それに山田さんの場合は、マチルダさんのゴーレムの攻撃も有り得ますからね。」

すると、明雄はまたも苦笑いした。

「ああ、よく肝に銘じておくよ。それじゃあ、お互い今後ともよろしく。」

「ええ。」

2人は再び敬礼をして、わかれた。

戦争の足音はひたひたと近付いていたが、それでも義勇軍の隊員たちは2人のように、普段と変わらぬ日々を送っていた。しかし、それももう間もなく終わることとなる。

## 久しぶりの発見 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 運命の開戦に向けて

アルビオン解放戦争から11カ月が経ったこの月は、才人ら『東方義勇軍』にとって色々な出来事が起きた月となった。まずアルビオン王国のアンリエッタ王妃がハルケギニアの王族としては初めて、親善特使としてロマノフ公国へ向かい、その護衛を義勇軍も含む艦隊が行っている。

この特使派遣は、日増しに親密になるトアロ3国間の友好を王室外交という形で改めて確認するために行われた。アンリエッタが赴いたのは、彼女がトリステイン出身であり、性格的にも相手に対して良い印象を与えるだろうという期待からであった。

ちなみに、この期待は大当たりしてロマノフ公国政府・国民のアルビオンに対する好感度を上げることに成功した。またアンリエッタ自身、アナスタシア女王と友情を築くことになるのだが、それは別の話だ。

一方対照的にガリア王国とトリステイン王国の間は相変わらずギクシャクしており、国境線付近では小競り合いが日常茶飯事となっていた。また、数は少なかったがガリア国内に現れた枢軸空軍も動き出したようで、時折飛行機らしき物が偵察飛行を行う姿が報告された。

いよいよガリアとの戦争を近しと見た義勇軍幹部陣は、王室に対して警戒を強めるよう要請すると共に、アルビオン方面軍の一部戦力をトリステイン方面軍へ抽出することを決めた。その戦力は歩兵1個小隊90名、砲兵40名、補給部隊120名、装甲車12両と乗員・整備兵、そして戦爆連合10機の航空部隊（パイロット並び



に整備兵）であつた。

アルビオン防衛の観点から兵力の抽出は最低限に抑えられ、増援部隊は全体的に見れば小さな戦力であつた。しかし、歩兵は葛西豊中佐率いる精鋭であつたし、その他の部隊も練度の高い兵士で固められた選りすぐりの部隊であつた。

アルビオンからの増援部隊は、ミライ基地に到着すると早速戦場として想定される地域に関する勉強や、他部隊との演習を開始した。もちろんトリステイン方面軍もそれに負けないとばかりに、以前にも増して厳しい訓練を行うようになった。

またこの頃、同様に戦争が近づいたことを受けてアニエス少佐率いる銃士隊との合同訓練の回数も飛躍的に増加している。彼女らは一行に古い体制から脱却しない王軍に見切りをつけて、義勇軍こそパートナーとしていた。それはヴァリエール公爵領のケンプ大隊も同じであつた。

そんな中で、この少し前から合同訓練を行うようになったのが魔法学院の生徒の中から志願者を中心に編成された水霊騎士隊の面々であつた。設立当初は学院内での自主訓練や、親の伝を辿って頼んだ王軍に指導してもらうなどしていたが、地球に行つた経験があるギーシュやマリコルヌが中心となつて提案したことで、義勇軍との合同訓練が実現した。

さて、トリステインの貴族というのは保守的でプライドが強い人たちが多数派である。だからこそ義勇軍と距離を置こうとする人たちが多い。そんな人たちの予備軍たる魔法学院の生徒であるから、当然水霊騎士隊の隊員の中にも義勇軍を見下す人間はいた。これまでの才人らの活躍を見ても、認めたくない人は頑として現実を認め

ようとはしなかった。

しかしながら、実際に義勇軍と合同演習をして完膚なきまでに叩かれればそれなりに影響は出るというものだ。特に指揮官であるギーシュや副隊長で聡明なレイナルと言った幹部陣が義勇軍の実力を冷静に評価すれば尚更である。最初こそ、メイジは杖のみで戦うと言っていた隊員の多くも、渋々ながら訓練を通してその威力を実感し、小銃や拳銃、最終的には無反動砲などの供与と訓練を受けている。

ちなみに、この水霊騎士隊の面々の中で射撃が上手かった者は、義勇軍の能力証明射手と同じく狙撃部隊による簡単な訓練を受けている。その中にマリコルヌの姿があったことに、才人やギーシュは驚きを隠せなかった。

ところで、メイジは杖のみで戦い、魔法以外の方法で倒されるのは不名誉というハルケギニアに長く根付いてきた慣習は、この1ヵ月後に始まるハルケギニア戦役で完全に吹き飛ぶこととなる。

こうした軍事面での動きとともに、民生面での動きも当然あった。特に義勇軍基地に隣接しているミライでは、街の周りや一部の建物の屋上に対空砲の砲座や、射撃指揮所を設置する工事が急ピッチで進んでいた。これはガリアにつくであろう枢軸国空軍機の爆撃を怖れての処置であった。

ミライの市街地に建設された建物の内、役所や学校と言った公共の建物はあらかじめ屋上の強度が強化されており、防空壕や備蓄倉庫として転用できるように地下室も付随して作られていた。また、最近になって稼動した発電所が機能を停止しても良いように自家発電機も設置されていた。

住民の避難マニュアルや、難民の受け入れ体制に関するマニュアルも作成され、食料や医薬品、生活に最低限必要な日用品の備蓄も進められていた。こうした備蓄品の中には缶詰や保存食など地球製の製品も混ぜられていた。

これら民生面での戦争対策の内、防空陣地や防空壕、避難マニュアル等は最終的に使わずに済むこととなるが、備蓄物資や避難所等には開戦に際して大いに義勇軍、ひいてはトリステイン国民を助けることとなる。

そんな感じで戦争に対する備えが着々と進んでいく中、才人の周りでも大きな動きが起きていた。それは新型戦闘機への機種転換だった。

さて、以前安価で生産性が高い「バッファロー」戦闘機が開発されたが、その一方で重武装、高速の戦闘機も平行して桜花飛行機で開発されていた。こちらの機体もようやくロールアウトしたのであった。

試製44式1型、OS3型戦闘機がそれである。才人は王室連絡将校の任務があったために直接引き取りに行くことは出来なかったが、王室からミライの飛行場に戻って機体を見た途端見惚れてしまった。

「格好良いですね。なんかとても綺麗です。」

才人は桜花飛行機の佐々木技師に向かって機体を見るなりそう言った。

「そう言っただけるところとしても作ったかいたというものです。」

格納庫の前に引き出された新型戦闘機は、以前才人が空輸した「バッファロー」より一回り以上大きく、涙滴形のキャノピーや長い機種、さらには二重反転プロペラが強烈な印象を放っていた。

「性能はどうなんですか？外見が良くてもちゃんと飛んでくれなきゃ話になりませんから。」

「御安心を。既に午前中に菅野中佐が試験飛行を行っています。その結果最高速度は720km。急降下速度は850kmを記録しています。操縦性能も優秀とお墨付きを貰っています。」  
「バッファロー」のように大量生産を望めるような機体ではありませんが、第二次大戦中盤の戦闘機なら、1機で3〜4機は軽々相手に出来ますよ。」

佐々木が自信満々で言う。

「へえ、けど大量生産は出来ないんですよ。」

「まあ、その点については仕方がないよ。もともとそういうコンセプトの機体だから。」

この世界での仮想敵は主に竜やグリフォンと言った幻獣である。ガリア国内に枢軸空軍が現れるというアクシデントがなければ、こ

の機体は試験機の域を出なかった可能性が高い。

ちなみに具体的な性能は以下の通りだ。

試製44式1型 OS3型戦闘機

全長11m 全幅12.8m 自重3800kg

速力720km 航続力 最大で3600km(最大)

武装20mm機関銃2基 爆装1.5t(最大)

12.7mm機関銃4基

対空・対艦ロケット弾8発

発動機 ユモ213改型 液冷2500馬力

防弾装備、自動空戦フラップ、自動脱出装置、小型レーダー搭載。  
艦上戦闘機としては運用不可。発動機はターボプロップ式への換装  
も考慮されている。

「それで、こいつは何機あるんですか？」

「今のところは4機だけだ。「赤とんぼ」をラ・ロシエールに造られた航空工廠でのノックダウン生産にして、本社工場の生産力を上げようとしているんだけど、他にも生産している機体はあるから、

月産4機が精一杯だね。」

「それじゃあ、戦争までに10機あるかないかですか。」

「そうなるだろうね。それに義勇軍では初めての液冷エンジンだから、整備兵が完熟していない。稼働率はゼロ戦や「バツファロー」に比べて大きく落ちると思うよ。」

その言葉に、才人はわかっていたとはいえ少しばかり落胆した。

「まあ、飛びさえすれば最強の戦闘機になることは間違いないから。」

佐々木が慰めるように言った。

「それじゃあ、早速ですけど飛んでみて良いですか？」

「ああ。それは構わないよ。むしろ今後のデータ収集のために、なるべく多くの人間に乗ってもらって感想を聞きたい。よろしく頼むよ。」

それからトントン拍子に試験飛行の準備がなされ、才人はこの新型戦闘機の試験飛行を行う。そしてその驚異的な性能を実際に体感することで、先ほどの落胆は消え去り、才人はこの戦闘機に心底惚れ込むこととなる。

**運命の開戦に向けて（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 眼下の敵 1

才人が新型戦闘機を受け取った数日後、義勇軍の戦いは本格的にスタートした。その日『東方義勇軍』所属の駆逐艦「双月」は、ラ・ロシェールの西方100kmの海域を同じく義勇軍所属の駆逐艦「ゆきかぜ」と共に航行中であつた。

地球のアメリカ海軍が第二次大戦中に建造したPF艦を元にしてロマノフ公国で建造された同艦は、この時点において引き渡されてから2週間しか経っていない新鋭ではあるが、練度未熟艦であつたため早急な戦力化が求められていた。だから、ロマノフから引き渡されて以後連日、それこそ月月火水木金金の意気込みで猛訓練中だつた。

ところで、トリステインとアルビオン（厳密にはハルケギニア）で本格的な外洋海軍がスタートしたのは、ほんの1年ちょっと前のことである。しかもその時は新規配属された兵士に蒸気船に対応する訓練を施していた。ところが、急激な情勢の変化で新たに重油を燃料とする艦艇の乗員を養成する必要性が生じた。

1年前、トリステインとアルビオンでは海洋の防衛圏と航路拡大のために海軍士官学校と商船学校が新たに作られた。この内商船学校の方は、ハルケギニアの工廠でしばらくは蒸気機関搭載の商船が建造されることから教育には別段問題はなかったが、海軍士官学校の方では艦艇の性能が短期間でこつとも変わったために、当然教育カリキュラム（特に機関科）が定まらず、やむなく入校者全てが水兵志願者と同じく簡単な講習のみを受けただけで艦艇に乗り組んでの実地訓練を行い、士官教育は戦争終了後という有り得ない事態に陥っている。



そのため、本来士官学校で講義を受けているような若く優秀な人間が、水兵と共に厳しい任務に従事しているという奇妙な光景がこの頃は良く見られた。

また、この時点においてトリステイン海軍とアルビオン海軍は併せて4隻の巡洋艦と6隻の駆逐艦を保有していたが、いずれもエンジンは蒸気機関であった。加えてこれまでまともな海軍を両国が保有しておらず、必要な人材がいなかったということもあって、教育面も含めて運用は全て『東方義勇軍』に委託されていた。

運用を委託された『東方義勇軍』では、ロマノフ公国への生産委託と、ハルケギニアにおける技術力の向上で、今後は重油専焼方式の軍艦のみを配備できると判断し、上記の蒸気軍艦は短期間で退役させ、乗員は全てシフトすることを決定していた。このため、数年後には蒸気機関を先に実習した将兵たちが、最初から重油専焼式軍艦の教育を受けなおす羽目に陥ることとなる。

そんなゴタゴタだらけのため、トリステインとアルビオン海軍（正確には義勇軍海上部隊）の前途は多難であったが、だからといって戦争が彼らに何の影響も与えないということは、天地がひっくり返ってもないのであった。

この日「双月」は「ゆきかぜ」と共に洋上での運動と、砲撃訓練を行っていた。乗員が慣れない「双月」は「ゆきかぜ」をさぞや困らせていそうであったが、現実はそうでもなかった。確かに熟練乗員ばかりの「ゆきかぜ」程切れのある動きは出来ないが、ひどいというレベルではなかった。

実は義勇軍では新鋭艦が配備されると、乗員の半分から3分の1

を既存の艦艇や地球からスカウトしてきた人間で充てていた。例えば、「双月」の場合全乗員の数は180名であったが、この内70名は「にぎつ丸」、「おおよど」、「ゆきかぜ」、「さかき」、「かえで」、「第二櫻丸」、「栄光丸」等の既存の艦船から抽出した乗員であり、20名は地球からスカウトしてきた人間であった。

艦長の梅林一穂中佐も元海上自衛隊の退役3佐で、4ヶ月前にハルケギニアにやってきた才吉と面識のあった70歳である。妻に先立たれ、子供は独立して1人のんびりと余生を過ごしていた所をスカウトされた。

本来なら既に船に乗るような歳ではなく、当初は陸の司令官職、もしくは参謀職に就く予定であった。現に最初はハシラ島の艦隊司令部で参謀職をしていた。しかしながら、本人の強い希望によりこの度めでたく艦長職となった。

叩き上げの人間で、海上自衛隊の創世記に使われたPFや「はるかぜ」級の乗り組み経験もある超ベテランである。10年前に護衛艦「ゆうばり」艦長を最後に退役し、長らく海からは離れていたが短期間でハルケギニアの海に慣れてしまったという凄腕だ。ただし、普段は温和で口癖は「まあ良かるう。」であった。

そして彼の指揮する「双月」と乗員達は、今まさに戦闘に挑まんとしていた。

訓練はいつもどおり猛烈を極めた。最低限の休み時間のみを取り、後はひたすらに艦の運動や、戦闘配置、砲撃、対潜戦の訓練を「ゆきかぜ」とともに延々と繰り返した。

昼下がり「双月」の小さな艦橋では、梅林が艦長席に腰を降ろしつつ指揮を執っていた。そんな彼の元に報告がもたらされる。

「艦長、ハシラ島の艦隊司令部から通信が入っています。」

「うん!？」

彼は通信兵が持ってきた電文に目を通した。

「何か起きたのですか？」

梅林に声を掛けるのは、副長兼航海長の榊圭吾大尉だ。彼は元軽巡洋艦「おおよど」の航海士の3尉で、「双月」の竣工と共に異動してきた人間である。歳は34歳であるから、梅林とは親と子ほどの歳の差がある。もっとも、こうした光景は義勇軍内部では決して珍しい物ではないが。

「ああ、航海長。「呂501」が例の潜水艦を見失ったらしい。」

彼の言う例の潜水艦とは、最近になってその存在が確認されたフランス海軍潜水艦「シエルクーフ」のことだ。ガリア艦隊本拠地であるサン・マロンに停泊している姿を確認されたため、義勇軍ではガリア軍側の艦艇として使用される恐れ大として警戒していた。

そして昨日、そのサン・マロン沖合で偵察行動を実施中だった「呂501」潜水艦はサン・マロンから出撃するスクリュウ推進の潜水艦を確認し、追跡を続けていた。

「呂501」は抜本的とまでは行かないが、これまでに数回の改修

を行っている。その一つが地球から持ち込んだ水測兵器の搭載で、ソナーなどは以前積んでいたものとは比べ物にならないほど高性能な物を搭載していた。

それらを使って、「呂501」は「シエルクーフ」を追跡していたのであるが、どうやら撒かれたようだ。

「情報では敵は東へ向かっていたらしいから、もしかしたら外洋諸島との交通線を攻撃するかもしれないぞ。ガリアとトリステインは今や一触即発と聞くからな。艦隊司令部からも警戒レベル2の発令命令が来ている。」

「それじゃあ実戦もありえる訳ですね。」

「ああ。そうなるな。・・・とにかく、総員戦闘配置！」

「総員戦闘配置！！！」

梅林の命令がストップウォッチを持った榊によって復唱されると、艦内にけたたましいベルが鳴り響き、乗員達が慌てて動き始める。それまで午前中の演習の疲れを癒すべく休んでいた乗員達は、ヘルメットとライフジャケットをつけ、それぞれの持ち場へと走る。

しかし、不慣れな乗員は通路を間違えたり、途中で迷ったりする。そのため配置完了の報告がなかなか入らない。2分ほどしてようやく入ってくる。

「1番砲配置よし！！！」

「レーダー室。配置よし！！！」

「応急対策班位置に付きました！！いつでも出動可能です！！」

「2番機関砲配置よし！！」

「こちらソナー室室長大橋少尉、全員配置完了！！機器正常！！」

「3番砲配置よし！！」

「爆雷班配置よし！！」

「ボイラー室全員配置に付きました！！」

「こちら機関室全員配置に付きました。エンジン正常、最高速力24ノット発揮可能です。」

最後の部署から報告が届いた所で、榊がストップウォッチを止めた。

「総員配置完了まで4分ジャストです。大分早くなりましたが、せめて3分にしたいところです。」

しかめっ面をする榊に対して、梅林はおっとりと言う。

「まあ良からう。午前中の4分5秒よりは5秒も早くなっている。それに海戦をするわけじゃない。あくまで潜水艦への警戒配置だ。」

「はあ・・・」

「まあ、それでも気を引き締めなければいけないのは確かだな。マ

イクを全艦に。」

梅林は手元にあるマイクを取った。

「達する。先ほど艦隊司令部より入電があり、昨日からその存在が確認された敵潜水艦がこの方面へ現れる可能性がある」と伝えてきた。よって今後実戦もありえると思って欲しい。敵はいつどこから攻撃してくるかわからない。対水上・水中への索敵を厳にし、気を引き締めて臨んで欲しい。以上だ。」

そして彼はマイクを置いた。

「「ゆきかぜ」からの信号はないか？」

「たつた今発光信号でありました。艦長の大内大佐からです。午後の演習予定は全て中止し、我々は付近海域の索敵任務につかんとす。よってこれ以後は、対潜陣形による行動を厳守とします。です。」

「わかった。これより本艦は「ゆきかぜ」の後方30度、距離500を維持する。航海長、操艦を任せる。」

「は！」

「双月」の初めての戦いが始まろうとしていた。

## 眼下の敵 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、今回の話は同名のアメリカ映画のパロディです。しかしながら、書いていて気づきました。潜水艦を捕捉したわけでもないのに、戦闘配置を命令する物かと。

読者の方から指摘され、今後はもっと細かい所に注意するべきと思った初っ端からこんな感じではいけませんよね？

そしてまた、これをその場しのぎの言い訳で言い繕う御都合主義に走ってしまう・・・いかな。

## 眼下の敵 2

演習を打ち切って、対潜警戒態勢に移行した「ゆきかぜ」と「双月」の2隻であったが、その後丸1日の間は何も起きなかった。なにしろ相手は姿が直接見えない潜水艦である。いつ現れるかわからないという緊張感を強いられるものの、こちらからは相手が上手いこと近付いてこない限り攻撃できないという厄介な敵なのだ。

また発見しても、撃沈するのは難しいというのが現実である。これが現代の地球なら対潜魚雷やアスロツク対潜ミサイル等、一定の距離を飛んで行き、なおかつ自動的に相手を追尾する便利な装備がある。しかしながら、「ゆきかぜ」と「双月」に搭載されているのは今のところ爆雷とヘッジホッグの2種類だけで、第二次大戦当時と何ら変わらない。

この2種類の兵器は、敵潜水艦を沈めるために直撃させるか、少なくともかなり至近で爆発させる必要がある。そのため、余程の幸運にでも恵まれない限り、何回も敵潜水艦に向けて発射する必要がある。

つまり辛抱強く繰り返さなければならない。第二次世界大戦期の対潜戦闘とはすぐに結果が出る水上砲撃や対空攻撃、対地攻撃とは全く次元の異なる戦闘だった。

せめて対潜用のヘリコプターが1機あればかなり楽な戦いを行えるのだが、ようやくトリステイン方面軍に1〜2機単位で配備されているような状況では夢のまた夢である。

そんなわけで、対潜警戒行動を採った2隻であったが、敵と出会



えるかは運次第である。むしろ、広い大海原で1隻の潜水艦に出会う確立などかなり低い。

だから最初は戦闘が行われるかもしれないと思って勇んで配置に付いた乗員たちも、その後中々敵が現れないことに、嫌気が差し始めた。艦長の梅林中佐もさすがに総員戦闘配置はやりすぎと思い、増員した見張りとソナー、さらに爆雷・ヘッジホッグ担当の兵士を除いて一端警戒配置へと戻した。

そして日が沈み夜が訪れさらに再び日が昇ったが、敵を捕捉したという情報は一行に入らなかった。夜間に何回か、海上に不審物を発見という報告が来たが、それらはいずれも直ぐに海上の漂流物を見間違えたものと判明している。

「やっぱりたった2隻の駆逐艦じゃ発見できませんね。」

朝食を済ませ、食後のコーヒを啜っていた航海長の榊大尉がボソツと言った。

「そりゃまあ、相手は海に潜る潜水艦だからね。本来ならこういう任務には空母か基地から発進する対潜哨戒機の援護が欲しい所だが、無い物強請りだよ。」

この時義勇軍の保有する2隻の空母の内「にぎつ丸」はロマノフ公国との間に運航されている貨物船団の護衛任務に就いており、また、もう1隻の「ブリシंगाメン」は技量未熟であるために、アイスランド沖で猛訓練中だった。基地航空隊にしても、まともな対潜兵器を積んでいる機体等ないから飛んでくるはずがなかった。

もつとも、だからといって義勇軍の幹部陣に対潜兵器の不備を責

める理由は誰にもない。何故ならこの世界で海中からの脅威となるのは、大概シーサーペントと呼ばれる海獣である。それらの場合非武装の船には脅威となるが、爆雷を搭載している艦艇がいるなら、威嚇で1〜2発投下すれば勝手に逃げていく。だからソノ・ブイ、対潜ロケット砲や誘導兵器等と言った高性能兵器は本来必要がない。だからこそ義勇軍ではその手の兵器については開発も、地球での購入も行つてこなかった。

そしていざ潜水艦が現れた時、そのツケは潜水艦を倒す前線の兵士に負わされるのだが、それでも彼らの場合はソナーについては最新鋭の物を積んでいるだけまだマシであった。

「艦長、このまま走り続けていても埒が開きませんよ。対潜兵器がないとはいえ、浮上している敵艦を見つけるぐらい出来るかもしれないから、ラ・ロシエールの航空隊に出動要請を試みたらどうですか？」

いい加減痺れを切らした榊が意見具申をした。

「そうだな。ソノ・ブイやMAD（磁気探知機）も積んでいない飛行機だが、相手もレーダーを搭載していない旧式だったはずだ。よろしい、早速やってくれ。ただし、本艦は「ゆきかぜ」の指揮下に入っているから、一旦「ゆきかぜ」の大内大佐に許可を取ってからだ。わかったか？」

「了解です。」

意見を受理された榊は、早速艦橋横の信号機を使って「ゆきかぜ」艦長の大内大佐にお伺いを立てた。すると、5分もしないうちに許可するという返信が来た。

それを確認すると、榊は無線室に連絡してラ・ロシエールの飛行場に駐留する航空部隊に向けて出動要請を出した。ちなみに、海上部隊と航空部隊では一応指揮系統は分断されているので、要請という形となる。

この要請を受けて、ラ・ロシエールの航空隊では早速ロケット弾と遅延信管付きの小型爆弾を装備した「バッファロー」と「ドーントレス」を4機ずつ出動させている。

この航空部隊は、「ゆきかぜ」と「双月」の出す特定周波数の電波に誘導されて、ラ・ロシエールから現場海域まで一直線に飛ぶことが出来た。

そして要請から2時間ほどして、戦隊上空に8機の航空機部隊がやってきた。2隻の乗員は自分たちを援護するために現れた彼らに向けて帽子を振る。これによって乗員の士気は多少なりとも回復した。

それから間もなくして、8機は「ゆきかぜ」からの無線通信によって付近の海面の哨戒を命令され（この時は戦隊の指揮下に入ったので命令）、それぞれ散らばると戦隊から少し離れた海上の索敵にあたった。

だが2時間経っても敵潜水艦発見の報告は入らず、戦隊は再び沈黙に包まれていた。

「やっぱりだめだったかな・・・」

梅林はボソツと呟くように言った。

「そうみたいです。どうやら上手く行かなかったようです。彼らには無駄足を踏ませてしまいましたね。そろそろ燃料もなくなる筈ですし。」

榊が腕時計を見ながら言った。

梅林も榊も、さらには「双月」の乗員も空振りかと諦めかけていたその時、突如として前方を走っていた「ゆきかぜ」が転舵すると、速度を上げて走り始めた。

「なんだ!？」

榊の疑問は、すぐに艦橋横の張り出しから「ゆきかぜ」を見ていた見張りの兵士の言葉で解けた。

「「ゆきかぜ」より信号。上空の味方機より敵潜水艦発見の報ありにつき、全速で向かわんとす。貴艦は持てるスピードで続行せよ!」

「見つけたか。よろしい、総員戦闘配置!!それから面舵一杯、機関全速!!」「ゆきかぜ」に続行せよ。あと無線室に、上空の航空機からの情報をリアルタイムで伝えるよう言え!」

「了解!!」

気だるい空気が一気に吹き飛び、艦内は再び喧騒に包まれる。命令を受けて操舵主は舵輪を一杯に右へ回し、また機関室とボイラー室ではエンジンを全開にするべく、新兵たちが慌しく動き、古参兵が叱咤する。

さらに、梅林は命令を矢継ぎ早に出す。

「対潜戦闘、ならびに水上砲撃戦用意！！」

この時目標の「シエルクーフ」を見つけたのは、最近になってアルビオン方面軍からトリステイン方面軍の増援として派遣されたマリー・スカルフスキー等兵曹の乗る「バッファロー」戦闘機だった。彼女は、「ゆきかぜ」からの要請を受けて、戦隊から見て3時方向、距離40km地点をグルグル回っていた。

そろそろ燃料計の針が気になりだした頃、彼女は水平線上に芥子粒のような影を見つけた。

「何かしら？」

気になった彼女は「ゆきかぜ」には通信せずに機体を降下させ、その正体を確認した。もしかしたら操業中の漁船かもしれない思ったからだ。

徐々に大きくなるその影を見て、彼女はそれが漁船ではない、もっと大きな船であることはわかった。しかも、ハルケギニアでは未だ数多い帆船でも、見慣れた義勇軍の艦艇でもなかった。

もしかしたら現在は友好国になっているロマノフ公国の艦艇かもしれないので、彼女は一旦その上空を通過した。そしてその結果そ

れが敵であることがわかった。なぜなら、彼女の機体が近付いた途端対空射撃をしてきたのである。

「敵だ!!」

彼女にとって幸運だったのは1発も被弾しなかったことと、そして既にアルビオン解放戦争で実戦を経験していたため比較的冷静でいられたことだった。彼女は機体を1回上昇させると、すぐに無線で「ゆきかぜ」に連絡した。

「こちらマリー1等兵曹、目標と思しき敵艦を発見!! 方位は戦隊より90度方向、距離は約50km。これより自衛行動として反撃します!!」

通信を終えると返事を待たずに彼女は反撃に移った。ロケット弾と機銃の安全装置を解除し、機体を降下させる。この時「シエルクーフ」は既に潜航をはじめており、その影はみるみる小さくなっていった。

それでも彼女は、照準機のご真ん中にその影を捕捉しようとする。

「発射用意!!... 撃て!!」

ボタンを押すと、直ぐに両翼に積まれた4発のロケット弾が炎と煙を吐いて飛んでいった。そしてそのままロケット弾は、既にほとんど沈んでしまった敵の至近の海上に着弾して炸裂した。

「どうかしら?」

機体を上昇させ、付近を旋回しながら戦果を確認しようとするが、

生憎と撃沈を示すようなものは何も見当たらなかった。

「だめだったみたいね。燃料ももうないし。」

燃料計を見ると、既に帰りの分しか残っていなかった。彼女は後ろ髪を引かれる想いでその場を離脱するしかなかった。

その後、彼女の仲間たちがさらにロケット弾や爆弾を付近の海上に叩き込んだが、撃沈は確認できず、戦いは駆逐艦戦隊に引き継がれた。

## 眼下の敵 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



### 眼下の敵 3

航空部隊による攻撃が不発で終わったために、以後の戦闘は「ゆきかぜ」と「双月」に任せられた。そして「ゆきかぜ」艦長であり、この時臨時戦隊司令官であつた大内賢治大佐はまず戦隊の分離を命じた。

これは最高速力が「ゆきかぜ」の35ノット（約65km）という高速であつたのに対して、「双月」では24ノット（44km）と低速であつたために、「ゆきかぜ」に追従できないからであつた。

「双月」の艦長である梅林中佐もこの命令を了承した。彼自身自分の艦の性能を良く理解していた。そして彼は「ゆきかぜ」と分離すると航海長の榊大尉に命令を下した。

「航海長、上空の航空隊より連絡のあつた敵艦の方位と針路から、こちらが先回りできる針路を計算してくれ。」

「わかりました艦長。」

命令を受けた榊は早速海図室で部下と共に計算を始めた。さらに梅林は無線室への電話を取る。

「無線室。」

「はい。」

「「ゆきかぜ」が伝えてくる情報を逐次艦橋に伝えてくれ。どんな些細な情報でも構わんど。」

「了解です。」

命令を出し終えると、彼は電話を置いた。

「さあ、鯨狩りの開始だ。」

梅林は大海原を眺めながら、そう言つて不敵な笑みを浮かべた。

水中にいる潜水艦は原子力潜水艦であれば動力を回し続けられる。しかしこれが第二次大戦期のディーゼルエンジン艦だと、水中ではバッテリーに切り替える必要がある。酸素を得ることの出来ない水中でエンジンを回すことは出来ないからだ。しかしバッテリーは電力の消耗が激しいから、水中での運動を極力抑えなければならない。

「ゆきかぜ」艦長の大内は、それを考慮して敵艦の水中速度を7ノットと仮定して、予測針路と位置を測っていた。

「最初の通報時点での距離は約50km。現在のスピードだとそこまで行くのに約45分だ。その間に敵潜水艦は約10kmを移動する。もし急激に針路を変えていなければ・・・ようし、50分後に音波探信を開始する。いいか、敵は水中からいつ、どのように攻撃を仕掛けてくるかわからないぞ、水上見張りとソナーは警戒を厳にしろ!!」

「了解!!」

大内艦長は「ゆきかぜ」とともに転移してきた海上自衛官で現在40歳。旧日本海軍の大尉でもあり、第二次大戦中は海防艦の艦長として船団護衛任務を行った経験を持っており、それゆえ潜水艦に対しては高い警戒心を持っていた。

また「ゆきかぜ」の場合は下級兵士や一部の士官にこそ新配置された人間が混じっているが、乗員の8割は転移してきた当時のままで、当然練度は高いし潜水艦に対する意識も大内と同程度か、少なくともハルケギニア人よりは高かった。

「こいつは俺たちが仕留める!!」

乗員たちはその意気込みで戦いに望もうとしていた。共に戦う「双月」が小型駆逐艦であり、練度未熟である分、自分たちがしつかりしなければいけないという気持ちも、俄然乗員たちのやる気を引き出していた。

そして50分後、予定通り「ゆきかぜ」はまず音波探信を開始した。音波探信というのは、艦の底に装備されたアクティブ・ソナー（探信儀）から音波を海中に向かって発信し、その反響から敵潜水艦の位置を割り出すという装置だ。ちなみに、海中の音を聞くソナーをパシップ・ソナー（聴音器）と言う。

これらソナーを扱うソナー室も艦底にあり、レシーバーを頭に付けたソナーマンたちが敵艦を耳で追う。彼らは自分の艦が出すエンジン音や波きり音の中に現れる敵艦のスクリューや、タンクの排水音を捉えるために神経を研ぎ澄ます。

ソナーが敵を探し始めると、その邪魔をしないように大内は艦を

少し減速させて雑音を出ないようにする。

一定の間隔を置いてピン（探信音）が発射され、敵艦を捉えようとする。しかしながら、敵艦らしい反響は中々捉えられない。

「水中の変温層にでも逃げ込んだかな？それともこちらが予想したよりも遠くへ逃げたかな？」

数分経つても発見できないため、大内は舌打ちしながら言った。彼の言う変温層とは、字のごとく海中にある水温が違う水の層のことだ。これがあると、敵潜水艦の反響が上手く捉えられなくなる。

「ゆきかぜ」の乗員たちは悶々と10分ほど待ったが、ようやくソナー室から明るい報告がもたらされた。

「艦長、敵艦の反響らしき物を捉えました。本艦の3時方向、距離は不明ですが反響の弱さから見ると少しばかり離れているようです。」

「わかった。取り舵45度、速力30ノットまで増速、前部ヘッジホッグ戦用意！」

大内の命令を受けて、ようやく出番の回ってきた乗員たちは表情を明るくして発射準備に取り掛かった。ヘッジホッグは第二次大戦中にイギリス海軍が開発した対潜兵器で、24発の小型爆雷を一斉に艦の前方に向けて発射する。発射された爆弾は円形に広がって着水、どれか1つでも爆発すれば残りも全て誘爆する仕掛けになっていた。

当時としては前向きに撃てることと、一気に多数の爆雷を投下で

きるといつ点から画期的な兵器であった。

間の回頭が終わり、敵潜水艦がいると思しき方向に艦首が向いたところで、大内は

再度速度を落としてソナーによる敵艦探知を行う。すると、今度はより高い反応を得られた。

「敵艦前方感度3、深度70m前後。速力は不明なれど距離は約1000m程度。」

「ようし、距離250mでヘッジホッグ発射だ!!」

「敵艦速力を上げました。さらに右へ回答している模様。」

「こちらも取り舵を当てて照準を修正しろ!!」

射程距離である250mに入るまで、照準の修正が続く。そして

「敵との距離、300m以内に入りました。直ぐ側です!!」

ソナー室からの連絡を受けて、大内は命じた。

「前部ヘッジホッグ一斉発射!!」

間髪をおかず、ボンボンという発射音を立ててヘッジホッグが発射された。空中を飛んでいった24個の弾は、そのまま狙った海面に着水した。

「どうだ!?!」

乗員たちが一斉に海面を眺める。すると、数秒後には一斉にその付近の海面が爆発した。ヘッジホッグの爆発である。

「やったか!？」

大内は海面が穏やかになるのを待つ。もし撃沈であれば破片や水に浮き上がるもの、さらには燃料の重油などが海面上に現れる。他の乗員たちも双眼鏡を受けて確認をする。

だが、それらしい物は一行に浮かんでこなかった。そしてソナー室から連絡が入る。

「艦長、敵は生きています。探信音を発射したところ反響が来ます。」

「逃がしたか。再攻撃用意!!」

大内は第二撃をかけようとしたが、それから間もなくともないう事態が発生した。

「こちらソナー室。高速推進器音を確認!!魚雷が発射された模様!!」

「何!？」

さらに見張り員が声を張り上げた。

「右舷70度に雷跡2!!至近!!」

「取り舵一杯!!機関全速!!」

どうやら敵艦はこちらの攻撃に対して、刺し違えるつもりで魚雷を発射したらしい。こうなるともう攻撃どころではない。自分たちを守るために行動しなければいけない。大内は絶叫するように命令を出した。

操舵主は舵輪を一杯に右へと回し、機関室では乗員がエンジンをフル出力、フル回転させようとする。

しかしながら、距離が近すぎた。そもそも発見した時点で300m程度しかなかったのである。これでは15秒もしないうちに当たる。

「ダメだ。間に合わん！総員衝撃に備えよ！！」

大内が言った直後、ゴーン！という音と弱い衝撃が艦艇から1回だけ響いてきた。

「うん？」

「なんだ！？」

一度は覚悟を決めた乗員たちは、爆発も何も起こらなかったのだから拍子抜けした。

「今の音は何だ！？すぐに確認しろ！！」

大内は直ぐに部下へ確認を取らせた。結果、すぐに何が起きたか判明した。

「魚雷の内1本は本艦の艦底を潜り抜けました。もう1本は命中しましたが不発です。浸水は起きていますが、艦を止めれば応急処置可能です。」

部下からの報告に、大内は安堵すると共に、しばらくは敵潜水艦を追えないことを悟った。速度を出せば魚雷によって出来た穴が拡大する恐れがあるからだ。

「わかった。機関停止、敵潜に注意しつつ修理作業に掛かれ。魚雷が爆発しないように細心の注意を払え！それから「双月」に本艦の現在位置と敵艦の針路を打電しろ。」

「了解です。」

部下が通信室へ行くのを見送り、艦橋の張り出にでた大内は呟いた。

「後は頼むぞ、「双月」。」

2分後、「双月」の艦橋に「ゆきかぜ」から届いた情報がもたらされた。

「「ゆきかぜ」は敵の反撃を受けて損傷、損害は大したことないが追跡が不可能となったため、以後は我々だけで追うことになったな。」



「敵も中々やりますね。」

榊が唸るように言った。

「ああ。こちらも本気で気を引き締めないと、今度は不発魚雷を浴びせられるだけじゃ済まないぞ。とにかく、「ゆきかぜ」がもたらした情報を元に我々は敵を搜索する。対潜警戒をより厳重にせよ！」

「「は！！」」

梅林の言葉に、その場にいた全員が力強く答えた。しかしながら、この後の展開は梅林が予想したものとは全く違う方向へ動くことになる。

### 眼下の敵 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 眼下の敵 4

「ゆきかぜ」からの通信を受けて、勇躍敵潜水艦との戦闘に挑まんとしていた「双月」であったが、何事も予期したように展開するとは限らない。それが自然の摂理というものである。

無電を受けてから20分ほどして、まずレーダーがそれを捉えた。ちなみに、ロマノフ公国では『東方義勇軍』の技術供与を受けて、その電子技術は1930年代後半程度にまで押し上げられたものの、レーダーを量産するまでには至っておらず、そのため『双月』に装備されたレーダーは地球の民間用品を持ち込んで設置した物である。

「こちらレーダー室です。」

「どうした？」

航海長の榊大尉がレーダー室との電話を取った。

「本艦の左30度方向に反応あり。距離は約30km、極めて感度強し。速力は10〜15ノット。」

レーダー室室長の富永中尉がそう報告してきた。直ぐに榊は表情を怪訝な物にした。

「何？漂流中の「ゆきかぜ」ではないのか？」

「いいえ、それとは違います。報告にあった「ゆきかぜ」の位置から少し離れていますし、速度も速すぎます。それに少し離れた所に「ゆきかぜ」の物と思われる光点も確認できます。ですから、これ

は敵潜水艦が浮上したのではないのでしょうか？」

「わかった。艦長に伝える。」

神は電話を置き、梅林中佐に報告する。

「艦長、レーダー室が敵艦らしい光点を捉えました。方位330度、距離は約30kmで極めて強い反応だそうです。」

「何？・・・もしかしたら「ゆきかぜ」の攻撃で損傷した敵潜水艦が浮上したのかもしれない。そうすると水上砲撃戦になるかもしれないぞ。」

梅林と神は表情をしかめた。

通常潜水艦と水上艦が撃ちあうということはない。それは現代でも変わらない。なぜなら潜水艦は普通浮上して敵に向かって撃てる兵器等持たないからだ。第二次大戦頃までは自衛用・もしくは通商破壊用に1〜2門の大砲を積むのが普通であったが、現代ではそれも水中抵抗を増大させる原因になるので、廃れている。また例えば大砲を積むにしても、それは小型で威力も弱い玩具のような物ではない。

つまり、水上で潜水艦と水上艦が戦闘することは、潜水艦にとって自殺行為に他ならないというのが常識である。しかしながら、今回彼らが追っている「シエルクーフ」はそうはいかない。

実はこの潜水艦、世界にも類を見ない巨砲搭載潜水艦で前部甲板に本格的な20cm連装砲を積んでいる。史実では実戦使用されることなく沈んだとされているため、果たして搭載した意味があった

か不明だが、取り敢えずその砲弾を喰らえば「双月」は一撃で大破する可能性が高い。なにせ、駆逐艦にはまともな装甲がないのだから。

「もう一度ラ・ロシエールの航空隊に支援を要請してみてはいかがでしょうか？浮上した潜水艦なら航空機にとって鴨です。」

「しかし、そうなるとどんなに早くてもここまで進出するのに1時間は掛かってしまうぞ。敵の損傷が小さく、すぐに修理され潜航でもされたら逃がしてしまう可能性が高くなるし、漂流中の「ゆきかぜ」が再攻撃を受けるかもしれない。我々がやるしかない。・・・総員、水上砲撃戦に備えよ。主砲ならびに機銃はいつでも発射できるようにしておけ。榊大尉も射撃指揮所へ行つて、レーダー砲撃の準備をしておいてくれ。」

「了解です。艦長。」

「双月」の場合、レーダー射撃と言っても射撃用レーダーを搭載しているわけではなく、水上レーダーからの数値を元に射角、仰角等を割り出して砲撃する初歩的な物だ。それでも、計算装置自体は最新の物を持ち込んである。だから目視射撃よりは高い精度を出せるはずだった。

また榊は機関全速で敵艦目掛けて前進するよう支持した。敵が浮上したのなら、ソナーに拘る必要もない。そして数分後、射撃指揮所に移動した榊から連絡が来た。

「レーダー射撃の準備完了。全砲配置よし。いつでもどうぞ。」

「よろしい。距離12000mで砲撃を開始する。砲弾は榴弾を使

用せよ。」

「潜水艦相手とはいえ榴弾ですか？徹甲弾じゃなくて？」

「こちらの目的は撃沈ではない。あくまで敵を戦闘不能に追い込めばよい。」

「わかりました。主砲には徹甲弾ではなく榴弾を装填させます。」

「頼むぞ。・・・さ、後は敵艦を捕まえるだけだ。」

24ノットのスピードで、「双月」が敵艦へまっしぐらに突っ込んでいく。敵も走っているから、射程内に納めるまでには時間が少しばかりかかる。皆緊張の面持ちでその時を待った。

そんな中で、がちがちに固まって舵輪を持つ兵長に梅林は声をかけた。

「こら、戦う前からそんなに緊張してどうする。そんなんじゃ戦闘になったらとても持たないぞ。」

「あ、すいません。」

謝る彼に対して、梅林は表情をにこやかに言う。

「いいか、フレッド兵長。とにかく落ち着け。君には戦闘経験がない。緊張したい気持ちは良くわかるが、緊張や焦りは冷静な判断力を鈍らせる。深呼吸でもして、とにかく自分自身を落ち着かせる。なんならベテランに変わるよう俺から命令を出しても良いんだぞ。」

フレッド兵長はハルケギニアで新規採用された兵士だ。既に数ヶ月前から「にぎつ丸」等で研修を積んでいるから、決してド素人ではない。しかしながら戦闘経験自体はほとんどないので、がちがちに緊張していたので。

梅林の言葉によつて、その緊張も少しかりいらしい。

「いいえ、大丈夫です。自分は与えられた仕事を全うします。」

「その意気だ。しっかりやれ。」

「はい。」

彼の緊張が多少解れたのを確認すると、梅林は表情を元に戻して艦長席へと戻った。そして双眼鏡で、前方海上を凝視した。

「双月」がその射程に敵艦を捉えたのはそれから20分後のことであつた。

「こちらレーダー室です。敵艦との距離12000mです。」

「よし、では撃ち方初め。ああ、ちょっと待て。ただし第一斉射は照準を甘くして当てないようにしろ。警告射撃とする。第一斉射の後には60秒、間まを置け。それから発砲は15秒後に開始せよ。」

彼は射撃指揮所の櫛にそう支持を下すと、慌てて無線室との電話

を取った。

「無線室か？いいか、射撃開始と同時に無電を発信せよ。日本語とハルケギニア語が通じるかどうか知らないが、内容は降伏勧告だ。」

「了解。」

そして彼が電話を置いた瞬間、砲撃がスタートした。前部甲板の5インチ砲がまず射撃を開始した。

ドドン！！

前部甲板が砲煙に包まれる。既に訓練で何度も目にしている光景とはいえ、それなりに迫力ある物だと梅林は内心想った。

本来なら砲手たちは直ぐに空薬莖を取り出し、次弾を装填して発砲するのであるが、1回目は敵への警告であるからしばらく待つ。

着弾までにかかる時間が凡そ40秒。その間に先ほど打電した降伏勧告になんらかの返信が来るかもしれない。梅林は腕時計で射撃開始から40秒が経ったのを確認すると、無線室に再び電話した。

「無線室、敵から何らかの入電はないか？」

「いいえ。返信は全くありません。」

「そうか。わかった。ただし入電があつたらすぐに伝える。」

「了解！」



その後、砲撃は再開され数回にわたって砲撃が行われた。距離が10000mを切った頃には敵艦が目視で視認された。

「見えた。間違いなくフランス潜水艦の「シエルクーフ」だ。しかし、視界内に入ったというのになんで反撃してこないんだ？」

双眼鏡を降ろして、梅林は呟いた。敵は水上艦と戦える大砲を持っているのだから、全く反撃してこないのは不自然である。

そこで梅林は新たな命令を下した。

「発砲を一旦中止せよ。敵艦の砲の旋回視角から接近する。後部からの魚雷攻撃も有り得るので、見張りの兵は警戒を厳にしろ！！」

「双月」は「シエルクーフ」のほぼ真後ろから接近した。だが、いくら距離を詰めても何の反応もない。一応罠の可能性もあるので、砲や機銃に取り付いた兵士たち狙いを付け、はいつでも射撃を再開できるようにしている。

そして距離3000を切ったとき、マストの上にある見張り所の兵士が叫んだ。

「白旗です！！敵艦の乗員が白旗を振っています。」

「何！？」

慌てて梅林ら乗員たちは「シエルクーフ」を眺めた。すると、確かにセイルで白旗を大きく振っている乗員の姿が見えた。

またこの距離になってようやく分かったが、明らかにその艦体に

は爆雷と砲撃による損傷らしき物が見受けられた。どうやら「ゆきかぜ」と「双月」の攻撃は無駄ではなかったらしい。

そして間もなく、艦橋からチカチカと発光信号がなされた。ありがたいことに、梅林にも読める英語であつた。

「ワレキカンニタイシコウフクス（我貴艦に対して降伏す。） 降伏だ。よし、信号機を貸せ。」

梅林は信号機を借りると、発光信号でやはり英語で返信した。

「コレヨリキカンニイジヨウセントス。ウケイレモトム。（これより貴艦に移乗せんとす。受け入れ求む。）」

すると直ぐに「リヨウカイ（了解）」と返事がなされた。

## 眼下の敵 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 眼下の敵 5

「シエルクーフ」からの返信を受けて、早速第1種軍装に着替えた梅林艦長他数名が内火艇を使つて「シエルクーフ」に移乗することとなつた。もつとも、罨という可能性もあつたので、全員念のため拳銃を携帯し、さらに警護の兵士2名はT3型短機関銃で武装した。

「それじゃあ榊大尉、艦の指揮を任せるぞ。」

自分を甲板から見下ろす榊航海長に向かつて、梅林は声を張り上げた。

「艦長も、くれぐれもお気をつけて！」

万が一ということもありえるので、「双月」の砲や機銃はすべて「シエルクーフ」を指向しており、機関も直ぐに動き出せる態勢にあつた。

だがそのような最悪の事態が起きることなく、内火艇は海上を走つて行き、無事に停船状態にある「シエルクーフ」へと接舷した。それと同時に「シエルクーフ」からは内火艇を固定するためのロープと縄梯子が降ろされ、梅林は70代という高齢であるにもかかわらず、軽々と縄梯子を昇つて甲板に上がった。

そして彼は「シエルクーフ」乗員の出迎えを受けた。

「ようこそ、フランス海軍潜水艦「シエルクーフ」へ。私が代表者である副長のリュサンジュ中尉です。」

30代前半と思われる男が敬礼しながら言った。すかさず梅林も答礼して言う。

「トリステイン王国海軍駆逐艦「双月」艦長の梅林中佐です。貴艦が白旗を掲げて信号を送ってきたため、降伏の確認を行いに来ました。貴艦は本艦に降伏したということで宜しいですか？」

「はい。本艦は貴艦に対して降伏を宣言します。既に乗員一同、その意志で固まっております。」

その言葉に、嘘偽りは一切感じられなかった。

「わかりました。貴艦の降伏を受理します。なお、脱走・反乱を防止するためにこちらから監視の要員を乗せることとなりますが、それでも宜しいですか？」

リュサンジュはその言葉に頷いた。

「拿捕した相手に対しては当然の行為でしょう。認めます。ただし、乗員には一切危害を加えないと約束して欲しい。」

この言葉に、今度は梅林が頷いた。

「それは当然のことです。我がトリステイン海軍では、捕虜や民間人に対する虐待を禁止しております。どうか安心されると良い。・・ところで、艦長はどんなされたかな？」

副長が代表者として出てきたことが気になっていた梅林は、ここに来て訪ねた。すると、リュサンジュは表情を暗くして答えた。

「残念ですが、本艦の艦長であるコービル少佐は1時間ほど前に殉職しました。後ほど水葬を執り行おうと考えております。」

「それは先ほどの我々が行った砲撃によるものですか？」

「話せば長くなるので、それについては後からでも宜しいでしょうか？」

「わかりました。それから、一番近い港までは1日程度ですから、葬儀は陸へ上がってからでもよろしいのでは？」

「梅林中佐の心使いには感謝しますが、残念ながら艦長の遺体はひどい傷を負っており、陸へ持っていくだけの余裕はありません。他の遺体と共に水葬とするのが、海軍軍人としても名誉あることかと。」

「そうですか。では、本艦乗員たちにも舷側に並ばせて葬儀に参列させましょう。同じ海の男として、我々はそうする義務がありますから。」

「それはありがたい。乗員を代表して感謝します。」

2人は再びピシツと見事な敬礼をした。

そしてリュサンジュは乗員たちにその事を伝えに、また梅林は無線機を持ってきた兵士を呼んで、艦に残った档に連絡を取ために別れた。

急遽殉職した「シエルクーフ」艦長他の水葬が決まり、それぞれの艦で準備が始まった。「双月」では梅林からの無線連絡を受けて直ちに柁をはじめとする手空きの乗員全員が純白の第1種軍装に着替えて舷に並んだ。また「シエルクーフ」でも乗員たちが綺麗なフランス海軍の礼服に身を包み、同様に甲板へと整列した。

葬儀が始まると国旗に包まれ、沈むようバラストが取り付けられた遺体が艦内から運び出され、甲板上に並べられた。1体は3色のフランス国旗に包まれ、残り2体の内1体はガリア国旗に包まれ、もう1体は白い布に包まれていた。

それを見て「双月」の幹部たちは一体どういうことかと気になったが、もちろん今は神聖な葬儀の場であるから、聞くようなことはなかった。

小銃による空砲が空中へ向けて発射され、副長のリュサンジュ中尉がお別れの言葉を遺体に向かって言った。軍楽隊がいないので、乗員たちは死者を送る歌を歌う。それが終わると、遺体の乗った台が持ち上げられ、遺体が海上へと落された。

その瞬間、「双月」と「シエルクーフ」の乗員たちは一斉に敬礼を行い、霧笛が鳴らされて海においてその命を散らした死者への敬意を表した。例え先ほどまでは敵と味方という関係でも、死者に対しては最大限の敬意を払うというのが海の男の礼儀だった。

残る2つの遺体も同様に水葬に付された。ただし、その時梅林が見た「シエルクーフ」の乗員たちは、一応型通りの葬儀をその遺体に対してとしたものの、その目に哀れみのような物は全く感じられ

なかった。むしろ、どこか恨みの念が籠っているように見えた。

こうして水葬は無事に終わり、「シエルクーフ」は正式にトリスティン海軍に拿捕された。その頃には修理が完了した「ゆきかぜ」も合流し、「シエルクーフ」は「ゆきかぜ」に曳航されてハシラ島のクレ軍港へと回航された。「双月」はそこで別れ、ラ・ロシエール軍港へと向かった。

5日後、ハシラ島からの報告が義勇軍トリスティン方面軍司令部のあるミライへもたらされた。ただちに幹部会議が開かれ、その内容が幹部陣に知らされた。

「今回現れた「シエルクーフ」は、やはりカリブ海での事故が元で転移したらしいです。ちょうどそこがガリアのサン・マロン沖で、彼らはガリアと接触した。そして彼らは食料や真水、さらには燃料の補給を交換条件に、ガリアへ協力することになったそうです。」

回収銃器保管庫管理長であつて、最近になつて戦務参謀兼新型銃開発係長に就任した大久保特務少佐がハシラ島より届けられた報告書を読み上げる。

「燃料はやはり『鍊金』による生産かね？」

才助が問うと、大久保は頷いた。

「どうやらそのようです司令官。それで今回燃料の補給を受けた彼



らは、監視役のガリアの貴族2名を同乗させて、トリステインへ出撃したそうです。目的は一応偵察だったと彼らは言っています。」

「で、そこを家の潜水艦と駆逐艦に捕まったわけですか？」

末席に参加している才人が言う。

「その通りです。」

再び頷く大久保。

「続けます。そして我が駆逐艦「ゆきかぜ」の攻撃によって潜航不能となり、艦長のコービル少佐は降伏を決断したそうですが、それに対して同乗していたガリアの貴族2名が反対を起こして少佐を殺してしまい、その貴族も乗員から銃撃を受けて死亡したそうです。」

「死者3名とはそういうことか・・・他に負傷者や死者は？」

「幸いにも出ていないそうです。彼らは全員『東方義勇軍』への参加を希望しており、総司令官はそれを受け入れる予定だそうです。」

その途端、参加者からどよめきが起った。見知らぬ異世界に飛ばされてしまったのは気の毒以外の何物でもないが、潜水艦1隻が戦力となってくれるのは素直に喜ばしいことである。まあ、補給やらなんやらの問題は出るであろうが。

「ところで、彼らはガリア国内に現れた枢軸空軍について何かを知っていたのか？」

そう問うたのは戦闘機部隊司令官の菅野中佐である。空を守る人

間として、ガリアに現れた空軍戦力の情報を出来るだけ集めておきたかった。しかしながら、それに対しての返事は色好い物とはならなかった。

「それが、ハシラ島の人間も彼ら全員にそれを聞いたそうですが、どうやらガリア側は何も言わなかったらしく、全員口を揃えるように知らない、初めて聞いたと答えました。」

「そうか。」

大久保の答えに、菅野は少しばかりがっかりした。

「おそらく協力して反乱を起こされるのを警戒したんだろう。ちゃんと誠意ある対応をしていれば、そんなことも起こされないだろうに。」

才助が吐き捨てるように言った。

「ですね。報告によればどうやらガリアの彼らに対する扱いはあまり良いものではなかったようなので。どうやら平民ということになり見下していたようです。しかし逆に言えば、これは上手く行けば空軍部隊の離反を誘引できるチャンスかもしれません。」

大久保が笑みを浮かべながら言った。

「だな。それについては爺ちゃ・・・じゃなかった。総司令もよくわかっているだろう。一応こちらからも言っておくが、また『トウ機関』に動いてもらうことになりそうだな。ただし向こうのガードも相当固いみたいだから、効果が上がるかは5分5分だろうな。」

この才助の予想は、悪い方向で現実の物となるのだが、それは未来のお話である。

「とにかく、我々は軍を預かる身として、最悪のケースを常に想定する必要がある。敵が『鍊金』で燃料を生産できることを知ったのなら、敵航空戦力の行動がそれなりに動きやすくなったことを意味する。そうなると今回の潜水艦のように、思わぬ戦いを強いられることになるかもしれない。各員より気を引き締めてくれ。」

「『了解！』」「」

参加者一同、力強く答えた。

## 眼下の敵 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 領空侵犯

『シエルクーフ』が義勇軍に加わってから数日後の午前中、才人は格納庫の入り口で一緒に小隊を組むカルロ3等兵曹（進級）と雑談しながら待機していた。

雑談の内容は主に隊内の色恋に関する噂とか、最近ミライの街で流行っている店とか、ラジオで流れる歌等についてと至って普通である。（ハルケギニアの常識からしたら先進的。）

しかしながら、2人とも飛行服を着込んでいつでも出撃できるようにしていた。別に訓練に出るわけでも、哨戒任務に出るわけでもないのに何故こんな格好をしているのかと言うと、それは緊急出撃のアラートに備えていたのだ。

義勇軍でもこれまで緊急出撃要請が来なかったわけではない。しかしながら、戦闘機がそれに対して出るというのは稀であった。治安維持任務や災害派遣任務なら練習機や爆撃機、輸送機やヘリコプターと言った類の機体のほうが好都合だったからだ。

ところが、ここ最近は何国境線付近に所属不明の飛行機が頻繁に目撃されるようになった。最初の頃は越境してくることはなかったのだが、先週頃からは越境して場合によっては国境線から50km程度も入り込んだ機体があった。

これら侵犯機の一部は義勇軍が最近になって設置したレーダー基地のレーダーに引っ掛かった。一部であるのは、レーダーの稼働率が人材育成面で遅れているために高いことと、レーダー網自体に穴が開いていたからだ。

侵犯機が偵察任務を行っているのはリーダーや目視で確認した敵の飛行記録から明白であった。このまま放置しておけば調子に乗って首都のトリスタニアまでやってくるかもしれない。そこで義勇軍では王室に許可を貰って国境線付近で敵機を発見した場合の戦闘機派遣許可を取り付け、発見次第追いつくこととなった。

そしてこの日はその任務に才人の小隊が就くこととなった。予定では2人の担当は午前中一杯で、午後からは菅野中佐とシエスタ特務1等兵曹の小隊に交代する筈だった。

だが、運命の女神は2人の安穏な時間を邪魔する方を選んだ。後30分で交代時間と言う時に、突然けたたましくベルが鳴り、スピーカーが情報を伝えてきた。

「国境線付近に侵犯機あり！担当小隊は直ちに発信せよ！！」

座って雑談をしていた2人はすぐに立ち上がると走った。

「行くぞカルロ！！」

「了解！！」

2人は格納庫の前に引き出されていた機体によじ登る。2人の小隊に配備されていた機体は1ヶ月前まで43式1型戦闘機「零戦改」であった。しかし現在は最新鋭の44式1型戦闘機「超零戦」となっている。

「超零戦」という愛称は総司令官の才吉が付けたものらしいが、はつきり言ってどこぞの火葬戦記小説に出てくる胡散臭い戦闘機によ

うな命名であつたので、部隊内からは賛否両論の声が上がっている。ちなみに才人はそれなりにこの名を気に入っていた。

才人はその「超零戦」によじ登つて直ぐにいつもの掛け声と共にエンジンのスタートボタンを押した。ドイツ製のユモ213を改良したエンジンは、直ぐに動き始めた。

一方相棒であるカルロが乗り込んだのは何故か予備機であるはずのF4U「コルセア」であつた。実は彼の「超零戦」はこの時整備兵たちが悪戦苦闘しながら整備中であつた。

「超零戦」は性能的には確かに素晴らしかった。菅野中佐をはじめとする試乗した全パイロットが誉めたほどだ。しかしながら、性能が良いと稼働率が良いとは全くの別問題である。

これまで『東方義勇軍』では回収した機体、地球で生産して持ち込んだ機体全てが空冷エンジンの機体だった。それに対して「超零戦」は液冷エンジンである。液冷エンジンは空冷よりも整備が難しい。一応桜花飛行機やエンジンのパーツを発注した下請けメーカーは整備性を高めるよう改良をしたらしいのだが、それでも整備し易いとは間違つても言えなかつた。

旧軍出身のベテランや、地球からスカウトしてきた自動車整備工出身者（現代の自動車のエンジンは液冷が多い）等が懸命に現地採用の人間と共に努力しているのはあるが、それでも稼働率はどんなにがんばっても80%代を維持するのが限度で、ひどい時だと40%に満たないということもあつた。

これは43式2型「バッファロー」の最高98%、最低85%より遥かに低い。それでも整備班長の白井少佐の言に寄れば、「『固

定化』の魔法がなかったらさらに稼働率は落ちていた筈だ」という。

さらに、整備施設が整っている基幹基地以外での取り扱いはとも出来ず、ミライ、ラ・ロシエール、ホープの3基地以外に着陸するとそれら基地から整備兵が派遣されるまで飛行不能になるというケースまで出た。

結局こうした要素が足を引っ張り、高性能にも関わらず44式1型戦闘機の生産はたった16機で切り上げが決定してしまう。その後の生産は若干性能は落ちたものの、「誉」エンジンを基に開発された「勲」エンジン搭載の2型に引き継がれることとなる。

閑話休題。

エンジンを始動させ、暖機運転を済ませると才人らは車輪止めを外させ機体を滑走路へと前進させる。そして管制塔に連絡を行う。

「こちら大剣1、平賀中佐。離陸許可をお願いします。」

大剣とは才人の小隊名のことだ。もちろんそれは彼の『ガンダールヴ』としての相棒である『デルフリンガー』から来ている。機体の風防横にも剣をあしらったマークが描き加えられていた。

なお予断ではあるが、現在義勇軍の機体は国籍マークを全てトリステインもしくはアルビオン王国の紋章に塗り替えており、かつての所属国を示すマークは機体後部に小さく描きこまれているだけだ。また尾翼には所属基地と小隊番号が描かれている。

「こちらミライ管制塔、現在上空に飛行中の機体ならびに離着陸機なし。離陸を許可します。どうかお気をつけて。」



「了解、感謝します。」

その後カル口の離陸許可も同様に降り、2機はミライの飛行場を離陸した。そして取り敢えず国境線のある西へ飛びつつ、より詳しい情報を求める。

「こちら大剣1、目標の方位と位置報せ！」

「こちらミライ管制塔。目標は国境線より60km地点まで進入中。さらに内陸へ入る可能性大。貴機よりの方位およそ20度。」

「了解、以後誘導頼む。・・・カル口聞いたな？」

「もちろんです。」

「よし、じゃあ速度600kmで急行する。ちゃんと付いて来いよ！」

「了解です！」

ことなる機種による編隊であるから、性能の差によって引き離れてしまう可能性がある。才人はそれに注意しつつ、管制塔からの誘導を受けつつ飛ぶ。

義勇軍では生憎と防空警戒網のような高いレベルの管制誘導のシステムを持っていない。だから、時折管制塔やレーダー基地が送ってくる情報と、目視のみが頼りとなる。

飛行すること1時間。途中何度か小刻みに針路を変更しながら2

人は高度6000m、速度600kmを維持して進んだ。すると、ようやくお目当ての目標を機上搭載の小型レーダーが捉えた。

「カルロ、敵機を確認した。右40度、距離は30km以内だ！接近するぞ！」

「わかりました。」

それから間もなくして、カルロが敵機を肉眼で認めた。

「いました！右10度、高度は4000m前後です。」

才人がそちらを見てみると、青空の中にいた。芥子粒ほどであったが確かに機影である。2人は速度を上げてさらに接近した。

才人は目標が何であるか確認する。最初は輪郭しか見えなかったが、近付いて機種がわかった。

「3発・・・イタリア機・・・SM79だ。」

それはイタリアの爆撃機であった。ガリア国内に現れた機体と見て間違いなさそうだった。

「カルロ、これから無線で警告する。撃つなよ！」

「わかってます！」

もしかしたら撃ってしまうかもしれないカルロと自分自身に念押しを終えると、才人は無線機を全周波数で発信した。

「こちらトリステイン王国、『東方義勇軍』所属平賀中佐です。貴機はトリステイン王国領空を侵犯してます。直ちに引き返されたい。」

すると、意外にも一回で返事が来た。

「わかった。」

素っ気無い返事と共に、2機のSM79は機種を西へと向けた。

「これより貴機を国境線まで護衛します。」

才人らも念のため国境線付近まで追跡する。その間に2人はある装置を起動させた。だが、結局反撃されることも変な方向へと遁走されることもなく、2機のSM79爆撃機は国境を越えた。

「任務終了。帰還する。」

才人とカルロも機首を東に向けて帰途についた。

ミライの基地に着陸すると、早速整備兵が機体からある物を取り出した。カメラである。実は先ほど2人が起動させたのは敵機を撮影するための小型カメラであった。

早速そのカメラが撮ってきた写真と動画が解析された。

その結果わかったのは、S M 7 9 の胴体から航空カメラらしい物体が写っていること。そして、銃座には人が配され完全に臨戦態勢であることだった。戦争状態でなかったから撃ってこなかったようだが、もし相手が少しでも冷静さを欠いていたら撃たれていたかもしれない。

こうしたことから、今回飛来した爆撃機はやはりトリステイン領内の強固偵察を実施していたことになる。このことは、義勇軍の幹部陣に戦争が本当に間近であることを実感させ、なおかつ警戒をより強化させることともなる。

## 領空侵犯（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

44式戦闘機の欠点については、読者の方の指摘を受けて、自分が考えていた設定をより拡大しました。  
御協力ありがとうございます。

## 義勇軍近況

アルビオン解放戦争が終結して丸1年が経とうとしていたこの時期、王都トリスタニアやアルビオン王国では戦勝（解放）1周年を記念する行事等が計画されていた。しかしながら、『東方義勇軍』はそんなものと無縁だった。

前身の『トリステイン空中義勇軍』時代から数えること既に1年半近い年月が経ったが、その間に苦労の末育て上げた部隊は、大国であるガリア・ゲルマニアとの戦争に備えていた。

トリステイン方面軍の歩兵は増強が続き、既に2個中隊600名が練成を完了していた。義勇軍の歩兵部隊は60名で小隊、さらにそれを5つに割った12名の分隊が最小単位となっている。

各分隊には平均的に1〜2門の81mm迫撃砲、1〜2挺の127mm重機関銃が配備されている。数が厳密に特定されていないのは、分隊によってその組み合わせを変えられたからだ。またこれに携帯ロケット砲や1〜2台配備されているジープやハーフトラックの車載兵器である106mm無反動砲等も加わる。

なお、この時点においては軽機関銃が未だ配備されておらず、近接戦闘用にはT3短機関銃が多用されている。これに歩兵のT1ライフルや手榴弾、拳銃などが加わる。

これだけでも、ハルケギニアにおいては過剰なほどの火力を持ちあわせていることとなる。ちなみに義勇軍では外征の範囲をハルケギニア内と規定していたため、さらに食料等については自炊ではなく補給部隊が用意する態勢を採ったため、その分一人当たりの弾薬

の携行量が多い。

ガリアとの戦争が始まった場合は、この600名の歩兵は主に10個の小隊単位で扱われ、2個小隊がトリステイン内での治安維持任務や基地警備、さらに休養と新兵の教育にあたることとなっていた。だから実質出撃するのは8個小隊480名となる。

歩兵の兵站を支える歩兵補給部隊は4個小隊、総勢120名からなり個人装備は歩兵と共通だがT3短機関銃の保有率が高く、部隊全体の装備としては迫撃砲や無反動を持たず、携帯ロケット砲が最強の装備であった。それでも、兵站線を脅かす敵兵力と充分戦えるだけの戦力は持ち合わせていた。

また当然であるが、車両の比率も歩兵部隊に比べて補給部隊の場合は護衛役のジープやハーフトラックが低く、トラックが高かった。また地球から持ち込まれた野外炊具を持ち込んでの配膳もこの部隊が担当した。そのためこの部隊には比較的料理の腕が良い人間や、肉体的・性格的に歩兵に不適格な人間が配備される傾向にあった。この部隊は戦時には3個小隊90名が戦地と基地との兵站や、食料の配膳を担当する。

歩兵よりも遅れて編成された砲兵は部隊司令の大野中佐（進級）や、海上部隊より抽出した教官が教育した結果、なんとか180名まで人員を揃えることが出来た。

この部隊は1個中隊を6個小隊にわけて運用され、さらに通常5人分隊に分けられ、分隊で1門の砲を担当した。ただし、戦場では砲兵補給部隊の人間が装填や整備を手伝うことを想定していた。

砲はゲルマニア・ロマノフ製の75mm野砲が主力であり、これが12門配備されていた。また地球から持ち込まれた58式105mm榴弾砲6門も配備され、さらに6基の対地ロケット砲も保有していた。

個人装備は嵩張る小銃を持つ者は少なく、短機関銃や拳銃、手榴弾、携帯ロケット砲が主であった。車両はジープとハーフトラックが主で、そのハーフトラックも砲の牽引用に改造したものであった。

砲兵を支援する砲兵補給部隊は120名からなり、歩兵補給部隊と同じく戦地と基地間の補給や、戦場における配膳等を担当する。しかし上記したとおり、砲兵として戦う場合も想定しており、人材面でもそれに合わせていた。

砲兵はガリアとの戦争が起きた際は教官役ならびに予備戦力となる1個小隊30名を残して全戦力が出撃する予定であった。

またアルビオン解放戦争から数ヶ月経って創設されたのが高射砲部隊で、こちらは基地防空ならびに用地防空が専門で、現在も練成中である。指揮官は海上部隊の駆逐艦「さかき」砲術長だった山中耕三少佐で、部隊創設の際に才吉が人材について打診したところ推挙された人物だ。

高射砲部隊は現在ミライ基地、ならびに市街地に配備され75mm高射砲12門と、40mm連装機関砲20基、さらに12.7mm4連装機銃6基を備えていた。

この部隊の兵士は、戦場へ直接出動するわけではないので特務兵の比率が多い。特に体力面で一旦は義勇軍の募集に撥ねられた後に採用された者が大多数だった。また時期的にも義勇軍に撥ねられた



ものの、職を得てミライヤトリスタニアに住み、ある程度文字等を覚えてからであったという好都合と思える事例もあった。

一方戦場における防空に関しては、当初は敵が竜等の幻獣と想定されていたため、車載の12.7mm機銃や小銃で事足りるとされていた。ところが近代的な航空機が敵となりうる場合が浮上したので、一部の車両に連装や4連装の12.7mm機銃を搭載するなどしてお茶を濁している。

総司令の才吉などは、一時期「ステインガー」でも手に入れてくるか。」と気楽に言ったらしいが、これは結局開戦には間に合わなかった。

戦車隊はロマノフ公国製の43式装甲車が主力となっていた。兵士の養成も順調で、この時点においては20両がいつでも実戦に出せる状況にあった。

戦車隊の運用を支える戦車補給部隊は60名1個小隊編成で、他の補給隊とは違って燃料タンク車の保有率が非常に高いのが特徴であった。

なお戦車に関しても『固定化』の魔法の恩恵や、また整備性を高めるよう改良していたため故障率が少なく、また整備兵の養成を地球より簡素な物にすることが出来た。

ちなみに、アルビオン方面軍は設立が少し遅かったため規模がトリステイン方面軍より一回り小さい。具体的には例えば歩兵の場合は540名であった。ただし、アルビオンの場合は侵攻されるまで時間があると考えられており、ガリアとの戦争の際は、この内の半分から3分の1、場合によってはそれ以上の戦力をトリステインへ

進駐させることが決められていた。

航空部隊の方は桜花飛行機による生産や、さらには地球からの積極的なパイロット・整備士のスカウトによって質量共に大幅な増強が出来た。また現地採用の志願パイロットも練習機部隊司令のグルー・特務中佐らの努力によって、トリステインで16人、アルビオンでも11人にまで増えており、さらに20人近い人間が訓練中であつた。

この時点におけるミライ基地配備の戦闘機部隊の定数はOS1「零戦改」16機、OS2「バツファロー」8機、OS3「超零戦」10機となっていた。（「超零戦」については稼働率が低いことからこの半分か動けば良いと考えるのが妥当。）

さらにラ・ロシエールに展開する艦載飛行隊も編成上は「にぎつ丸」の21機、「ブリシंगाメーン」の24機が存在したが、この内実戦に出せるのは戦爆併せて30機であつた。もともと、タルブ村での戦闘を見る限り1機で軍艦2隻分と戦えると言えるから、これだけあれば充分敵艦隊と渡り合える。

戦闘機隊と爆撃機部隊は開戦後初期の段階は防空戦闘、ならびに敵侵攻軍攻撃に用いられ、逆侵攻の際は前線飛行場へ進出することを想定していた。

練習機部隊もOR1型「赤とんぼ」が量産されているために拡張されていた。練習機部隊は開戦した場合でも余程のことがない限り

は戦闘に参加する予定はなかったが、場合によっては予備飛行場への疎開も考えられていた。

航空隊を支える整備員の養成も進んでいた。義勇軍にとって幸いなことに『固定化』の魔法を掛けた機体の故障率は少なく、地球に比べて養成が楽ということが大きく味方していた。その代わりとして、空冷エンジン専門の整備員ばかりが養成され、「超零戦」の運用に使用を来たしたのはやむをえない事態だった。

航空部隊も陸上部隊と同じく、一部戦力がトリステインへ抽出される事が決定され、こちらは一足先に実行に移されつつあった。

海上部隊は新たにトリステイン海軍の護衛駆逐艦2隻と、空母「プリシングアメイン」、さらにロマノフから購入した貨物船改造の補給艦が加わったことで大幅な戦力アップがなされていた。練度に関して不安は残っていたが、取り敢えずガリアやゲルマニアに対する戦闘には出せると判断された。なにせ相手にはまともな海軍はないのだから。

なお、ガリアから寝返ったフランス潜水艦「シエルクーフ」について、義勇軍幹部は当初直ぐにでも戦力にしたいと考えていたが、「ゆきかぜ」のヘッジホッグ攻撃、「双月」の砲撃による損傷が思ったより激しく、ロマノフで修理することとなった。

なお、ロマノフでは修理に関しては当初潜水艦に関する技術を渡すこととなるので反対意見も出されたが、結局少しでも戦える船が

欲しいという事情もあるので、ロマノフ公国での修理が決定された。

ちなみに、ロマノフ公国がこれを基にして潜水艦を造り上げるのは半年後のことであるが、その時にはロマノフ公国は完全な同盟軍となっており、さらにその後もロマノフ王家がハルケギニア各王家と親睦を深めたため、同国がハルケギニアにとっての敵となることはなかった。

こうして義勇軍の戦争準備は完成とまではいかないまでも、ガリア軍に対するだけなら十分な用意が出来たと義勇軍の幹部陣は判断していた。

## 義勇軍近況（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお狙撃部隊について書いていないのは、ジョン・ドー先生に確認とり忘れた作者のミスです。

## 亀山レポート（前書き）

今回の話は原作を完全に無視して作者が作品の設定を書いているので、御注意ください。

## 亀山レポート

ガリア軍との対決が近付く中で、それとは全く関係ないが重要な報告が義勇軍幹部に為された。報告の主は、義勇軍技術少将の亀山である。物理学者で才人の祖父である才蔵の友人である彼は、義勇軍の仕事を手伝いつつこの世界、特に魔法や転移現象について調べていた。

彼はここ数ヶ月の間トリスティンやアルビオン、さらにはロマノフを調べまわっていた。その彼が久しぶりに義勇軍基地に戻ってきた。しかも、重要な研究成果を携えて。

本来なら総司令である才吉に見せるのが筋であるくらい重要な話らしいのだが、アルビオンへ行くと遠回りになるので、先にトリスティン方面軍の幹部陣に報せることとなった。

「皆様お久しぶりです。今回は多忙の中時間を割いていただき感謝します。」

一同の前に立った亀山が取り敢えず頭を下げて挨拶をした。

「お久しぶりです亀山少将。非常に重要な研究成果を我々に報せてくれるそうですが、それはやはり地球とこの世界との繋がりについてですか？」

基地内の会議室で始まった幹部会議において、まず才助が開口一番聞いた。

「その通りです、平賀司令官。私は半年近くに渡ってこの世界にお

いての研究を行ってきました。主に魔法と転移に関するものですが、今回それらについてのレポートが一部ではありますがまとまったので、お伝えにきました。」

「しかし、我々に難しい話をされても理解できるかわかりませんよ。」

そう言うのは大久保特務少佐だ。

「もちろんです。ですから今回は出来る限り簡潔に述べたいと考えております・・・それではまず、魔法についての考察について述べたいと思います。さて、皆さんもご存知の用にこの世界では地球にない魔法が存在し、人間やエルフ、その他一部の生き物が使用しております。それらは何もない空間に水や火を出現させる等の現象を起こします。しかしながら、それらは普遍的に起こせるものではなく、魔力が切れれば魔法は使えなくなります。そこで私はその魔力について、なんらかの数値化を出来ないか試みました。」

その言葉に、参加者からは感嘆の声が漏れた。

「それで、出来たんですか？」

菅野が問うた。すると、亀山が続けた。

「そのために私は地球から様々な計測機器を持ち込みました。磁力計やガイガーカウンター、サーモグラフィー等様々ですが、それらの中でただ1基だけ全ての魔法が発動される際動いた機器がありました。地震計です。」

「『『『地震計!?!?!』』』」



参加者全員が信じられないとばかりに声を上げた。地震計とはもちろん日本人なら馴染みの深い、地震の揺れを計測する機器のことだ。

「単に、その場で起きた地震や地響きを捉えたとかではないのですか？」

爆撃隊司令の神林中佐が聞くと、亀山は首を振った。

「いいえ、当然そんなことはございません。それに計測された数値は調べた結果、地震で発生するような物とは全く異なっていました。因果関係についてまではわかりませんが、取り敢えず魔法を発動する際になんらかの力、つまりは魔力が発生しそれに機械が反応したということとは間違いありません。」

亀山教授は断固とした口調で言い切った。

「まあ魔法を使う際の力を機械で捉えたというのはそれなりの収穫にはなるとは私も思います。」

「平賀司令の言うとおりです、これをより発展させれば魔力を正確に数値として測り、リーダーのように発生場所を探知できる装置が作れるかも知れません。そうなればメイジかそうでないかが直ぐにわかりますし、相手が魔力切れになっているかもわかりますよ。」

つまりは『ディテクト・マジック』を魔法ではなく機械でやれるようになるということだ。亀山が言った以外にも、マジックアイテムを楽に探せるようになるかもしれない。これは魔法を使えない平民には意義のある話だ。

「ただし、今回の話はそちらも重要な話なのですが、実はそこから導き出された私の仮説の方が重要といえます。」

「それは一体どういうことですか？」

再び大久保が聞いた。

「さて皆さん、メイジが魔法を使う時魔力を放出していると私は先ほど説明しました。当然その魔力はメイジの体外、具体的には空中へ放たれています。そのエネルギー量については現在のところ数値化出来ておりませんが、タルプにおける事例や先住魔法の威力を見る限り相当な物であると私は考えております。」

その言葉に、参加者は皆頷く。

「一方で、これまで転移してきた人間等の事例を調べた結果、それなりの共通項が浮かび上がってきました。」

「共通項ですか？」

菅野が首をかしげた。

「はい。それは、その多くが戦争中にこの世界に飛ばされてきたということです。中には爆発のショックというものもあります。そこで私は考えたのですが、そうした戦争の際に地球では大量の爆発が起きますね。そうするとそのエネルギーが空中に放出されます。本来そのエネルギーは全て消費されるはずですが、ほとんど計測できないくらいの少ないエネルギーが目に見えない形で蓄積していくとします。そのエネルギーが一定量たまり、ハルケギニアで放出され

ている魔力の蓄積量と一致した時、もしくは一致せずともある程度たまった時私は転移現象が起きると考えました。」

再び会議室内にどよめきが起こった。

「それに関して根拠はあるんですか？」

末席に座っていた才人が手を上げて聞く。

「さつきも言ったように、これは仮説だよ。しかしながら、エネルギーの放出が多い戦争によって転移現象の発生率が高くなるというのは、これまで発見されたものの多くが武器であることを考えると私は正しいと思っている。ついでに言えば、日蝕や霧といった気象現象の一致による転移も起きているから、それらは転移現象を誘引、もしくは何らかの干渉をしているとも私は考えている。」

「しかしそうになると、現在私たちがいた地球との行き来が出来ることや、才人が召喚された現象についてはどうなりますか？」

才吉がその点を指摘すると、亀山は答えた。

「それについては、恐らく鍵を握るのはルイズ代王殿下になると思います。」

「なんでルイズが!？」

突然ルイズの名が出たために、才人が素っ頓狂な声を上げた。

「彼女の魔法は特殊です。その魔力も桁外れです。そんな彼女なら異世界への扉を故意に開けるだけの力があるかもしれません。そし

て以前司令官が仰っていました。そんな力の持ち主が地球へ何回か行ったのなら、その力に導かれて道が出来上がってしまうのだから、領けない話ではないと私は考える。」

彼の言う特殊な魔法とは、無論『虚無』のことだ。現在義勇軍内には彼女が『虚無』を使えることを知っている人間は、初期の頃入った人間や、亀山のように研究目的のために知らされた例外を除けばいない。だからこのような言い回しをしたのだ。

「つまり、あの時（初めて地球へ戻った時）ルイズさんを連れて行かなかったら、地球へ戻る道は塞がれていたのかもしれないわけか。」

「まあそう言う事です。」

あの時ルイズは気まぐれで乗り込んで地球へ行ったが、それが良い方向へと働いてくれたようだ。

「しかしそうになると、研究を進めていけばこれまで転移してきた人間を元の世界に戻せる方法も見つかるかもしれないわけだ。」

砲兵部隊司令の大野中佐が指摘した。

「確かにその可能性もありますが、残念ですがようやく魔力が計測できるという程度ではお話になりませんし、仮説の域を出てもいません。過度な期待をされても困りますというのが、こちらの本音です。」

「ですが、研究を進めなければそれで終わりですからね。今後とも研究を進めて下さい。」

才助の言葉に、亀山は頷いた。

「わかっています。それともう一つ。実は今回調べていて気になったことが。」

「何ですか？」

「はい。実は魔法を使える人間、つまりメイジの比率がハルケギニアで言うところの『聖地』から離れれば離れるほど減っているんです。」

「ほう。」

「もしかしたら、『聖地』と魔力には大きな因果関係があるかもしれません。根拠は不足していますが、私としては是非とも『聖地』へ行き調べてみたいのです。」

「なるほど。しかしながら、戦争を前にしてのこの時期にそれを行うのは非常に難しいです。それにハルケギニアでも問題のあるそんな場所へ行くことは、軍全体を揺るがす話にもなりかねない。一応検討はしますが、総司令とも話し合う必要があるので、お待ちいただきたい。」

「わかりました。」

この話は、その後戦争が始まったために一時宙に浮くが、10ヵ月後に正式に『聖地』搜索は行われることとなる。

亀山の話はここまでで、その後は質疑応答が行われた。それが終

わると、亀山はアルビオンへ向かう輸送機に乗り込み、才吉の元へと出掛けていった。

一方、才人はこの会議の話に興味を持つと共に、不味いことを聞いたのではないかという複雑な感情をもつこととなる。

「父さん、今日の話はルイズに伝えるべきだろうか？」

会議が終わる直前、才人は才助の所に言って訪ねた。

「そうだな・・・彼女の魔法のせいで異世界から人が引つ張られて来ているなんて言ったら彼女のことだ、シヨックを受けるに違いない。だから今は取り敢えず黙っておけ。他の参加者にも口外無用としておくから。」

「わかった。」

結局この会議での話は、参加者の胸の内にしまわれた。才人はいつもどおり王宮へと出向いたものの、ルイズには何も話さなかった。しかし、この話はハルケギニアの運命に大きな影響を及ぼしていることを知る者は、この時点においてまだいなかった。

## 龜山レポート（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 密会

ある日の夕方、才人は王宮にやって来ていた。ところが、この日は特に何かの会議があるわけでもなく、また義勇軍からの報告を行う日でもなかった。しかも彼は何故か目立たないように私服を着ていつも使う正門からではなく、召使などが使う狭い通用門から王宮内に入っていた。

そして30分ほどして、彼はラフな格好をして変装したルイズと共に王宮を出てきた。しかもやはり正門からではなく通用門から。

2人は恐らく王宮付近にいるであろうガリアの密偵の目を気にしつつも、周りの人間から怪しまれぬよう普通の夫婦を装ってトリスタニアの街を歩いた。

何事もなく街を抜けると、中心部から離れた位置にあるトリスタニア中央駅から西行きの列車へと乗り込んだ。この時期鉄道はトリスタニアの西へは約40km地点まで線路が延びており、沿線の開発が進んでいた。

義勇軍主導で造られたこの鉄道は現在半官半民方式で運営され、物流に革命を起こしていた。決して安いということはないが、3等なら平民でも乗れないことはない料金であり、馬車にくらべて早くそして多くの荷物が運べた。

ただし、保守的な貴族の反対があるのも事実であり路線の延長が進んでいない面もある。それでもラ・ロシエールまでの路線は王室や改革派貴族の後ろ盾を得て、先日ようやく全区間の敷設許可が降りていた。現在トリスタニアから東へは30km地点まで延びてい



る。またラ・ロシエールからも路線の建設が始まり、そちらは先に鉄道技術を持っていたロマンノフの協力によって20km地点まで延びていた。

もつとも2人の目的地は2つ隣のミライであつた。トリスタニアからなら10分もあれば着いてしまう。ちなみにこの区間は需要が多いため、既に複線化や電化も視野に入れられていた。

ミライ駅で降りると、才人は駅の駐車場に止めてあつたサイドカーにルイズを乗せて、ミライの市街地を走り抜けた。

ミライの街は今やトリスタニアに匹敵するほどに賑やかであつた。何より地球から持ち込まれた風力や太陽光発電による街灯や、やはり地球やロマンノフから買い入れた発電機による発電所の稼働によって一軒一軒に電灯が引かれたことで、街全体が明るくなったのも一因であつた。

また商店の数もかなり多い。その多くはこの街に集まってきた商人の営む店だが、中にはラ・ロシエールを介して地球から持ち込まれた物品を売る店もある。服屋や薬局、書店がそれに当たり、売る相手の人間が限定されるが、ハルケギニア人で利用する人間もそれなりにいる。

例えば才人の知り合いにしても例えば時折演習のためにやってくる水霊騎士隊のギーシュは服屋にいつも行くし、マリコル又は本屋で漫画とかアニメのイラスト集などを見ている。またモンモランシーやキュルケと言つたルイズの女友達も、時折化粧品とか薬を買つて行つてる。

そうした店が立ち並ぶ地域をぬけ、才人は一軒の宿の前でサイド

カーを止めた。そしてルイズと共にその宿の一室へと入った。

「ごめん、2人とも待たせて。」

「ちょっと公務が予定より伸びちゃって。」

部屋に入るなり、才人とルイズは椅子に腰掛けて待っていた先客に対して少しばかり遅刻したのを詫びた。だが、先客たちは別にそんなことは気にしていないようだった。

「いい。私たちも今来たところだから。」

いつもどおり、タバサは素っ気無く答えた。対照的にもう1人の先客であるキュルケは明るい声で答えた。

「タバサの言うとおり。気にしないで。2人も早く座ったら？」

キュルケに促されて、才人とルイズも空いている椅子に腰掛けた。

「それで、今日私たちを呼び出したのはやっぱり戦争のことかしら？」

キュルケが普段は中々見せない真剣な顔つきで訪ねてきた。

「もしかして、学院でも噂になっているの？」

ルイズが訪ねるが、それに対してキュルケは首を横に振った。

「まさか、学院じゃそこまで大っぴらになってないわよ。良い所国境沿いの出身の子が少しばかり騒いでいるだけよ。他の子は戦争に

つては無関心だし、特に理由のないガリアと戦争が起きるなんて考えていないみたい。噂話になってるのは、むしろいきなり『ゼロ』から代王に指名された貴方の方よルイズ。」

キュルケが皮肉交じりに言うが、ルイズは堪えた。

「う・・・まあ、なら良いわ。学院で学ぶ生徒にまで無用な心配は掛けたくないから。」

「ギーシュたち（水霊騎士隊の面々）には口止めはしてあったけど、あいつにしてはちゃんと約束を守ったらしいな。ま、それはさておき。タバサにはもう言ったけど、ガリアとゲルマニアがトリステインに侵攻するのはもう間近だ。」

才人が真剣な表情で言うと、キュルケとタバサの表情もこわばる。

「それは間違いないの？」

キュルケが確認をとると、才人が頷いた。

「ああ、出所は言えないけど確実だ。」

「大臣たちも、極一部の楽観派を除いて意見が一致しているわ。ただ、たとえ開戦しても敵が攻めてくるまでに時間が掛かるだろうという見方が大筋だわ。」

「まあ、普通宣戦布告を報せて攻め入るまでに間を採るのが一般的だったからね。けど、ジョゼフ王は違うんでしょう？」

その問いにはタバサが答えた。

「ジョゼフには常識なんか通用しない。むしろ彼は戦争がひどくなることを望んでいる。」

「それについては俺たち（義勇軍）でも同じように考えている。とにかく戦争はいつ起きてもおかしくない。そこで、キュルケに頼みがあるんだ。」

「あら？私に何かしら？」

才人の言葉をルイズが引き継ぐ。

「あんたは今の話を聞いて帰国するんでしょ？だったらそのついでにあんたの家も含む、反皇帝派の結束とトリステインへの協力を再確認してきて欲しいの。もちろん、口約束だけじゃないわ。」

そこでルイズは持ってきていたポーチから何枚かの手紙を出した。

「これは私と枢機卿の連名で書いた親書よ。」

「別にそれは良いけど、口にしる手紙にしる何らかの見返りが必要だわ。」

そのセリフに、ルイズの表情が不機嫌な時の物となる。

「相変わらずゲルマニア人は強欲ね。これまで散々義勇軍との交易で荒稼ぎした癖に、まだ見返りを求めるって言うの？」

「利に目敏いと言って欲しいわ。それで、どうなの？」

なんとなく魔法学院時代のことを思わせる光景だが、ルイズはまたも耐える。

「まあそう言うと思っていたから、新たな条件をこちらとしても付け加えさせて貰ったわ。」

「へえ、どんな？」

「優先的な技術の無償供与に、ロマノフ公国との直接交易の斡旋、さらにこれはそっちがトリステインに対して協力したと認められてからだけど、新型の武器の供与よ。」

キウルケは少ばかり感心した。それらはこれまで行われてきた物より遥かに収益を見込めることばかりであったからだ。特にロマノフ公国との貿易は、トリステインとアルビオンでの例を見る限り相当おいしい話であった。

ちなみにロマノフとハルケギニアの交易は、今のところトリステインとアルビオンが直接貿易しているだけだ。ガリアとゲルマニアはそれぞれ平民だけの国ということで見下しており、政府レベルでの交渉が進んでいない。ロマリアも教皇は自分たちの教義を汚さなければ良いと前向きなのだが、異教徒の国ということで、国全体で見ればやはり積極的ではなかった。

「随分と奮発したわね。それだけあれば恐らく8割は確実にトリステインに協力するわ。わかったわ、この話はしっかりと伝えておくわ。けど言うておくけど、戦争の流れによってはどうなるかわからないわよ。」

「わかってるわ。」

ルイズは強い意志が困った言葉で言い切った。

「随分と立派になったじゃないルイズ。私もそれに負けないうが  
んばらせてもらっわ。」

この言葉通り、キュルケはその後ゲルマニア領内の反皇帝派をまとめあげ、トリステインに大いに協力することとなる。しかも彼女のやり方は巧みで、彼女が内戦の後新皇帝となる布石を作ることとなる。

「それじゃあ、ゲルマニアについては頼んだぞ。で、次はタバサな  
んだけ「わかってる。」

才人の言葉をタバサが遮った。

「ガリアの反王派をまとめて欲しい？ いや、むしろ私に亡命政府を  
作って欲しい・・・そうでしょ？」

聡明なタバサは才人とルイズが言わんとしていることを見抜いていた。

「さすがねタバサ。その通りよ。」

「ストークの話だと、お前はそういう汚い話から抜け出したいらしいけど、このままガリアのジョゼフを放って置くことは出来ないんだ。頼まれてくれないかな？」

すると、意外にもタバサは頷いた。

「いいの？」

あまりに簡単に言うものだから、ルイズは呆気にとられた。

「あなた達には色々助けてもらった。恩返しする義務がある。だから、する。」

「ありがとう、タバサ。」

「タバサ、トリステインを代表してお礼を言うわ。」

2人の礼に対して、タバサは小さ頷いた。

「ようし、じゃあ難しい話はここまでだ。久しぶりに集まったことだし、ワインでも飲むか。」

才人の提案にキュルケが笑みを零し、残りの2人は微妙な表情をした。

「いいわね。」

「え！？私は明日公務が・・・」

「私も、病院での仕事がある。」

「そうか。じゃあ一杯ずつで乾杯しよう。それなら大丈夫だろ。」

才人は宿の主人に頼んでワインを1本だけ頼み、それを人数分のグラスに注いだ。

「それじゃあ、久しぶりの再開と、お互いの未来を祈って。」

「『乾杯』」

小さな宿での再開。ほんの僅かな時間の出来事であった。しかしこの出来事が切欠で、数年後にはハルケギニアが王国連合として統一され、さらに少女たちがそれぞれ1国の王となり、才人はハルケギニア全土に名を轟かす軍人になることを、この時の4人は想像すら出来なかった。



密会（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 悪夢の開戦 上

ガリアとの国境地帯で行われていた小競り合いが、突如として止まった。ガリア軍が一方的に兵を引き上げたのである。当然これは戦争開始の徴候と受け止められた。

『東方義勇軍』では『トウ機関』から得たガリア国内の兵の動きと併せてついに侵攻間近と判断し、各部隊に動員をかけると共に、ラジオ放送のニュースの中でガリア侵攻の可能性を流した。

この結果既に小競り合いのために避難を始めていた国境線の住人に続いて、一部さらに内陸の住人たちまでもが内陸へ向けて避難を開始するか、避難の準備を始めた。

王軍もガリア国境に近い領主たちが諸侯軍を編成したり、正規軍も一部の部隊は次々と装備を整えて東西両国境に向かったりと、各方面で動き始めた。当然空中艦隊も出撃の準備を終えていた。ちなみに重要視されたのは当然西である。

一方義勇軍は兵を動員しつつも、ガリア軍への反撃はトリスティンへの第一撃が加えられた後、各部隊が最大限に効率を発揮できる場所で行う予定だったため、とりあえず待機していた。

ただし、動き出した部隊がないわけではない。海上部隊については新たに全部隊を統合した連合艦隊が編成され、総司令官には小林中将がそのまま就いた。彼は将旗を巡洋艦「おおよど」に掲げ、組み込まれた艦艇は一旦ハシラ島へ集合すると、一斉に錨を上げて東へ向け出撃していった。

アルビオン解放戦争終結からちょうど1年が経ったその日、ガリアとの戦争はその火蓋を切ろうとしていた。ただし、過去の事例からたとえ戦争が起きても実際に戦闘が起きるまでには時間があるとトリスティンに住む多くの人間が考えていた。そのため戦勝記念日であるこの日、王都トリスティアでは催しが開かれ貴族・平民問わず、多くの人間が集まっていた。

あまりにも悪いタイミングであると言えた。もし戦争の開始が1日早いか1日遅いかであれば、その結果は大きく変わっていただろう。だが、作られた歴史が変わることはない。

ようやく陽が昇ろうとしている頃、義勇軍が設置したレーダー基地の1つでは当直を終えた兵士が次の兵士に任務を交代しようとしていた。

義勇軍のレーダー基地に配置される兵士は、地球から来た電子関係に強い人間や、海上部隊でレーダーを扱ったことのある人間が主であった。さすがに電子装置を1年そこそこ教育しただけの新兵に任せることは出来なかったのだ。

「おはよう。」

「あ、おはようございます。」

当直のレーダー主であった宇津木兵長が、交代でやってきた塩野2等兵曹に挨拶した。宇津木は地球からやってきた人間で、30歳。

コンピューター関係の仕事に就いていたが失業。家族もなく、自殺でもしようかと考えていた時に義勇軍に拾われた。

最初は字も違い、科学技術が進んでいないハルケギニアの生活に戸惑っていたが、今は緑の多い環境に囲まれての勤務や、またがれば昇進できる義勇軍の仕事にやりがいを感じていた。特に時々手伝うプログラムの仕事は気に入っていた。生憎とローテーションでリーダー配置になったが、来週にはミライへ戻る予定だった。

対する塩野は32歳で、海上部隊からの転属者だ。彼も新人の要請が終われば海の上へ戻る予定だった。

「何か異常はあったか？」

「いいえ、いつもどおり穏やかなもんですよ。」

「そうか。だったら定時連絡もそう伝えよう。お前は仮眠小屋に行つて来い。」

「それじゃあ、そうさせてもらいます。うん？」

リーダーの画面を見た宇津木の顔が怪訝な物になった。

「どうした？」

「いえ、一瞬機影らしい影を捉えたと思ったんですが。しかも近くに。ですが、すぐに消えてしまつて。」

「何・・・もしかしたら超低空で飛んでいる何かを捉えたかもしれない。よし、念のためだ。ミライの情報センターに伝えよう。」

レーダー基地からの情報は無線によってミライの情報センターへ伝えられるようになっていた。彼はその前に座り、スイッチを入れようとした。

と、その時である。遠くからブーンという爆音が聞こえてきた。間違いなくプロペラ機のものである。しかもかなりの数の。

「何だ！？」

2人は急いで建物の外へと出た。この内塩野は双眼鏡を持っていた。彼は外へ出るなり、それを構えた。そして直ぐにその正体を確かめた。

「なんてこつた！あいつは敵だ！」

「ええ！？」

生粋の軍人である塩野に比べて、宇津木に比べてこのような状況に慣れていた。だから今日の前に現れた多数の飛行機が敵機であることも直ぐにわかった。

「おい、ミライの基地に緊急通信を遅れ！いや、非常電波発信装置を入れるだけで良い！入れたら直ぐに退避だ！」

「え！？どうしてですか？」

「直ぐにやれ、じやなきや死ぬぞ！！」

すごい気迫で言われたため、宇津木は急いで建物の中にとって返

した。また塩野は仮眠室へ向かってもう一人のレーダー員である鴻池1等兵を叩き起こす。

「おい！緊急避難だ！！」

そして起きたのを確認すると、再び屋外へ出て買出しや連絡用に使うジープに飛び乗り、エンジンを掛けた。

「緊急通信発信しました！」

「一体何だつて言っんです？」

2人は未だに状況をちゃんと飲み込めていないようだが、塩野にはそれを叱っている暇も余裕もなかった。

「乗ったな！？いくぞ！」

彼は2人が乗るのを確認するやいなや、ジープを出した。その時には先ほど見た機影は直上にまで迫っていた。機体のマークまでハッキリ見える距離である。そしてその胴体の下には爆弾が何個もブラ下がつており、その内の何発かが投下された。

「ああ！！」

塩野を除く2人が絶叫して頭を下げ、塩野は舌打ちしながらアクセルを踏み込んだ。とにかく一刻も早く離れるためである。

しかしながら、数秒経つても爆発は起こらなかった。

「不発だったのか？」

宇津木が顔を上げて確認しようとした。しかし、またも塩野が叫んだ。

「バカ！顔を上げるな！！」

その直後、レーダー基地のあたりで爆発がおき、爆風と破片が3人に襲い掛かった。

「ひえええ！！」

2人が声を上げる中、塩野は必死にジープのハンドルを握って走らせた。そしてある程度レーダー基地から離れた所で、一旦近くの木の陰にジープを入れた。

「なんで止まるんですか！？早く逃げましょう！」

鴻池が叫ぶが、塩野は指を口に当てた。これはもちろん、静かにしろというジェスチャーだ。

すると、それを裏付けるように先ほど見た爆撃機より一回り以上は小さい単発の戦闘機が超低空を通り過ぎていくのが見えた。

「やっぱり護衛戦闘機が付いていたか。あのまま走っていたら機銃掃射を喰らっていたかもしれないな。とにかく、連中が通り過ぎるまでここで待機するかしないか。」

「それにしても、あいつら一体どこへ向かっているんでしょうね？」

鴻池が言う。

「うーん・・・連中の飛んでいくほうには・・・あ！王都トリスタニアだ！！」

「トリスタニア！？」

「畜生！そういうことなら俺たちの基地を吹き飛ばしたのも頷ける。ここから先のレーダー基地はミライまでない！！防空レーダー網に穴が開いてる！」

「じゃあ、早く報せないと！！」

宇津木が叫ぶように言うが、塩野は苦虫を噛んだような表情をした。

「報せるって言っても、基地にあった遠距離無線機は破壊されただろうし、ジープに積んである小型無線機じゃ10kmが限度だ。報せる手段なんてないぞ。さっきの緊急信号をミライの基地の連中がちゃんと判断してくれば良いが。」

3人ともしばし沈黙してしまった。

「・・・とにかくだ。安全が確保出来次第、一番近い村まで避難しよう。俺たちにはそれ以外どうすることも出来ない。もし出来ることがあるとすれば、祈るくらいだ。」

3人はただ、ミライの基地の人間が非常信号に気づいてくれるのを祈るしかなかった。この後3人は一番近くの村まで避難し、さらにそこから避難民の避難を手伝いつつ東へ向かい、義勇軍に発見されるのは2日後のこととなる。



一方、ミライの情報センターでは彼らが発信した非常信号をちゃんと傍受していた。またその信号は短時間で切れ、レーダー基地が連絡を一切絶ったことも直ぐに判明した。そこでレーダー部門司令で、才助にスカウトされて義勇軍に加わった元航空自衛隊のレーダー基地要員であつた大神一大佐の要請で、爆撃部隊の「ドーントレス」2機が偵察に発進した。

もしこの時発進した機体がせめて戦闘機であつたなら、この後の悪夢は避けられた、もしくは被害を小さく出来たかもしれない。しかしながら、それは後世で語られた後知恵というものだった。

そしてその偵察機から緊急の通信がミライの基地に入電したのは、凡そ30分後だった。

「ミライ基地の西北西150km地点において戦爆連合70機の編隊と遭遇。速度約300km。針路は王都トリスタニアと思われる。我敵戦闘機の追尾を振り切りつつ、全速でタルブ飛行場へ待避す。」

この瞬間、ミライ基地にいた全ての人間が凍りついた。

**悪夢の開戦 上（後書き）**

御意見・御感想お待ちください。

## 悪夢の開戦 中

敵機の大編隊が王都トリスタニアへ向かっている。しかも来襲までの猶予は30分程度。この情報に接して、ミライにある航空隊基地の作戦室は、それこそ蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。ただ幸運だったのは司令官である平賀才助中將が、先のレーダー基地に起きた異変によって既に作戦室に詰めていたことだった。

彼は情報を受け取るなり、命令を下し始めた。

「すぐに上げられるだけの戦闘機を上げろ！！搭乗員に非常呼集！トリスタニアが壊滅することだけは防ぐんだ！！それからミライの街にも念のため空襲警報を発令！！高射砲部隊にも緊急配置を命じろ！！あと待機しているはずの歩兵部隊には、住民の避難誘導をやらせろ！！急げ！時間がないぞ！！」

矢継ぎ早に命令を出しながら、彼は作戦室にある地図盤を一瞬睨んだ。既にそこには敵航空機を表す駒と、レーダー基地が破壊されたことを示すバツテンのマークが記されていた。

敵機がレーダー基地を破壊し、その後はレーダー網のない安全な空を悠々と飛んでいていたことが、その予測針路から判断できた。

「レーダーの隙を完全に衝かれた・・・やはりもっと強硬に貴族たちへ迫るべきだった！」

しかしながら、過去の事を悔やんだところで全てが後の祭であった。それよりも、司令官である彼自身はやることが沢山あった。

コンマ数秒で頭を切り替えると、彼は直ぐに司令官室に走って王室直通回線の電話を取った。既に陽も大分昇っているから、マザリー二枢機卿か誰かが起きているはずである。

そして電話には、そのマザリー二が出た。

「はい、マザリー二です。」

彼が出た途端、才助は捲くし立てるように言った。

「枢機卿ですね！緊急事態です！！ガリア国内から発進した飛行機の大編隊がトリスタニアへ一直線に飛んでいます。おそらく空襲、空からトリスタニアを襲う気です！もしかしたら王宮が第一目標になるかもしれません！！時間がありませんので、急ぎ代王殿下の避難を！それからトリスタニア市街にも避難命令を出して下さい！敵機はあと30分もあれば到達します！急いで下さい！」

その声はマザリー二がこれまでに聞いたことがないほど緊迫したものだった。そのため彼は一発で、危機的な状況がトリスタニアに迫っていることを理解した。またマザリー二は数少ない、地球に関する資料を見せられた人間である。もちろんその中には歴史に関する映像もあり、空襲に関するものもあった。

だから、彼は急ぎ決断を下した。

「わかりました。30分でどこまで出来るかわかりませんが、やるだけやりましょう！」

「お願いします。一刻の猶予もありませんので。では失礼！」

才助は、本来なら相当な無礼であるが一方的に電話を切った。だが切られたマザリーニはそんなこと気にするはずもなく、すぐに行動に移った。

「誰かおらぬか！魔法衛士隊を緊急出撃させよ！ガリアの輩がトリスタニアを襲わんと迫っている！！それから至急代王殿下を起こせ！安全な場所に避難してもらうぞ！！あと、衛士たちに命令して街中に避難命令を出せ！！」

マザリーニはそう命じたものの、本心ではおそらく間に合わないと思っていた。精鋭の魔法衛士隊各隊が迎撃のために飛び上がれることぐらいは出来るだろうが、相手は義勇軍が使用しているのと同じ飛行機である。既にその実力差は演習で証明されている。

あと頼れるのは連絡してきた義勇軍ぐらいだが、あれだけ切迫しているようであれば、少なくとも余裕を持つての迎撃など期待できない。

また住民の避難というが、トリスタニアには現在通常よりも多数の人間が集まっているのだ。とてもではないが30分で避難等出来ない。それどころか市民がパニックを起こして、避難自体が瓦解してしまうかも知れない。

マザリーニもまた、才助と同じく自分の行ってきたことを悔やんだ。王軍が義勇軍に敗北しても、その面子を立てるために強く言うことをしてこなかった。また、トリスタニアの住民を空からの脅威より守るための方策も義勇軍から要請を受け、あまつさえ映像まで見せられて説明されたのに、完全に軽視していた。

人間幾ら理論的かつ分かりやすく説明されても、やはり一朝一夕

で完全に頭を切り替えられるほど単純な生き物ではなかった。改革派であるマザリーニしても完全ではないのだ。

その結果が、間もなく現れようとしていた。だがそんな彼も、悔やんでいられる時間はなかった。彼はそうした苦悩は振り払うように、部下への指示を終えたとルイズの寝室へ向かって走り始めた。

一方電話を切った才助は再び作戦室に戻ると長距離無線担当の兵士に、アルビオンやハシラ島と言った遠距離にある味方軍基地に緊急の通信を発進するよう命じた。また、ラジオ局にも連絡を入れて、ラジオで緊急ニュースを流すよう要請した。

「これで・・・どれだけのことが出来るか・・・」

才助は苦しい表情をしながら言った。

「まさか全戦力を一回の勝負に投入してくるなんて・・・補給が今後続かないことを考慮して、使えるうちに使い切っちゃおうって判断か！？クソ！こちらの予測が甘すぎた・・・」

一応ガリア軍が国内に現れた枢軸空軍を取り込み、その戦力を使ってくることは予測していた。しかしながら、70機という大規模編隊を1回の戦闘に注ぎ込むことは考えていたが、それに対する万全の態勢を採ることが出来なかった。

現在ミライにある戦闘機は30機強の数しかなく、その内修理中の機体を差っ引けば20機強の機体しかない。それだけでは、例えば相手が爆撃機だけでも全て落せるかわからない。また空中の航空機に対する管制能力も限定されていた。

さらに一部がミライへと針路を変える可能性も捨て切れなかった。何せミライとトリスタニアが5kmしか離れていないのだ。

「絶対にトリスタニアに投弾する機が出る。それにミライも危ない・  
・マニュアルにはあるとはいえ念のためだ。」

彼は新たな命令を下す。

「爆撃・練習両飛行隊はマニュアルに則り、ただちに近隣の予備飛行場へ避難せよ！それから練習機部隊のグルー中佐を呼び出してくれ。」

ミライの基地が空襲される可能性がある場合、練習機や爆撃機といった空中戦が不可能な部隊は近隣の予備飛行場へと退避することが義務付けられていた。

と、そこで才助は思い出した。

「それからロマノフ公国航空隊にも避難命令を出せ！彼らを巻き込みたくはない。」

「了解！」

すぐに部下が復唱し、命令を実行に移す。

現在ミライにはロマノフとの貿易や軍事協力の一環として、ロマノフ公国からのパイロット研修生が派遣されていた。彼らの場合は多少なりと機械への理解があったため、飲み込みが速く、既に7人が単独飛行を許可されており、またOR1型「赤とんぼ」練習機4機とOS2型「バッファロー」戦闘機2機が供与されていた。その

部隊にも才助は避難命令を出した。

そしてようやく飛行場からレシプロエンジンの始動音が聞こえてきた。

「ようやく最初の機体が出撃か。この時間はアラート任務が始まる時間と同じだからな、少しばかり時間が掛かったのは仕方がないか・  
・とにかく、1機でも多く上がってくれ。」

彼の願いが届いたかのように、飛行場中でエンジンの始動音が鳴り響いた。その光景を窓越しに見て、才助は何事か決断した。

「ようし、これから私も出るぞ！今後飛行場の指揮権はレーダー部門司令の大神大佐に一任する。」

その言葉に、その場の誰もが仰天した。

「平賀司令！別に司令が出なくても良いじゃないですか！！大神大佐は義勇軍に来てまだ日が浅いんですよ！それでは部隊の指揮に支障を来たします！！」

その部下の言葉に、他の将兵たちも頷いた。だが、才助はその意見をねじ伏せた。

「今は1人でもパイロットが、1機でも戦闘機が必要な時なんだ。すまないな。まあ、どうせ今の義勇軍の装備じゃ空中管制なんかまともに出来やしないんだ。それにいざとなったら義勇軍では各部隊が各々の意志で活動してくれる。お前たちに苦労はかけるが頼んだぞ。作戦室での指揮は以前やった訓練どおり、直ぐにグルー中佐が来てくれる筈だから、彼に任せるよう言ってくれ。」



義勇軍ではここ1年の間に部隊の大幅な拡張をしてきたが、そのために参謀格の人間の不足が露呈してきた。また指揮系統も問題となった。

前者については、今回呼んだグルーのように戦闘時には手空きになる人間や、本来は参謀として働いていない人間を格上げして参謀に採用することでお茶を濁していた。それに関する訓練も数回だけではあるが行っている。ちなみに海上部隊だけは、もともと戦隊単位で転移してきたため不足していない。

また後者については、一応形式上はトリステイン方面軍の場合は才助を長とするトップダウン形式となっている。しかしながらその代わりとして非常時には各部署に任命された人間の指揮権が最大限に尊重されることとなっていた。

だから例えば大将である才吉が、才助から全権委任された大神大佐に何らかの命令を出す場合でも、大神は通常才助が持っているのと同じ権限を行使して命令に対する質問や拒否を行える。

加えて前線の各部隊は上層から命令がない場合でも、個々に判断をして行動することも認められていた。つまり各長が大幅な権限を持たされていた。ただし、これについては万が一何らかの不合理な結果が出た場合は、当然事態収束後に軍法会議が開かれる。もちろん、上官もそれに問われることとなっていた。

とにかく、才助は指揮を個々の司令や臨時参謀に任せると、自分は一パイロットして戦うべく、飛行場へと向かって走り出したのであった。

この時点で既に通報から10分近く経過していた。

## 悪夢の開戦 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ゼロの使い魔16巻を購入し、パラパラと読んで衝撃の展開に驚きつつ、この話を書きました。最後の指揮権の辺りが不十分かもしれません。もしかしたら大幅な加筆訂正をするかもしれないので。

ただ義勇軍ほどの小規模な軍隊で参謀って何人位必要となるのかな・・・作者もちよつと混乱気味です。

## 悪夢の開戦 下

最初にミライ基地から離陸したのは、戦闘機隊司令の菅野中佐と、彼の妻にして小隊を組むシエスタ特務1等兵曹の乗る「超零戦」だった。2人の機体も才人らと同じく「零戦改」から機種改変を受けていた。

配備以来彼らの機体も稼働率の低さに泣かされていたが、幸いこの時は整備兵たちの苦勞が報われて、揃って飛び立つことが出来た。

「シエスタ、空中戦に関してお前は初陣だ。あまり無茶をしないように。」

「わかっています。」

無線を通じて彼女の声が菅野の耳に入った。その声には初陣でありがちな緊張や焦りなどはなく、むしろ強い意志が込められていた。菅野はその理由もすっかりわかっていた。

現在敵が向かっているトリスタニアには彼女の従姉妹たちが住んでいるのだ。だから彼女には敵から彼らを守るという強い使命感があつて当然であつた。

またシエスタの場合空中戦の実戦こそないが、治安維持任務等での地上支援などはすでに何度も行っている。だから度胸もあつた。それに腕に関しても撃墜王である菅野の認めるところであつた。

2人は高度を上げて、敵編隊がいるであろう方位に針路を取った。

この時最終的に、ミライから迎撃に上がった機体は計28機であった。そしてその中で最新鋭の「超零戦」は菅野らの2機だけで、その他は「零戦改」や「バツファロー」、さらには予備の機体と言った具合にかなり雑多であった。

才人にしても、愛機は整備不慮で飛べなかったために止む無く予備のゼロ戦に乗り込んで出撃している。小隊を組むカルロ3等兵曹もまた予備機であった「コルセア」で出ている。

さらに司令の才助の場合は、飛行場に向かったのが最後の最後であつたために殆どの稼動機体が既に飛び上がるか、パイロットが乗っていたために、これまた予備機材の「隼」に乗り込んで出撃している。

「隼」は改修してあるとはいえ、最高速度は550kmとゼロ戦よりも遅く、武装も12.7mm機銃2基のみと貧弱であつた。そのため整備兵は最初止めたのであるが、才助はそれを振り切つた。

「たつた2基でも機銃は付いていんるんだ。落せないはずがない！行くぞ、コンターツク！！」

そう言つて彼は強引に出撃した。

一方才助から通報を受けた王室でも、早速精鋭の魔法衛士隊に出撃命令が下された。さすがに電話や無線での伝達は出来なかつたが、『風』魔法を使った旧来の方法で各部隊に情報が行つた。

義勇軍に演習で負け続けているとはいえ、さすがは精鋭だけあってわずかな時間に出撃準備を終えたグリフォン・ヒポグリフ・マンティコア、さらに竜騎士隊の合計90騎が早朝の空へと舞い上がった。

そんな中王宮内にも避難命令が出ていたわけだが、一番に避難すべき代王であるルイズは、敵襲の報告を聞くと動きやすい服に着替え、さらに杖を持って部屋から出てきた。

この行動に、当然マザリーニを含む全ての人間が目をむいた。

「殿下、一体何をする気ですか!？」

「私も戦うわ。仮初にも王である以上、民を見捨てるわけにはいかないから。」

この言葉に、マザリーニは困惑した。

「何を仰るのですか!？万が一殿下の身に何か起きたら国政が成り立たなくなります。さあ、まだ時間がございます。郊外へ避難して下さい。」

「私は姫様・・・アンリエッタ前女王陛下からこの国を任された。その責任を果たさず一目散に逃げ出して何が代王よ。それよりも、枢機卿こそ早く皆を纏めて避難しなさい!!もし私が死んだところで、代わりの王なら直ぐにでも立てられるわ。けど、国政の舵取りが出来るあなたには死んでもらうわけにはいかないの!!」

親友であるアンリエッタから任されたこの国を守るのがルイズの

仕事である。それとともに、彼女には大きな責任が伴っていた。その責任を果たすのを自分の役目であるとルイズは強く考えていた。今がその時である。自分が持つ『虚無』の力でトリスタニアと民を守るからこそ、自分に課せられた使命。ルイズはそう確信していた。

だがマザリーニとしても、アンリエッタからルイズを支えるよう託された身だ。ルイズの言葉を認めること等到底出来なかった。

「ダメです！そんなこと認められません！もしどうしてもやると仰るなら、私は力づくでもあなたに避難していただきます！！皆の者も手伝え！！」

マザリーニは周りにいた召使やメイドらにルイズを捕まえるよう命じた。

「クー！！」

ルイズは捕まっていたまるとばかりに、逃げた。廊下を必死で走り、階段を昇り、最終的に彼女はテラスへと辿り着いていた。

王宮のテラスからは、トリスタニアの美しい街並みが一望できる。現在王宮の主となっているルイズもそうだが、前女王のアンリエッタも気に入っていた場所である。

だがこの時ルイズがそこで見たのは、予想外の光景だった。

トリスタニアの西の空に、ポツポツと黒い染みのような物が現れていた。その中には糸を引いているような物もあった。明らかに空中で戦いが起きている。

現にその中を突き進んでくる多数の飛行機らしい影も見えた。その距離は10km程度まで迫っていた。

「バカな！！まだ時間はあるのではなかったのか！？」

後ろから現れたマザリーニが呻くように言った。

その数分前、ミライのレーダーに異常が発生していた。

「これは！？」

「どうした！！」

基地の指揮任務を任せ、マニュアルに従い各方面へ追加の確認や命令をしていたレーダー部隊司令の大神大佐が部下の声に反応した。

「それが、いきなりレーダーの画面上が真っ白になってしまつて。」

大神が見ると、確かにスクリーンには半分ほどにまるでミルクでもぶちまけた様な白い影が映っていた。それを見た瞬間、大神は一体何が起きたのかを悟った。

「嘘だろ！？これは妨害だ！！恐らくアルミチャフだ！！やられた！！」



大神が悔しそうに叫んだ。レーダーの電波を反射しやすいアルミチャフで妨害するのは現代なら常套句とも言うべき戦法だ。そしてその誕生は第二次世界大戦であった。なるほど、確かに敵が知っていてもおかしくはない。

だが義勇軍ではそのことをあまり重視していなかった。そのためレーダーは現代から持ち込んだ製品であるが民生用であり、妨害に対処する術がない。

敵機が接近しているのはわかるが、これでは具体的な位置を測定することが出来ない。さらに、味方機の位置も掴むことが出来ない。こうなると、味方からの無線情報と地図を見比べながら何とかするしかない。

大神は地団太を踏みたい思っていた。

さらに、この時義勇軍は致命的とも言うべき間違いを犯していた。実は最初に通報してきた偵察機が、敵戦闘機に追われていたために敵編隊の距離と速度をそれぞれ打ち間違えていたのである。敵の距離は約100km、さらに速度も330kmであった。

距離にして50km、速度にして30kmの誤差は敵の位置予測を誤らせ、出撃した戦闘機の誘導を混乱させた。結果敵編隊の予測地点に着いても補足できない機が続発した。最初に飛び立った菅野らも、その高速に物を言わせて急行したにも関わらず、敵編隊の後方50km地点にいた。

ここに来て、義勇軍はこれまでの勝利に対する凄まじいしっぺ返しを喰らうこととなった。さらにそのしっぺ返しは、トリスタニアに暮らす人々に対して為されようとしていた。

ちなみに、どうしてトリスタニア近郊で待機して迎撃しなかったのかと思われるかもしれないが、そんなことすれば撃墜した機体の残骸がモロに街へ降り注ぐことを怖れたためであった。だがその配慮が、ここに来て仇となった。

大神から情報を受け取った作戦室のグルー中佐は、すぐに決断した。

「上空の戦闘機は今後、全速力でトリスタニアへ向かい、敵編隊を迎撃するよう命令しろ！！」

もはや残骸が落ちる云々を言っている時ではなかった、こうなったら1機でも多く、爆弾を投下する前に止めなければならない。

しかし、間もなくミライの街の防空砲台から最悪の報告が舞い込んできた。

「トリスタニア近郊にて空戦が発生！！」

最初に迎撃を行ったのは、皮肉にも魔法衛士隊となった。そしてその結果は目を覆わんばかりに悲惨なものとなった。

150kmそこそこのスピードで迎撃を行おうとした魔法衛士隊は敵護衛戦闘機の格好の標的となった。この時護衛には8機のFW190戦闘機と、9機のカーチスH75戦闘機が付いていた。如何

に魔法衛士隊が数で勝っているとはいえ、500km以上のスピードで動き、なおかつ機関銃をもっているそれらに勝てる術等ありはしなかった。

魔法衛士隊の精銳は次々と独仏戦闘機の銃火に絡め採られ、撃ち落されていった。なんとか爆撃機に近付こうとした者もいたが、それさえも爆撃機の防御銃に仕留められてしまい、結局1機の爆撃機も落とせなかった。

この一方的な空戦はわずか5分でかたが付いてしまった。

そんな中で、例外的に奮戦したのが竜騎士隊のルネ・フォンク中尉率いる小隊で、彼らは義勇軍と行った独自の交流から、飛行機が真似できない動きを繰り返して翻弄し、あまつさえ追跡してきた力ーチス戦闘機を地面に激突させ、唯一の戦果を記録している。

だが結局彼ら6騎以外に戦果はなく、帰還したのはたった10騎。その内4騎（つまりルネら以外全員）は大なり小なり傷を負い、二度と飛び立てるような状態になかった。

トリスティン王室の魔法衛士隊はわずか数分で、その栄光の歴史に幕を閉じることとなった。それでも、ほんの1〜2分だけとはいえ時間稼ぎになったことが、彼らにとつての救いであった。

魔法衛士隊が壊滅した頃、ようやくであるが義勇軍の戦闘機が戻ってきた。しかもその機体は才人とカル口のゼロ戦と「コルセア」だった。

「カル口、1機でも多く爆撃機を仕留めるんだ!!」

「了解!!」

だが、ことはそう上手くは行かなかった。間もなく彼らは魔法衛士隊を蹴散らした独仏戦闘機に囲まれたからである。特にFw190は初期型とは言え強敵であった。

「畜生！邪魔するな!!」

才人はゼロ戦自慢の旋回戦に入り、Fw190やカーチスに銃弾を浴びせた。カルロも同様によく奮戦した。しかし、2対16では限度があつた。2人はなんとか3機を撃ち落とし、他の数機にも煙を吐かせた。

そしてようやくそこで、他の義勇軍戦闘機が五月雨式に集まつてきた。彼らの援護によつて、形成は逆転した。独仏護衛戦闘機銃弾切れを起こしつつあつたこともあり、遁走を図つた。彼らは任務を全うしたのであつた。

それによつて才人がようやく爆撃機に向かおうとした瞬間、才人は絶対に見たくなかつた光景を目にした。

先頭を飛ぶハインケルと思われる爆撃機から、黒い塊がポロポロと落ちるのが見えた。その下にはトリスタニアの街並みが広がっている。

「やめろおお!!!!」

才人の叫びも空しく、間もなく市街地の中心に閃光が走つた。ブルドネン街に初弾が投下され、炸裂した瞬間であつた。

## 悪夢の開戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次話から5部に移ります。遅くとも25日には更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1917f/>

---

ゼロ戦才人 第4部 未来への分岐点

2010年10月10日15時11分発行